長田神社境内遺跡発掘調査概報

1990

神戸市教育委員会

長田神社境内遺跡発掘調査概報

1990

神戸市教育委員会

序

神戸市は、ポートアイランド、西神ニュータウン建設に見られる先進的な面と共に、五色塚古墳、処女塚古墳や、北野異人館などの古くからの貴重な文化財が多く存在するという面をあわせもつ都市と言えます。

ここに報告します遺跡も、事代主神を祭る式内社長田神社と、その周辺にひろがる縄文時代から江戸時代に至る集落址とわかりました。

本書の刊行は、祖先が築き上げた歴史を今に生きる我々と、私達の子孫に伝えようとするものにほかなりません。

この目的が達せられるよう念じますと共に、調査および本書の公刊に御協力いただきました関係者各位に厚く感謝申し上げます。

平成2年3月31日

神戸市教育委員会

教育長　福　尾　重　信

例言

1　本書は神戸市長田区長田町に所在する長田神社境内遺跡の発掘調査概報である。

2　発掘調査は、長田地区市街地再開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会及び財団法人神戸市スポーツ教育公社が、神戸市都市計画局の委託を受けて昭和62年２月から同年10月まで実施した。

3　呪符木簡の釈文に関しては、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室綾村宏氏（室長）、橋本義則氏、寺崎保広氏、舘野和己氏の御教示を賜った。

4　発掘調査及び出土遺物の整理に際し、山本三郎氏（兵庫県教育委員会）、山仲進氏、神崎勝氏（妙見山麓遺跡調査会）、石井清司氏（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）から資料提供及び御教示を賜った。

5　調査に当り、神戸市都市計画局長田再開発事務所の協力を得た。

6　調査には補助員として宮田弘一、整理員として井上尚美、大歳陽子、川田美佐、河村直子、釣田弥生、三ツ井奈見子、安井澄美子、山本美穂子が参加した。

7　本書の執筆は、SC区の中世に属す遺構・遺物に関する部分を佐伯二郎が行い、その他の執筆と編集を黒田恭正が担当した。

8　図中の方位は全て磁北である。

本文目次

序
例言

第Ⅰ章　はじめに
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
　第３節　調査の方法 …… 2
第Ⅱ章　位置と歴史的環境
　第１節　遺跡の立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　遺構と遺物の出土状況
　第１節　基本層序 …… 7
　第２節　縄文時代 …… 8
　第３節　弥生時代 …… 11
　第４節　古墳時代 …… 28
　第５節　平安時代 …… 29
　第６節　鎌倉～室町時代 …… 29
　第７節　江戸時代 …… 37
第Ⅳ章　遺物
　第１節　縄文時代 …… 41
　第２節　弥生時代～古墳時代前期 …… 45
　第３節　古墳時代後期 …… 89
　第４節　平安時代 …… 90
　第５節　鎌倉～室町時代 …… 92
　第６節　江戸時代 …… 97
第Ⅴ章　遺物の考察
　第１節　縄文時代晩期凸帯文土器について …… 99
　第２節　弥生時代後期の土器編年 …… 100
　第３節　弥生時代後期の甕の煮沸形態 …… 105

挿図目次

第１図　調査区位置図 …… 3
第２図　周辺遺跡位置図 …… 6
第３図　Ｎ地区基本土層図 …… 7
第４図　Ｓ地区基本土層図 …… 7
第５図　SK01平面・断面・土層図…… 8
第６図　Ｎ地区全体図……９～10
第７図　SB01平面・断面・土層図…… 12
第８図　SB01変遷図…… 13
第９図　SB02平面・断面図（１） …… 14
第10図　SB02平面・断面図（２） …… 15
第11図　SB03～05平面・断面図…… 16
第12図　Ｓ地区全体図……17～18
第13図　SA区全体図 ……19～20
第14図　SB06平面・断面・土層図…… 21
第15図　SB07平面・断面・土層図…… 22
第16図　ST01平面・断面図…… 23
第17図　SD04土器出土状態図…… 24
第18図　SB区土器群平面図…… 25
第19図　SB区土器群Po－９・10平面・断面図 …… 26
第20図　SB区土器群・礫面関係図…… 27
第21図　SB区土器群・土層関係図…… 27
第22図　古墳時代遺構平面図 …… 28
第23図　ST02平面・断面図…… 29
第24図　SB区全体図 ……31～32
第25図　SC区全体図 ……33～34
第26図　SE01平面・断面図…… 35
第27図　SE02平面・断面図…… 35
第28図　SE03平面・断面図…… 35
第29図　SE04、SX03平面・断面図 …… 37
第30図　SE05平面・断面図…… 38
第31図　縄文土器実測図（１）…… 43
第32図　縄文土器実測図（２）…… 44

第33図　縄文土器実測図（３）…… 45
第34図　壺形土器型式分類図 …… 47
第35図　甕形土器型式分類図 …… 48
第36図　高杯・鉢・有孔鉢形土器型式分類図 …… 49
第37図　手焙・器台・小型鉢・小型壺・蓋形土器型式分類図 …… 50
第38図　SB01・02出土土器実測図…… 53
第39図　N地区出土土器・土製品・銅鏃実測図 …… 54
第40図　SB06・07出土土器実測図…… 55
第41図　SK02・04～06出土土器実測図…… 57
第42図　ST01・SA区土器群出土土器実測図 …… 59
第43図　SA区出土土器実測図…… 61
第44図　SB区土器群（礫上）出土土器実測図（１）…… 62
第45図　SB区土器群（礫上）出土土器実測図（２）…… 64
第46図　SB区土器群（礫上）出土土器実測図（３）…… 65
第47図　SB区土器群（礫上）出土土器実測図（４）…… 66
第48図　SB区土器群（シルト層）出土土器実測図（１）…… 69
第49図　SB区土器群（シルト層）出土土器実測図（２）…… 70
第50図　SB区土器群（シルト層）出土土器実測図（３）…… 71
第51図　SB区土器群（シルト層）出土土器実測図（４）…… 73
第52図　SB区土器群（シルト層）出土土器実測図（５）…… 74
第53図　SD04出土土器実測図（１）…… 76
第54図　SD04出土土器実測図（２）…… 78
第55図　SD04出土土器実測図（３）…… 80
第56図　SB･SC区河道内出土土器実測図（１）…… 81
第57図　SB･SC区河道内出土土器実測図（２）…… 83
第58図　SB･SC区河道内出土土器実測図（３）…… 85
第59図　SB･SC区河道内出土土器実測図（４）…… 87
第60図　弥生土器・石器実測図 …… 88
第61図　N・S地区出土須恵器・鉄器実測図 …… 89
第62図　ST02出土須恵器・土師器・鉄器実測図…… 91
第63図　SE02～04出土土器実測図…… 93
第64図　SE02･04･05、SK14･15、SX03･04
出土遺物実測図 …… 96
第65図　甕底部型式分類図 ……102
第66図　煤・炭化物付着状態図（１）……107

第67図　煤・炭化物付着状態図（２）……108
第68図　煤・炭化物付着状態図（３）……109
第69図　煤・炭化物付着状態図（４）……110

表目次

表１　縄文土器出土地点一覧表 …… 11
表２　SB区土器群出土土器一覧表…… 28
表３　縄文土器口縁部集計表 …… 99
表４　縄文土器肩部集計表 …… 99
表５　甕の型式別集計表 ……102
表６　甕の容量別集計表 ……102
表７　甕の底部型式別集計表 ……102
表８　SB区土器群・SD04出土土器構成表 ……103

図版目次

図版１　１　SK01（北から）　２　SK01土器出土状況（北から）
図版２　１　N地区全景（北から）　２　SB01及び周辺柱穴群（東から）
図版３　１　SB01中央炉内土器出土状況（北から）　２　SB01北東隅部土器出土状況（南から）　３　SB02（東から）　４　SB02床面炭化材検出状況（西から）
図版４　１　SA区全景（南から）　２　同上（北から）
図版５　１　SB06（東から）　２　SB07（南から）
図版６　１　ST01（北西から）　２　同上蓋除去後状況（北から）
図版７　１　SD04（西から）　２　同上土器出土状況（東から）　３　同上（北西から）　４　同上土器（164）出土状況（北から）
図版８　１　SB区土器群検出状況（東から）　２　同上（西から）
図版９　１　SB区土器群Po－９検出状況（南から）　２　同上Po－10・14検出状況（西から）
図版10　１　SB区土器群Po－１検出状況（南から）　２　同上Po－６・７検出状況（南から）　３　同上Po－12・13検出状況（東から）　４　同上Po－14検出状況（東から）
図版11　１　SB区中世遺構面（北から）　２　同上SE01及び周辺柱穴群（東から）

図版12　1　ST02（南から）　2　同上供献遺物検出状況（東から）　3　SE02（北から）　4　SE03（西から）

図版13　1　縄文時代晩期土器　2　同上

図版14　1　縄文時代晩期土器　2　縄文時代中期～晩期土器

図版15　弥生時代後期土器（1）

図版16　弥生時代後期土器（2）

図版17　弥生時代後期土器（3）

図版18　弥生時代後期土器（4）

図版19　弥生時代後期土器（5）

図版20　弥生時代後期土器（6）

図版21　弥生時代後期土器（7）

図版22　1　搬入及び特殊な土器　2　弥生時代前期～庄内期土器及び石庖丁　3　N地区出土須恵器　4　ST02出土須恵器・土師器

図版23　1　SD02出土銅鏃　2　SK09出土鉄刀子　3　ST02出土鉄刀　4　同上鉄鎌　5　同上鉄斧頭　6　同上鉄錐　7　SK13出土大観通宝、SX03出土至和通宝

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経過

長田神社境内遺跡は、神戸市長田区長田町に所在する縄文時代から江戸時代に及ぶ集落遺跡である。

この遺跡は、長田町３丁目にある式内社長田神社の社殿が、大正13年に焼失した後、大正15年に再建工事の地ならしを行った際に発見された遺跡で、当時地表下約１m程の青黒い細砂中から土器類が出土したと記録されている(注1)。

試掘調査

今回、神社南東に位置する長田町１丁目・２丁目地区で、再開発事業の計画が興ったため、神戸市教育委員会は、遺構・遺物の有無を確認するため、昭和60年10月22･23両日にわたり、計８ケ所のテスト・ピットを対象地区に設定し調査を実施した。その結果、神社に近接する２丁目地区（N地区）で遺跡の存在が確認されたが、１丁目地区（S地区）は制限された範囲内での調査であったため、目的を達することができず、住宅等の立ちのきが終了した時点で、再度トレンチ調査を実施することとした。

トレンチ調査は、昭和62年２月に行った。南北に長いS地区の北・中央・南にそれぞれ幅約２m、長さ約30mの南北方向のトレンチを設定した。その結果、南端部では現表土下約2.5mで、また中央部でも同じく約1.4mで遺物を含む土層が確認された。さらに北部でも現表土下約１mで、黄褐色砂礫層に達し、同層中にも弥生土器片が含まれる事が判明した。

上の結果を踏まえ、神戸市都市計画局再開発事務所と協議し、全面的な発掘調査を実施することとした。

第２節　調査組織

現地での発掘調査は、昭和62年２月２日～同62年７月31日までを神戸市教育委員会文化財課が、昭和62年８月１日～同62年10月31日までを財団法人神戸市スポーツ教育公社が実施した。調査に伴う組織は以下のとおりである。

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部門）

小林行雄　　京都大学名誉教授

壇上重光　　神戸市立博物館副館長

宮本長二郎　奈良国立文化財研究所建造物研究室長

神戸市教育委員会

昭和61年度

教育長	山本治郎
社会教育部長	金治　勉
文化財課長	増川修三
埋蔵文化財係長	奥田哲通
事務担当学芸員	口野博史・丹治康明
調査担当学芸員	黒田恭正

昭和62年度

教育長	山本治郎
社会教育部長	岡村二郎
文化財課長	西川知佑
埋蔵文化財係長	奥田哲通
事務担当学芸員	渡辺伸行
調査担当学芸員	黒田恭正

財団法人神戸市スポーツ教育公社

理事長	宮岡寿雄
総務部長	藤井　浩
総務課長	静観圭一
総務課主幹	田中　進
総務係長	中嶋龍治
総務係主査	中村善則
調査担当社員	黒田恭正・佐伯二郎

第３節　調査の方法

調査は、長田町２丁目にあるＮ地区（約650㎡）と同１丁目のＳ地区（約1,400㎡）にわかれる。

Ｎ地区　Ｎ地区は、調査地全域を覆うように５m四方の小地区を設定し、遺物の取り上げを行った。また、遺跡の位置に関して正確を期すため、調査地にＸ＝－147473000、Ｙ＝74908000のポイントを設定し、遺構図の基準点とした。

Ｓ地区　Ｓ地区は、再開発ビル建設工事が調査と同時進行となったため、その都合上調査地を３分割し発掘を行った（南からSA・SB・SC区）。遺物の取り上げはＮ地区同様５m四方の小地区毎に行った。またSA～SC区の内、弥生時代の遺構が集中するSA地区については、調査区内に、Ｘ＝－147617000、Ｙ＝75011000のポイントを設定し、遺構図の基準点とした。

第II章　位置と歴史的環境

第１節　遺跡の立地

長田神社境内遺跡は、六甲山南麓にひろがる東西に長い平野部の西端近くにあり、東西両側を丘陵によって挟まれた、苅藻川が形成した沖積地上に立地している。

苅藻川は、過去幾度か流路を変えていたものと思われ、今回の調査でも、Ｎ地区の南東端とＳ地区の北約⅔の範囲（南北長約120m）は弥生時代後期～古墳時代前期にかけての旧河道に当っていた。

Ｎ地区の弥生時代の遺構面の標高は約14.40m（T.P）、Ｓ地区のそれは、約12.00m（T.P）を測る。

第１図　調査区位置図　１：3,000

第2節　歴史的環境

旧石器・縄文時代　現在、周辺での最古の人類の足跡は、会下山の丘陵上で採集されたナイフ形石器である（会下山遺跡）(注2)。続く縄文時代早期の遺物は、須磨区境川遺跡で出土した押型文土器と、チャート製の異形磨製石器のみであったが(注3)、昭和57・58両年にわたる宇治川南遺跡の調査でも押型文土器が出土した(注4)。中期では古く名倉町遺跡が報告されており(注5)、宇治川南遺跡でも船元Ⅰ式～里木Ⅱ式までの土器が出土している。この遺跡は後期以降も継続して営まれ、前半～後半の土器を見ることができる。昭和61年に調査された楠・荒田町遺跡では宮滝式の土器と堅果類が土坑から出土している(注6)。晩期になると遺跡数は若干増加し、戎町、三番町、五番町(注7)、大開(注8)、三川口町、宇治川南遺跡で土坑や土器片が検出され、宇治川南遺跡では、晩期後半の石棒や土偶も出土している。

弥生時代　前期では戎町(注9)、松野(注10)、大開(注11)、三川口町(注12)、楠・荒田町(注13)、宇治川南(注14)の各遺跡で、遺構、遺物が確認されている。戎町遺跡は昭和62年度調査で、前期後半以前の水田遺構、前期後半の河道、ピットや、土坑内に円形に杭を打った特殊遺構等と共に、完形品を含む多量の土器、木製農具が出土した。大開遺跡は、前期前半の環濠集落で、長径約70mを測る環濠の内外から竪穴住居址が検出されている。竪穴住居址の炉内や、環濠内から弥生時代前期前半の土器と、縄文時代晩期の凸帯文土器の系譜上にある土器が共伴し、縄文から弥生への貴重な資料を提示している。宇治川南遺跡では、前期前半に溯る土器を含む多量の土器が出土し、楠・荒田町遺跡では今までに約50基の前期末～中期初頭の貯蔵穴が検出されている。

中期になると、沖積地上に立地する戎町、楠・荒田町遺跡でもひき続き集落が営まれるが、中葉～後半にかけて標高30～70m以上を測る丘陵上に会下山、東山(注15)、河原(注16)、熊野(注17)などの集落が出現する。河原遺跡は、畿内第Ⅲ～Ⅳ様式の壺形土器にゴホウラ製貝輪が40個近く納められていた事で著名である。楠・荒田町遺跡では当時の墓制―方形周溝墓―が明らかにされた(注18)。

後期の遺跡は、松野、神楽、長田神社南遺跡をあげる事ができるが、その具体的様相は、今回の長田神社境内遺跡の調査まで不明であった。

古墳時代　弥生時代末から古墳時代前期の集落では、戎町、鷹取町(注19)、宇治川南遺跡が知られる程度であるが、前期古墳は、妙法寺川、苅藻川、湊川の各水系毎に得能山古墳(注20)、会下山二本松古墳(注21)、夢野丸山古墳(注22)の3基が相次いで築造される。

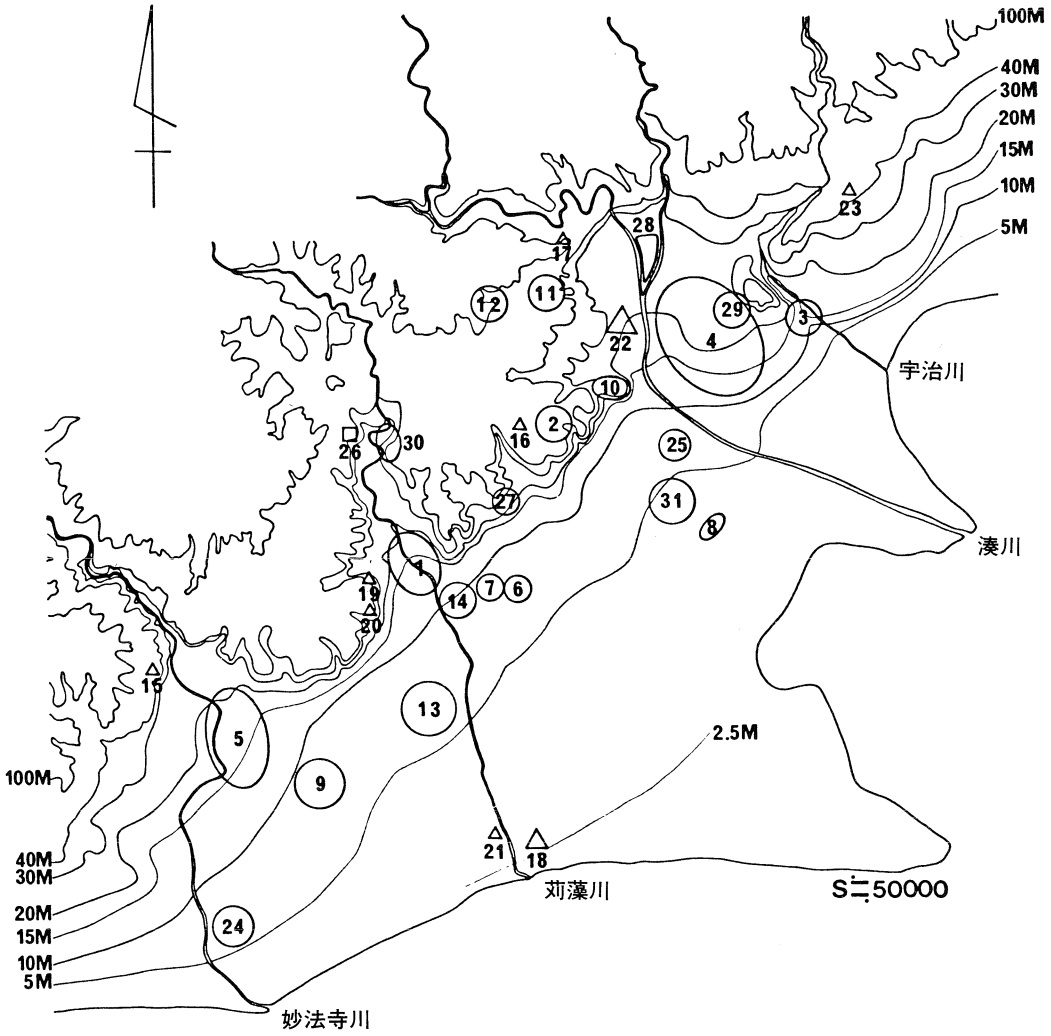
中期には、鰭付円筒埴輪を持つ大型前方後円墳と推定されている念仏山古墳(注23)があるが、既に消滅しており詳細を知り得ない。当時の集落は三番町遺跡で確認されており、竪穴住居址や土器溜りの他、大溝内から小型仿製鏡が検出されている。また神楽町遺跡では、井戸状遺構から滑石製勾玉・双孔円盤・小玉が出土した(注24)。

後期古墳も内容の知られるものは少ないが、西方の丘陵上に存在した野々内古墳や観音山古墳(注25)は、横穴式石室を有するもので、6世紀後半～末の遺物が採集されている。この他苅藻川流域には、いくつかの古墳群があったとされるが、河口部に近い雀塚(注26)が木棺直葬墳で、金環、鉄刀等を出土している事が知られる程度である。また湊川西方にあった中尾古墳(注27)からは、刳抜式家形石棺が出土し、横穴式石室を内部主体とし、周濠を巡らす前方後円墳と考えられる中宮古墳(注28)からは、豊富な遺物が出土している。松野遺跡は(注29)、5世紀末～6世紀始めの周囲に柵・溝を巡らす掘立柱建物群が検出され、特殊な性格を持つものと推定されている。神楽遺跡(注30)では、これとほぼ同時期の掘立柱建物や、竪穴住居址が発掘され、韓式系土器やソロバン玉形の滑石製紡錘車等が出土した。鷹取町(注31)、楠・荒田町遺跡(注32)では6世紀前半の、湊川遺跡(注33)では6世紀末葉の竪穴住居址が検出された。苅藻川を溯った林山町では、6世紀後半の窯址(注34)も発見されている。

奈良時代以降　奈良時代には、当地は雄伴郡に属し、山陽道が通り、須磨の駅も近くに置かれるようになるが、この頃の遺跡で知られているものは少ない。白鳳前期の重圏文縁重弁蓮花文軒丸瓦をはじめ、奈良・平安時代の瓦を出土した室内遺跡(注35)が郡衙推定地として知られるのみであったが、最近、神楽遺跡(注36)で奈良又は平安時代と考えられる1辺約1mの柱掘形を持つ掘立柱建物が検出されている。

会下山二本松古墳の墳丘から出土した経塚は平安時代に属するものである(注37)。神楽遺跡(注38)の溝からは、「東福」の墨書がある土器、緑釉陶器、灰釉陶器等が出土している。

平安時代末期には、平清盛が神戸に居を移し、別邸雪之御所を造営すると共に大輪田の泊の修築、福原遷都を行った。これに関した遺跡は、長く不明のままであったが、昭和57年度の神戸大学附属病院内の調査で(注39)で、大型の柱掘形を持つ掘立柱建物址や、2重の堀が検出され、福原京の様相を知る手がかりとなった。



1．長田神社境内遺跡　2．会下山遺跡　3．宇治川南遺跡　4．楠・荒田町遺跡　5．戎町遺跡　6．三番町遺跡　7．五番町遺跡　8．三川口遺跡　9．松野遺跡　10．東山遺跡　11．河原遺跡　12．熊野遺跡　13．神楽遺跡　14．長田神社南遺跡　15．得能山古墳　16．会下山二本松古墳　17．夢野丸山古墳　18．念仏山古墳　19．野々内古墳　20．観音山古墳　21．雀塚古墳　22．中尾群集墳　23．中宮古墳　24．鷹取町遺跡　25．湊川遺跡　26．林山古窯址　27．室内遺跡　28．雪之御所　29．神大附属病院内遺跡　30．名倉町遺跡　31．大開遺跡

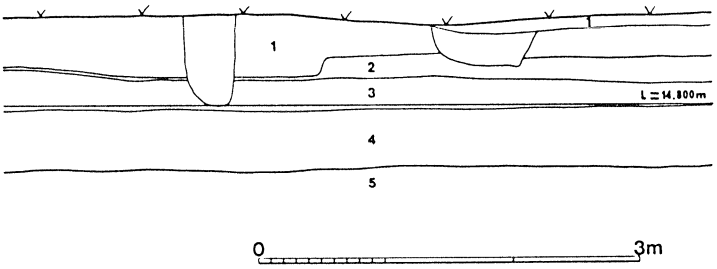
第２図　周辺遺跡位置図

第Ⅲ章　遺構と遺物の出土状況

第１節　基本層序

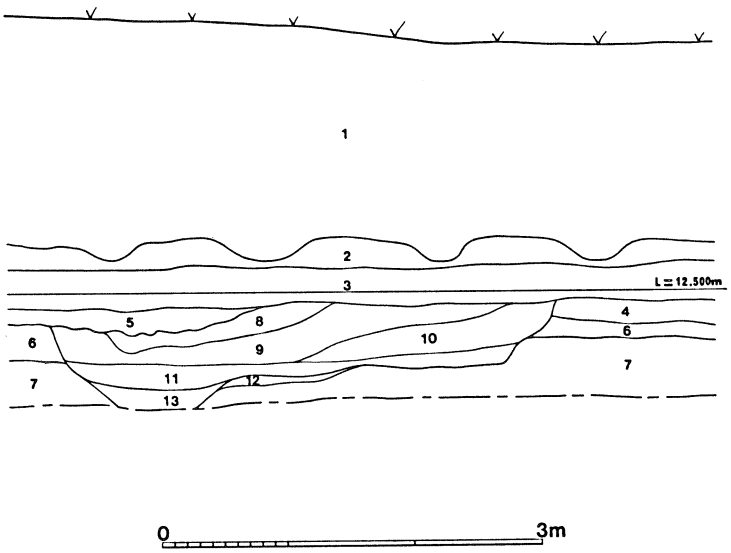
Ｎ地区　Ｎ地区の基本層序は、１．盛土、２．淡黄灰色砂質土、３．暗灰色砂質土、４．暗茶灰色粘質土（第１遺構ベース土）、５．黄灰色～青灰色シルト（第２遺構ベース土）となる。ただし、南東部⅔は、後世の削平により１の直下が、５となっていた。３には弥生時代～奈良・平安時代までの遺物を含み、４には縄文時代～弥生時代の遺物が含まれる。

Ｓ地区　Ｓ地区の基本層序は、１．盛土（明治34年の新湊川掘削時の排土）、２．耕作土、３．灰黄色砂質土、４．暗青灰色シルト～暗黄灰色砂質土（遺構ベース土）となる。SB・SC区については、後世の削平により３相当層がなく、２直下は暗青灰色～黄褐色砂礫土がひろがり、遺構面となっていた。



１．盛土
２．淡黄灰色砂質土
３．暗灰色砂質土
４．暗茶灰色粘質土（第１遺構ベース土）
５．黄灰色～青灰色シルト（第２遺構ベース土）

第３図　Ｎ地区基本土層図

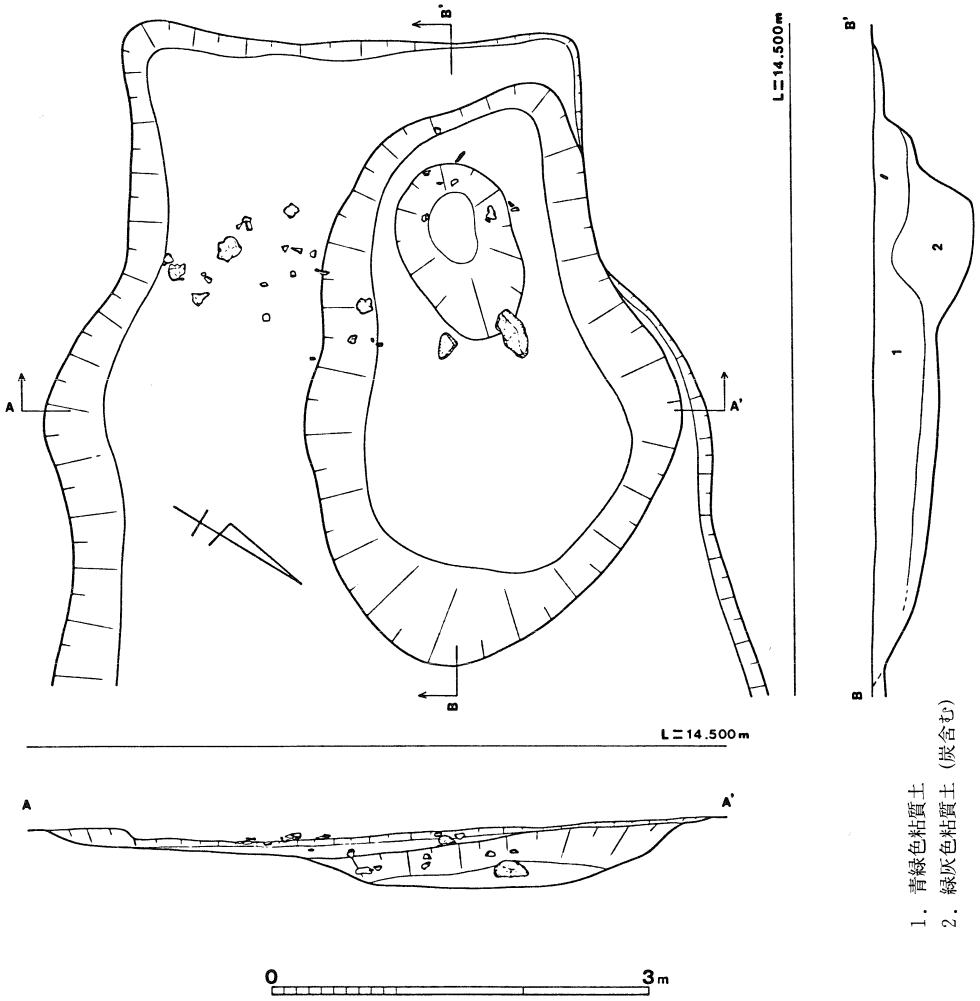


１．盛土
２．耕土
３．灰黄色砂質土
４．暗青灰色～暗黄灰色砂質土（遺構ベース土）
５．淡黄色粗砂質土
６．茶灰色～黄灰色砂質土
７．褐灰色砂質土
８．暗褐色砂質土
９．暗黄褐色砂質土
10．灰褐色砂質土
11．暗褐色粘質土
12．暗灰褐色砂質土（やや粘性）
13．暗灰褐色砂質土（８～13はＳＫ０２埋土）

第４図　Ｓ地区基本土層図

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構は、Ｎ地区で検出された土坑１基のみである。



第５図　ＳＫ０１平面・断面・土層図

SK01　（第５図・第６図）

弥生時代のSB05のベース土を約10cm下げた際、輪郭を確認したものである。東西約4.6m、南北約３m、深さ約50cmを測る不整楕円形土坑で、南西部にさらに東西約1.4m、南北約１m、深さ約40cmの凹部を持つ。土坑周囲には、東西約７m、南北約3.6～６m、深さ10cmを測る浅い長方形の落ち込みがあり、

1
2
3
4
5
6
7
8
9
I
H
G
F
E
D
C
B
A
SK12
SD02
SK01
SX01
SB05
SD01
X=147473000
SB02
Y=74908000
SB03
SB04
SB01
SD03
0
10m

第6図　N地区全体図

土坑上部のものと区別できない、青緑色砂質土が堆積していた。

遺構検出中に出土した土器には、滋賀里Ⅳ式とそれ以降の土器が混在するが、長方形の落ち込みと土坑内の出土土器は、前者に限られる。土坑内からは、この他、焼土塊や長径約45cmの石が出土し、底部付近には灰・炭を含む緑灰色粘質土の堆積が見られた。

遺構に伴わない土器　N地区の第2遺構ベース土や、SA区の遺構ベース土を若干下げた段階で、検出された例が多い。出土個所での遺構検出に努めたが、明確な遺構は見られなかった。また、SB・SC区の旧河道内からも土器が出土している（表1）。

番　号	出土地点	出土層位	番　号	出土地点	出土層位
第31図1	SK01	青緑色砂質土	第32図23	N・D－2	暗茶灰色粘質土
2	N・G－6	青灰色シルト	24	SB・河道内	褐色砂礫土
3	N・G－6	青灰色シルト	25	N	近世落ち込み内
4	SB・河道内	褐色砂礫土	26	SC・河道内	褐色砂礫土
5	SB・河道内	褐色砂礫土	27	N・SD03	暗茶灰色粘質土
6	SB07	埋土中	28	N・G－6	青灰色シルト
7	N・D－2	暗茶灰色粘質土	29	SB・河道内	褐色砂礫土
8	N・G－6	青灰色シルト	30	SB01－a	埋土中
9	N・B－3	攪　乱	31	SA・D－4	暗黄灰色砂質土
10	N・C－3	暗茶灰色粘質土	32	N・G－6	青灰色シルト
11	N・D－2	暗茶灰色粘質土	第33図33	SB・河道内	褐色砂礫土
12	N・C－2	暗茶灰色粘質土	34	N・G－6	青灰色シルト
13	SB01－a	埋土中	35	N・SX01	暗茶灰色粘質土
14	SA・D－4	暗黄灰色砂質土	36	SB	礫　上
15	SB	礫　上	37	SB・河道内	褐色砂礫土
16	N・G－6	青灰色シルト	38	SK01	青緑色砂質土
17	N	近世落ち込み内	39	SK01	青緑色砂質土
18	SB・河道内	褐色砂礫土			
19	SB・河道内	褐色砂礫土			
20	SB・河道内	褐色砂礫土			
21	N・D－3	暗茶灰色粘質土			
22	N・G－6	青灰色シルト			

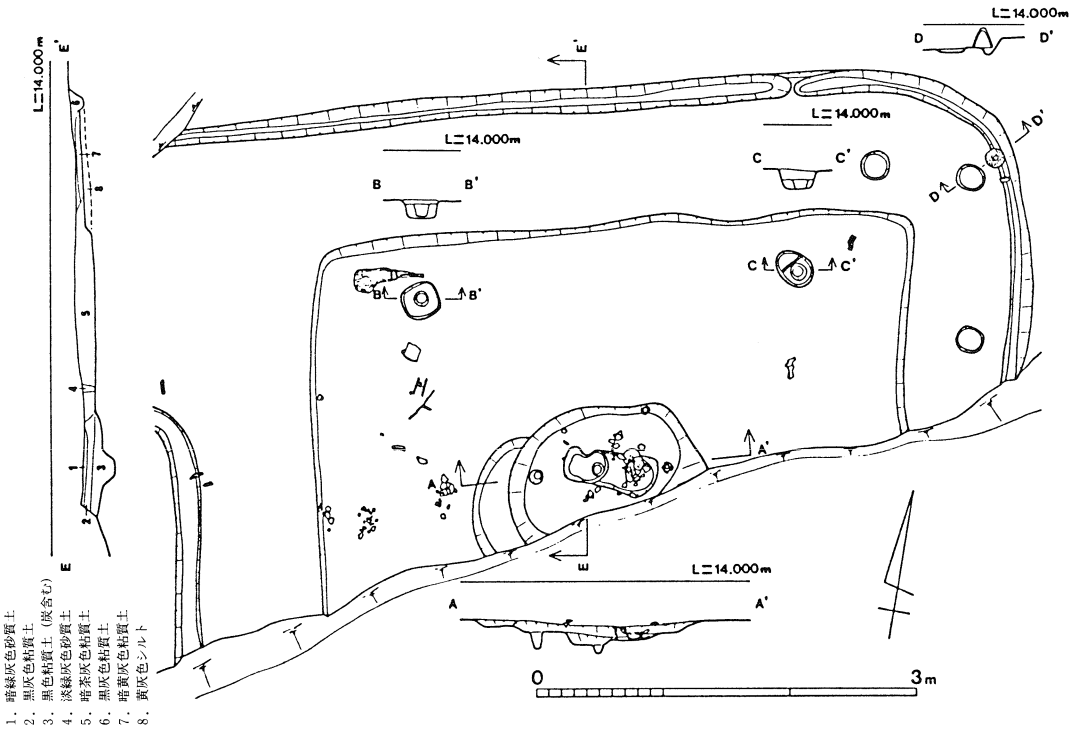
表1　縄文土器出土地点一覧表

第3節　弥生時代

弥生時代の遺構は、N・S両区から竪穴住居址4、掘立柱建物址3、壺棺墓1、溝4の他、土坑、ピット、不明遺構が検出された。出土遺物には、前期～

後期までの土器、銅鏃、石庖丁等がある。土器は後期に属すものが大半を占め、遺構もこの期のものである。以下、N・Sの地区毎に記述する。

N地区　　N地区からは、竪穴住居址2、掘立柱建物址3、溝3の他、ピット、不明遺構が検出された（第6図）。



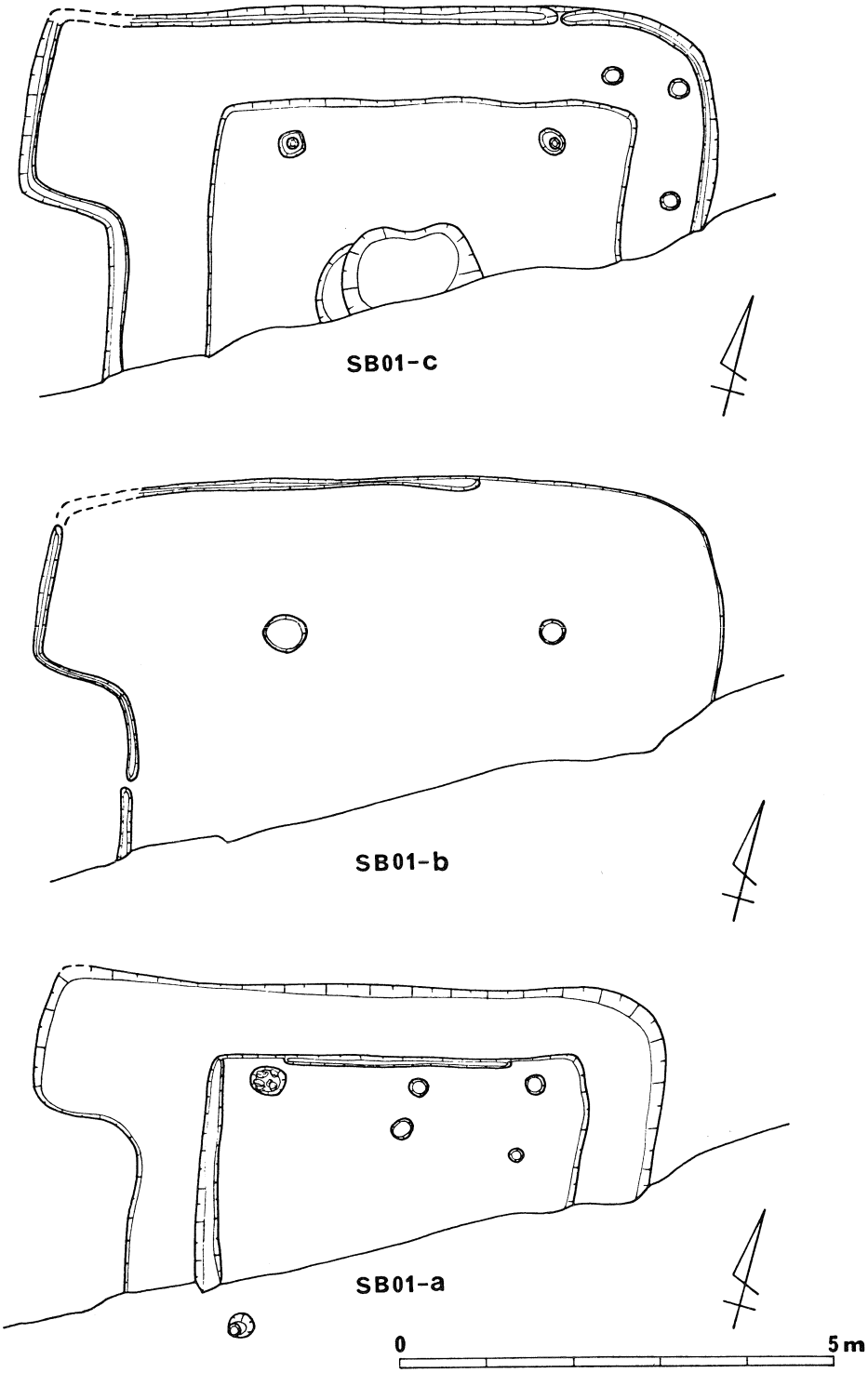
第7図　ＳＢ０１平面・断面・土層図

SB01　（第7図・第8図）

SB01には2度の拡張が見られる。当初は東西6m、南北3.6m以上を測る方形竪穴住居址で（SB01－a）、西辺部に幅1.5m、長さ1.2mの方形張り出し部と、床面の北・西・東に幅約70cm、高さ4cm以上の地山削り出しによるベッド状遺構（以下ベッドと約す）を持つ。主柱穴は、北西、北東隅から検出された。南西の断面に残る柱穴もその深さから、SB01－aに伴う可能性が高い。北西の柱掘形内には拳大の石が詰められていたが、ここから外面に波状文を描く二重口縁壺の口縁部片が出土した（第60図－244）。

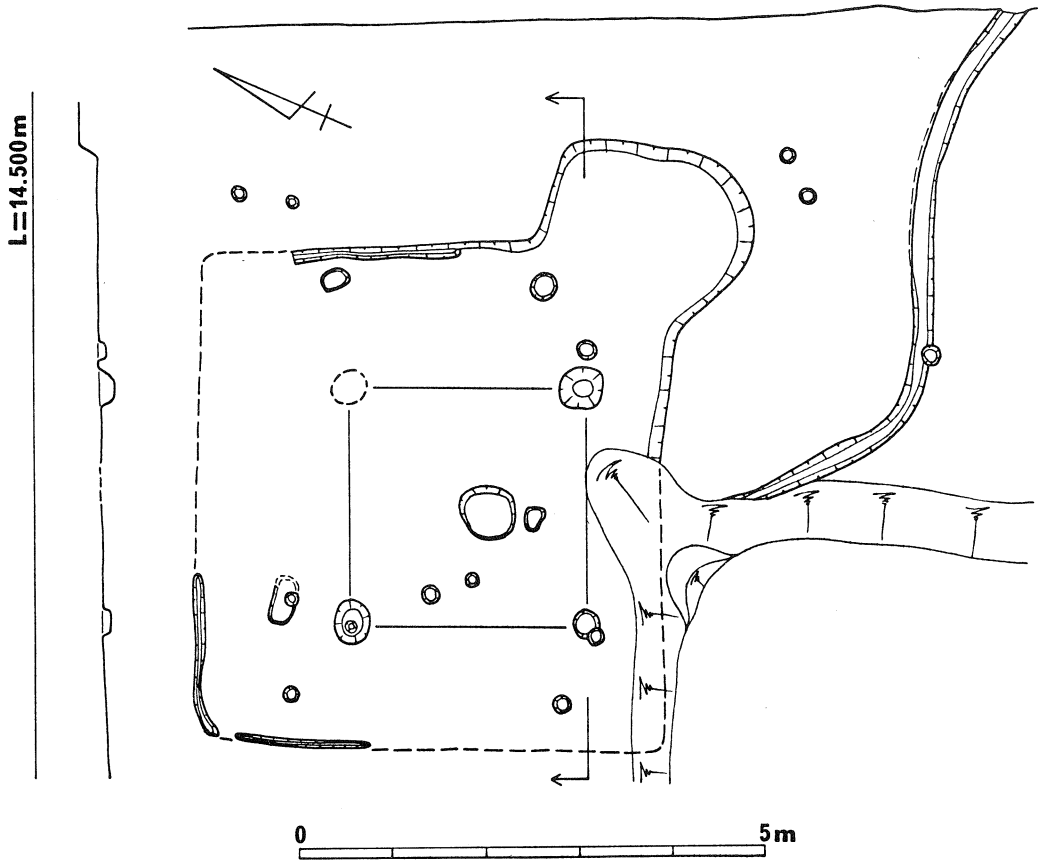
最初の拡張は、北へ60cm、東・西両側に40cm行っている。ベッドを付設したかどうかは、次の拡張時の削平で明らかでない（SB01－b）。

次の拡張は主に西側になされ、約30cm拡げられている（SB01－c）。ただし、北・東壁は前回より若干内側となる。最終的な住居址の東西長は6.8mである。



第８図　ＳＢ０１変遷図

床面の東・西・北に幅80cm、高さ10cmの貼り付けによるベッドと、その内側に幅10cm、深さ５cmの周溝が巡る。床面中央に東西1.6m、南北90cm以上、深さ約10cmの炉を持つ。炉は中央部がさらに約10～20cm凹む。炉内には、炭・灰の堆積があり、投棄された土器が出土した。北隅部のベッド上から完形の鉢形土器が出土した。床面の一部に炭化材が残存し、埋土中にも炭の小片を含むことから、焼失住居である可能性がある。

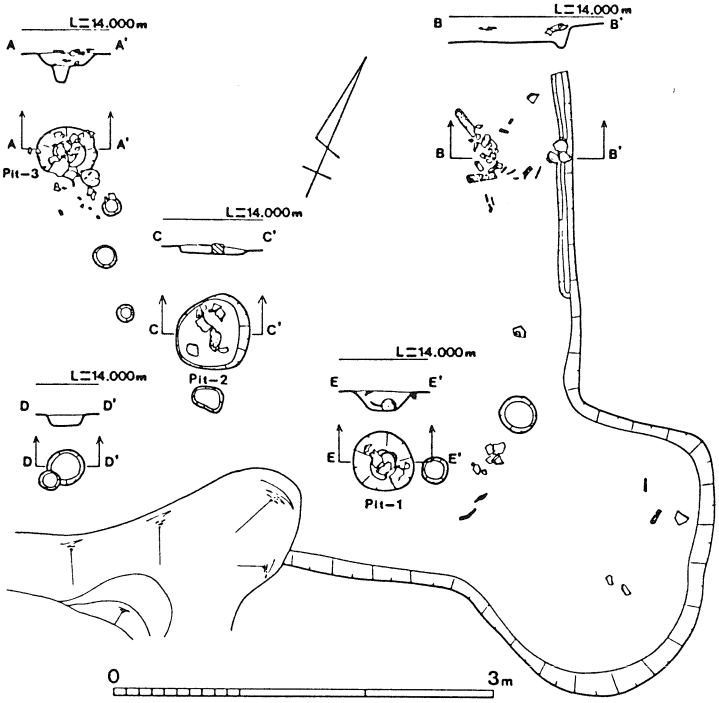


第９図　ＳＢ０２平面・断面図（１）

SB02　（第９図・第10図）

東西５m、南北５mの方形を呈する竪穴住居址で、東南隅部に幅1.4m、長さ1.4mの張り出し部を付設する。柱穴は３ヶ所確認されたが、他の１本は、後世の井戸で破壊されていた。中央土坑（Ｐ－２）は、直径60cm、深さ５cmを測る。内部に炭・灰等の堆積は見られない。

柱穴（Ｐ－１・３）及び中央土坑には土器の投棄があり、特にＰ－１の底部からは完形の有孔鉢が出土した。住居址北東部では、床面から浮いた状態で小



第10図　ＳＢ０２平面・断面図（２）

型鉢が３個体出土した。またこの付近に炭化材が床面に残存し、SB01と同じく焼失住居の可能性がある。

SD01　尚、SB02南側に幅20cm、深さ北西部で10cm、南東部で35cmを測るＬ字形の溝（SD01）があり、SB02の排水溝とも考えられるが、両者の接点部が後世の落ち込みで破壊され、断定できない。

SB03　（第11図）

１間×１間以上（2.7m×２m以上）と考えられる掘立柱建物址である。

SB04　（第11図）

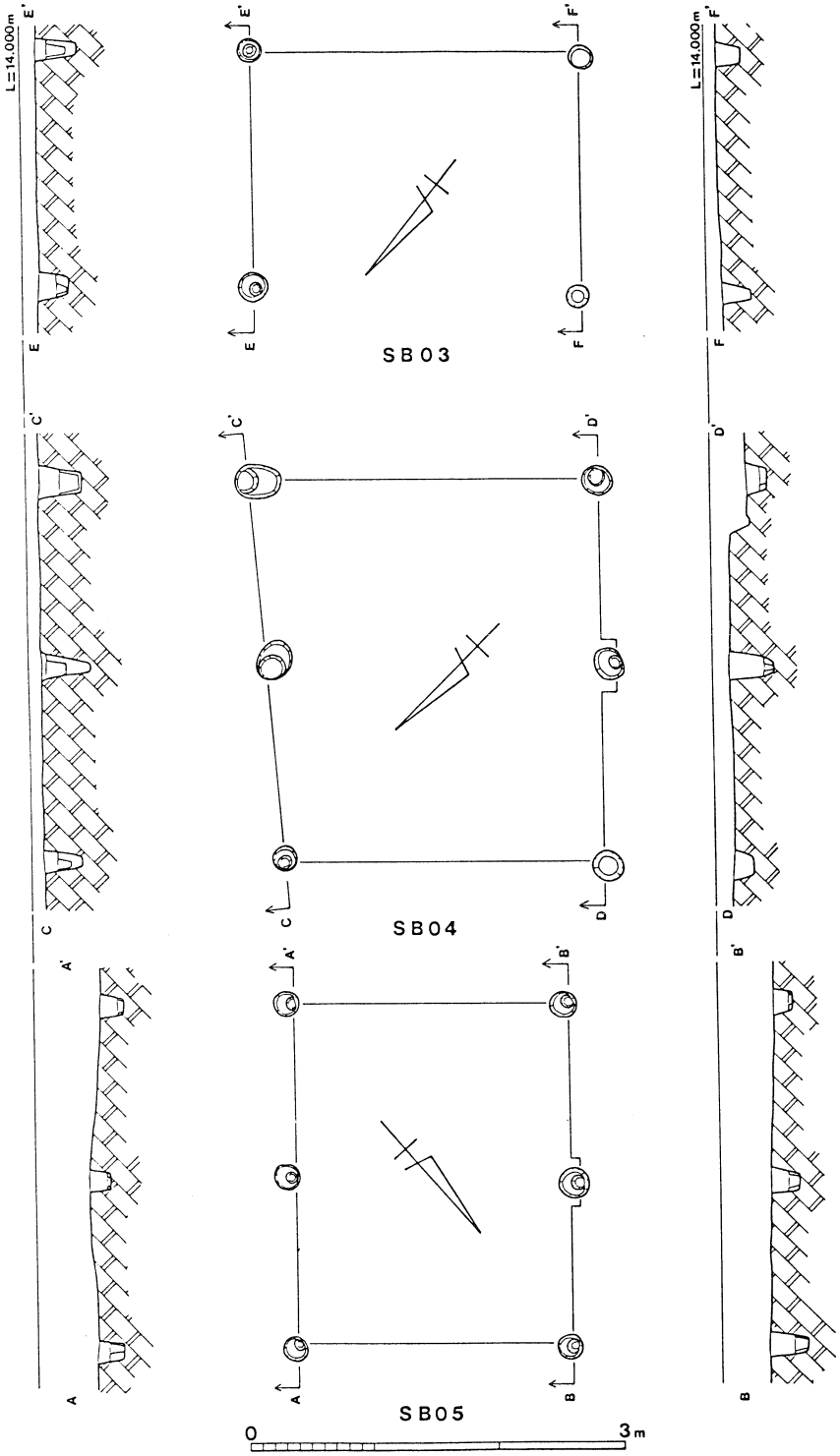
１間×２間（2.8m×3.1m）の掘立柱建物址で、竪穴住居址SB01に切られている。南隅部の柱穴はSB01－ｃのベッド除去後検出された。

SB05　（第11図）

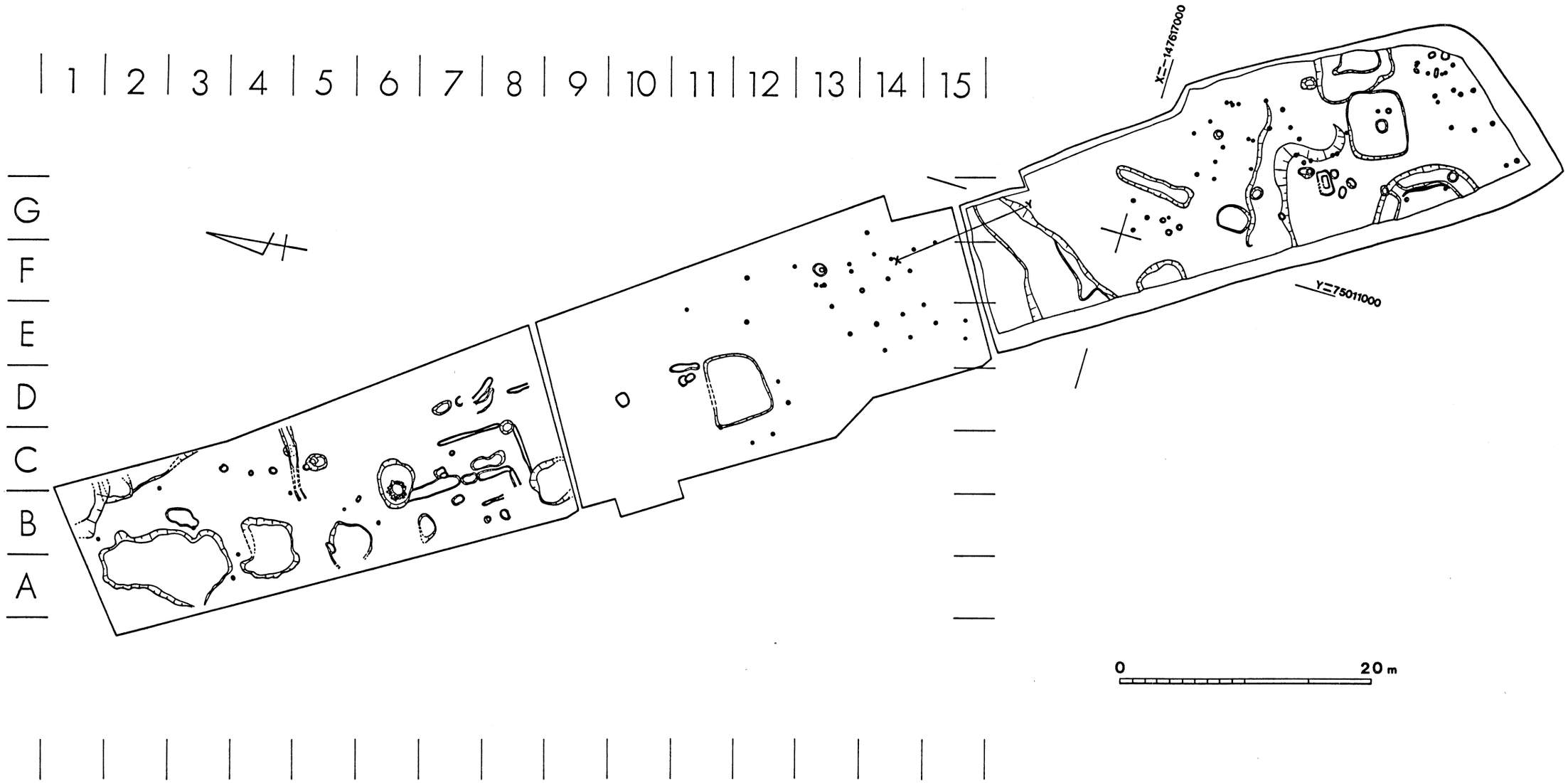
１間×２間（2.4m×2.8m）の掘立柱建物址である。

この他、SB03・04の周囲で多数のピットを検出したが、建物としてまとまるものはなかった。SB03～05及びこれらピットの時期は、遺物が極めて少なく明確でないが、弥生時代後期の土器小片を出土したものがある事から、この時期と考えて大過ないものと考えられる。

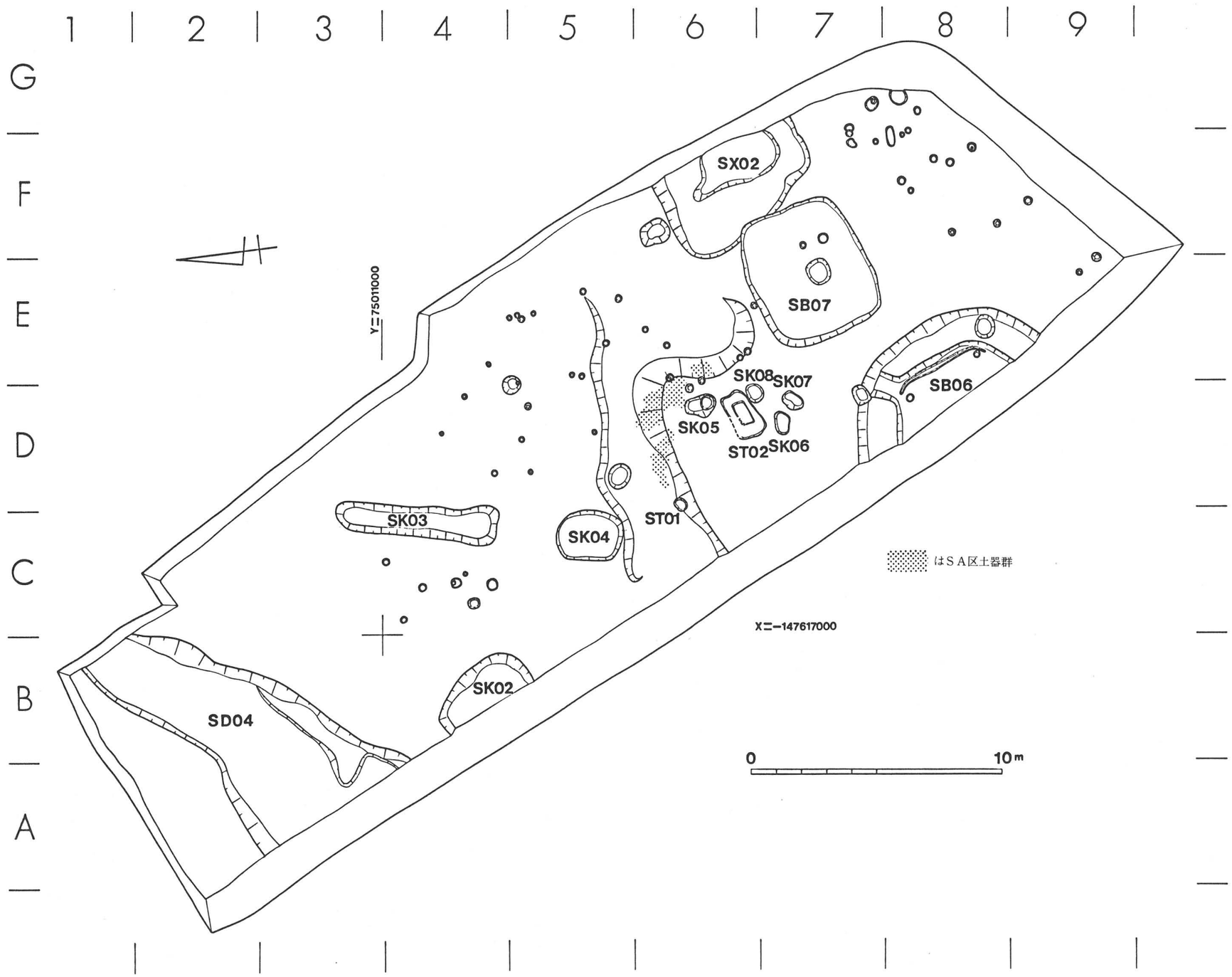
SD02　（第６図）



第11図　ＳＢ０３～０５平面・断面図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
G
F
E
D
C
B
A
X=147617000
Y=75011000
0
20m

第12図　S地区全体図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
G
F
E
D
C
B
A
SX02
SB07
SB06
SK08
SK07
SK05
ST02
SK06
SK03
SK04
ST01
SK02
SD04
Y=75011000
X=-147617000
はＳＡ区土器群
0
10m

第13図　ＳＡ区全体図

調査地東端近くで検出された幅40cm、深さ30～50cmの南北溝で、埋土中から庄内甕の口縁部片と共に銅鏃が１本出土した。

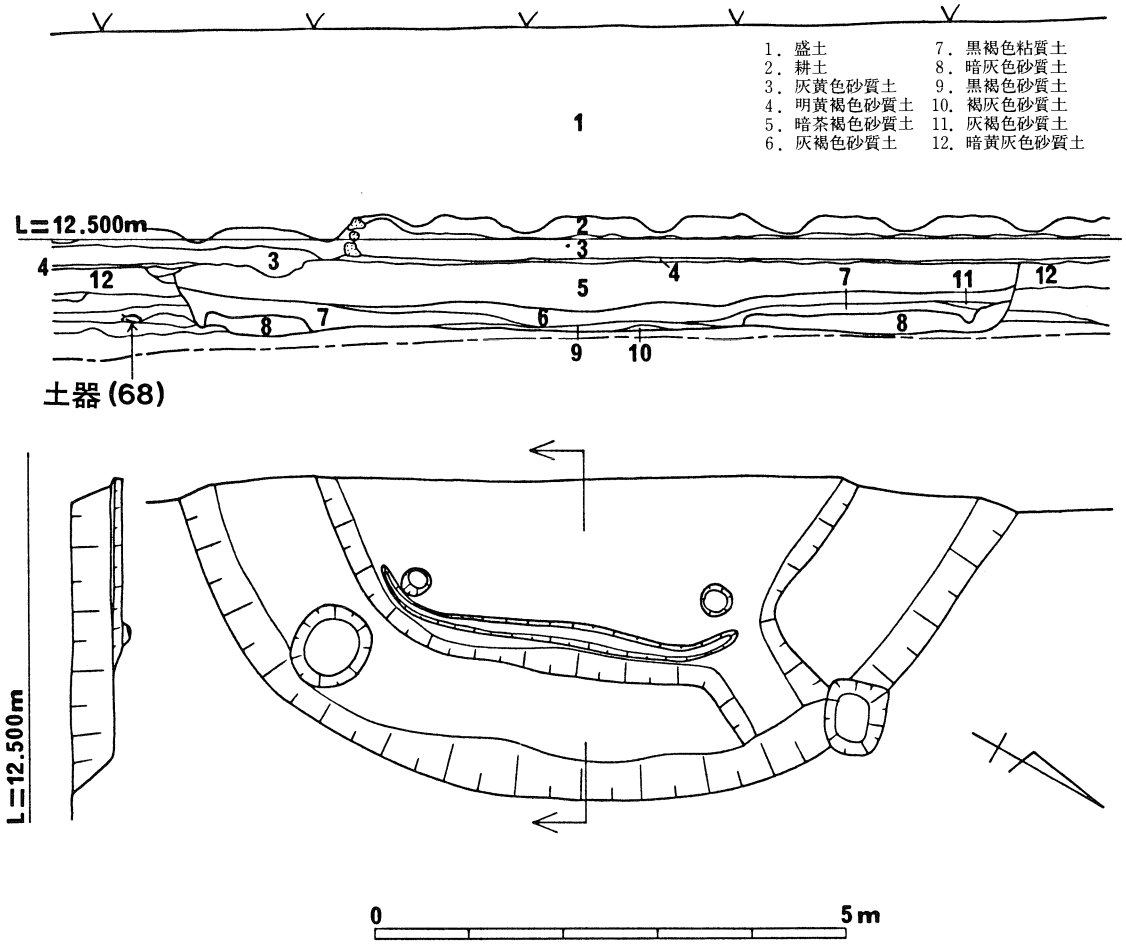
SD03　（第６図）

SB01に切られた小溝で、幅50cm、長さ2.9m、深さ40cmを測る。弥生時代後期の土器片と共に、縄文時代晩期の深鉢片が出土した。

SX01　（第６図）

削平が激しく、全体を知り得ないが、東西長3.1m程のもので、深さは10cmと浅い。南隅部に径40cm、深さ10cmのピットがある。後期の細頸壺の体部片が出土した。

Ｓ地区　Ｓ地区は既述のようにSA～SC区に細分されるが、SB・SC両区は苅藻川旧河道となっており、土器だまり等が検出されたが、遺構はSA区に限定されている（第12図）。Ｓ地区からは竪穴住居址２、壺棺墓１、溝１、土坑、ピットの他土器群がSA、SB区で各１ヶ所検出された（第13図）。

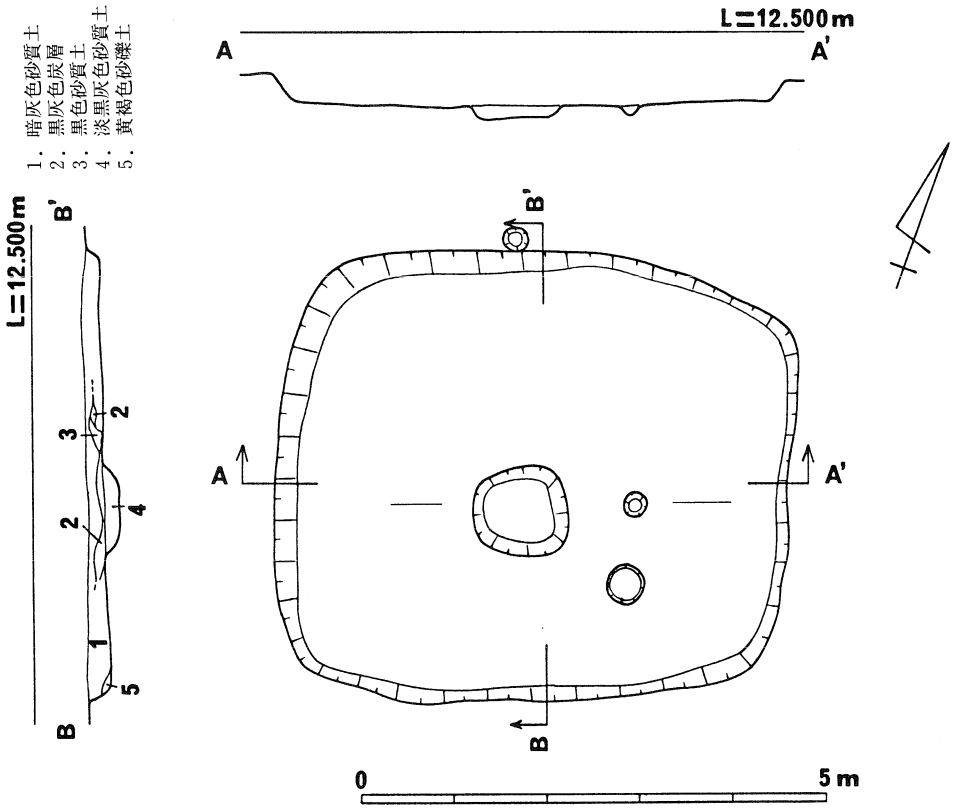


第14図　ＳＢ０６平面・断面・土層図

SB06　（第14図）

推定直径約９m、深さ約70cmを測る六角形竪穴住居址である。床面の壁添いに幅約１m、高さ15cmの盛土によるベッドを持つ。ベッドは北東コーナー部でとぎれる。主柱穴はベッドコーナー部の内側で２ヶ所検出された。両者共、直径約30cm、深さ約10cmのものである。ベッド内側の壁際に一部周溝を巡らす。

床面からの出土遺物は極めて少ない。住居址埋土は大きく３層に分かれ、最上層から多くの土器片が出土した。また最下層の床面に近い個所で、磨製石器の破片が出土したが、小片のため全形を知り得ない。



第15図　ＳＢ０７平面・断面・土層図

SB07　（第15図）

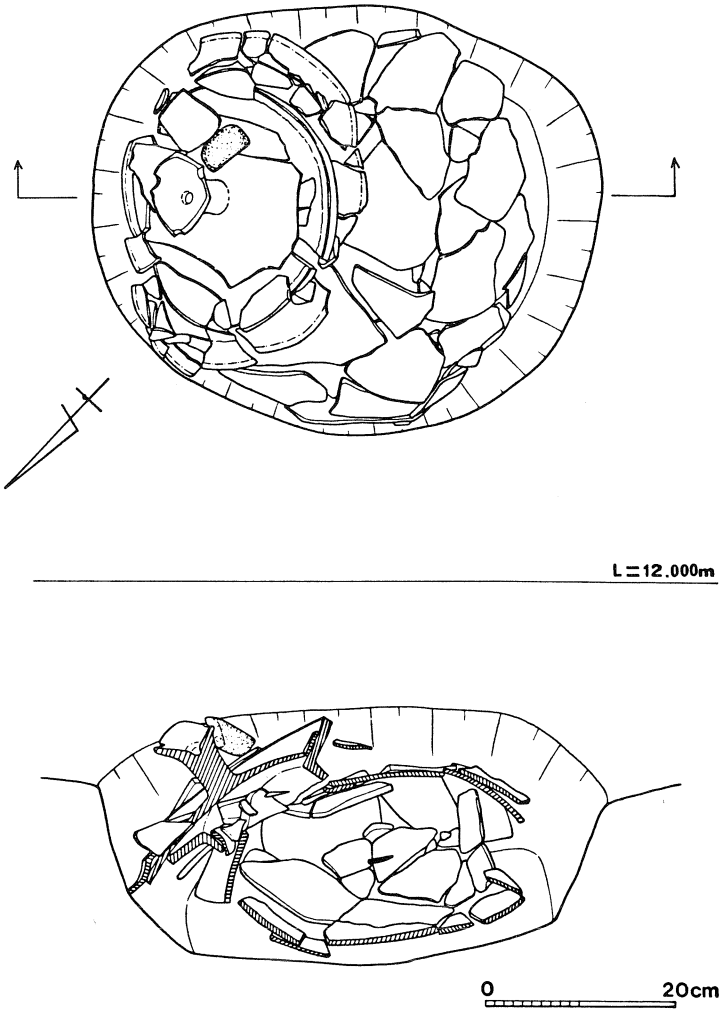
東西5.5m、南北4.8m、深さ20cmの隅円長方形の竪穴住居址である。主柱数は４と考えられるが、検出されたのは南東隅の柱穴のみである。直径40cm、深さ５cmを測る。中央炉は1.0m×0.9mで深さ20cmを測り、内部から炭が検出された。炉壁に赤変化は認められない。

床面遺物も少なく、南東部でやや浮いた状態で出土した高坏坏部があるに過

ぎない。ただこの住居址が完全に埋没する直前に、体部に穿孔を持つ完形の壺形土器を含む土器群が投棄されていた。

ST01　（第16図）

長さ50cm、幅45cm、深さ25cmの楕円形土坑内に、口縁端部と底部とを打ち欠いた大型の壺形土器を棺に転用して収めたもので、脚裾部を欠いた高坏で蓋をしていた。人骨・副葬品共に検出されなかった。



第16図　ＳＴ０１平面・断面図

SD04　（第17図）

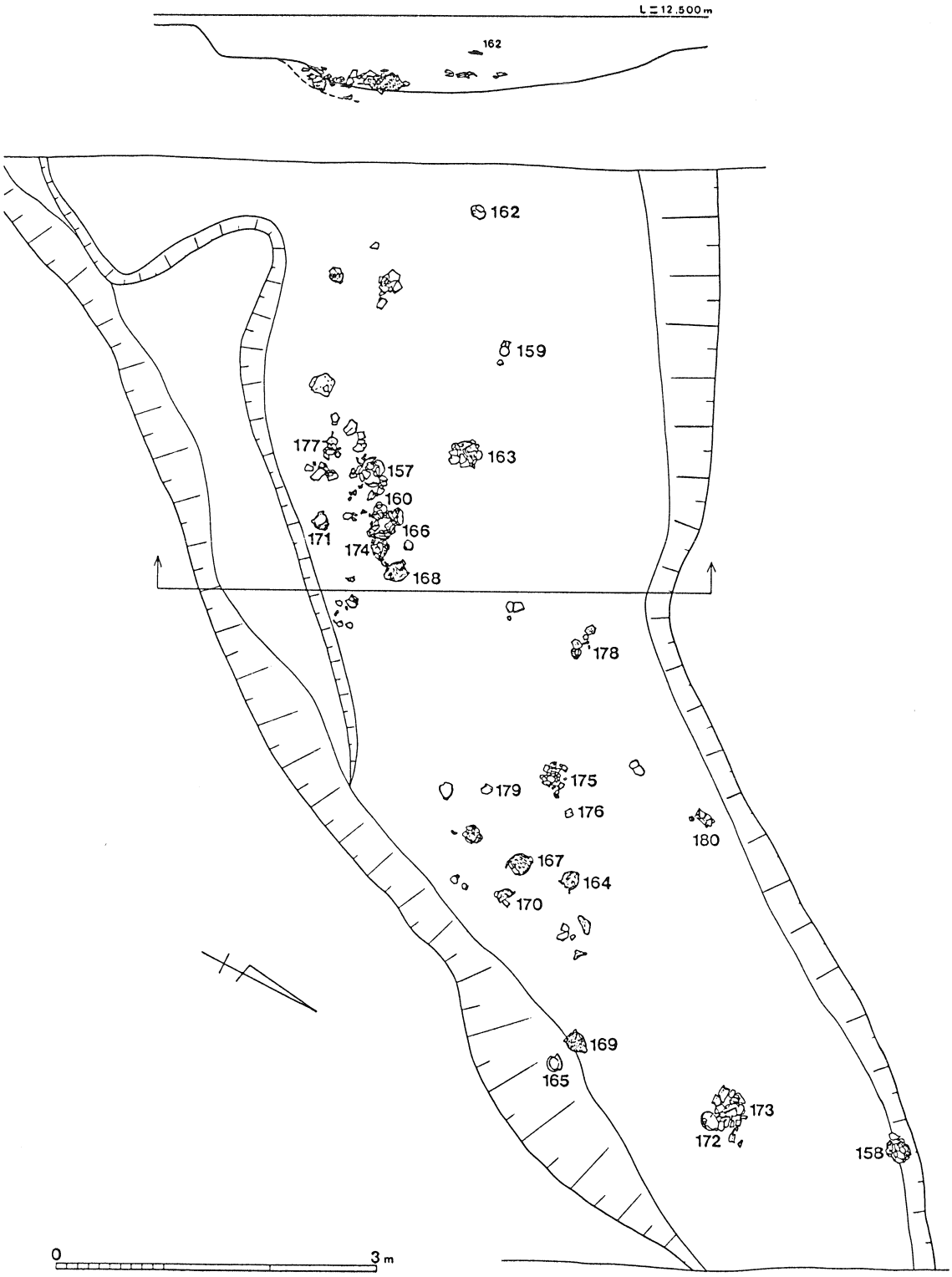
弥生時代の遺構が検出されたSA区の北端を区切るように検出された溝で、幅約５m、深さ0.5～0.8mを測る。埋土は２層に大別され、上層から後期土器片と共に前期甕形土器片が１点出土し、溝底から完形品を多く含む土器が検出された（図中の番号は遺物実測図と共通する）。

SK02　（第13図）

南北４m、東西1.8m以上、深さ約80cmの方形土坑で、東半部のみ検出できた。主としてその南半の埋土最上層から土器が出土した。

SK03　（第13図）

長さ6.4m、幅1.2m、深さ30cmの土坑で、埋土は暗茶灰色砂質土である。後期の土器片が数点出土した。



第17図　ＳＤ０４土器出土状態図

SK04　（第13図）

長さ2.7m、幅２m、深さ20cmの不整方形の土坑である。坑底より浮いた状態で後期土器片が出土した。

SK08～09　（第13図）

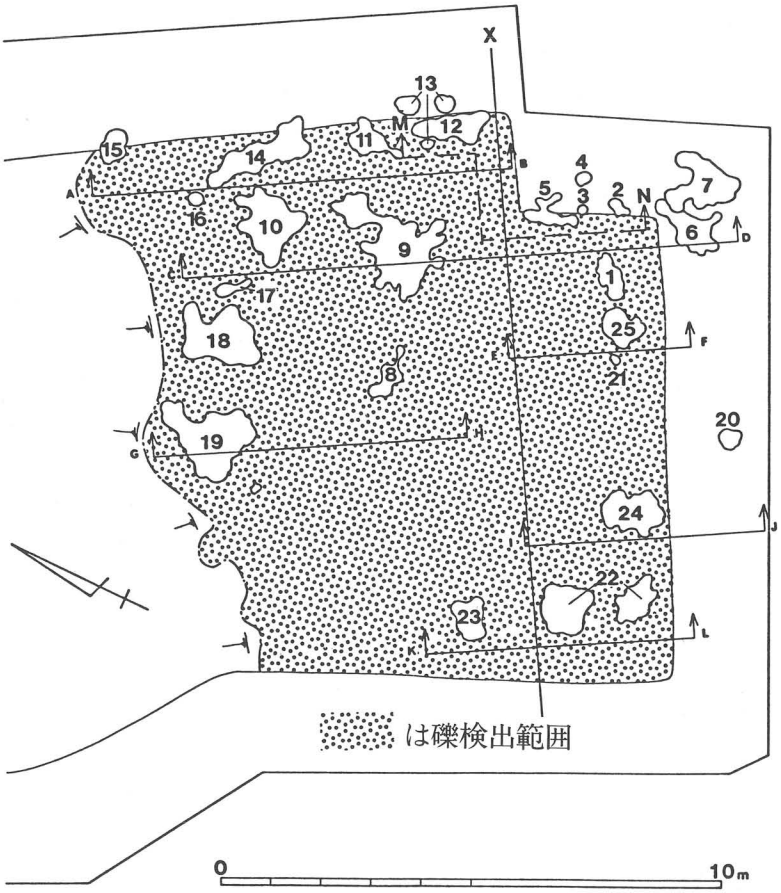
長さ80～130cm、幅80～90cm、深さ10～30cmの小土坑群である。いずれも、土器片が坑底より浮いた状態で出土した。

SX02　（第13図）

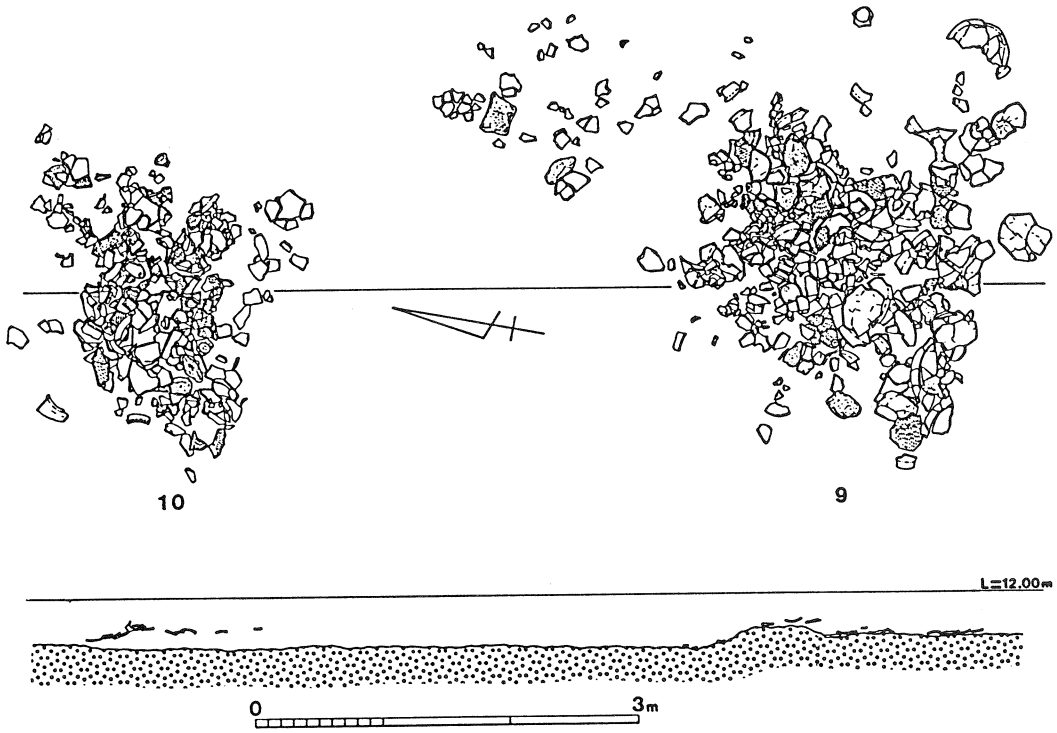
東西3.9m以上、南北6.2m、深さ60を測る不整方形の落ち込みで、SB07に切られる。後期土器片と共に、人頭大の灰白色粘土塊が数個出土した。

SA区土器群（第13図）

SK04の北側に、東西約５m、南北約1.5mの範囲で投棄された土器片が多数存在した。これらはST02を切る東西方向の自然の溝状落ち込みがほぼ埋没した段階で形成されたものと考えられる。



第18図　ＳＢ区土器群平面図



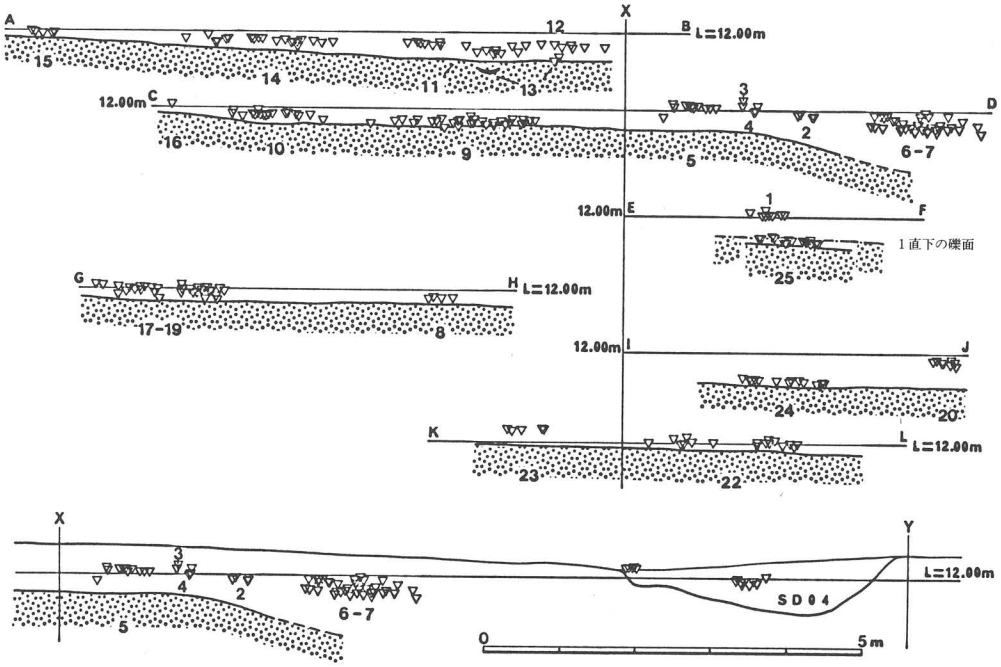
第19図　ＳＢ区土器群Po－９・10平面・断面図

SB区土器群　（第18図～第21図・表２）

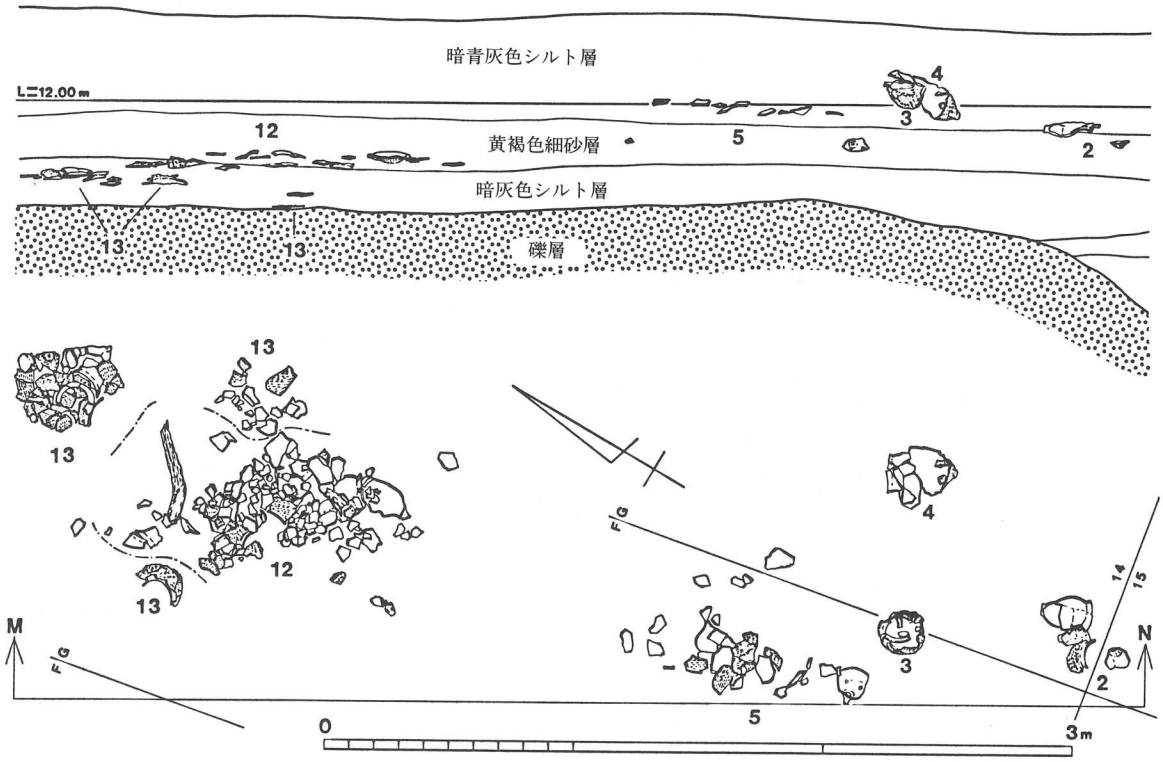
既述のように、Ｓ地区の北⅔は苅藻川旧河道となっており、ここには住居址等の遺構は存在しなかった。が、旧河道が埋没する過程で、SB区南半に拳大の礫が堆積する時期があり、この礫の直上から弥生土器が数個の群を成して検出された。礫の上部にはさらに川によって、暗青灰色～暗灰色シルト層が60～70cm堆積しており、東側の一部には、シルト層内に厚さ20cm程の黄褐色細砂層を挟んだ個所も見られた。土器の投棄は、細砂層、シルト層両者の形成期間中も継続的に行われ、主にシルト層下部に20余の小群を成した多数の土器を検出した（第18図・第19図）。

土器群の取り上げは群ごと（Po－１～25）に行い、礫上とシルト層内に存在するものとを分離したが、土器片のレベルと礫面との関係図（第20図）でも理解されるように、いずれに属すかの峻別が困難な土器群もある。例えばPo－13は、Po－12と比べれば礫上面に近く、一部が礫上面に接し、さらに出土土層も異なるが（第21図）、シルト層内としたPo－10とは礫面とのレベル差で大差は認められない。この様な土器群が存在する事から、礫上出土土器とシルト層内出土土器の投棄は、明確な時間的断絶を介在しないものと考えられる。

尚、SA区のSD04は、このシルト層の上面に切り込まれたものである。



第20図　ＳＢ区土器群・礫面関係図



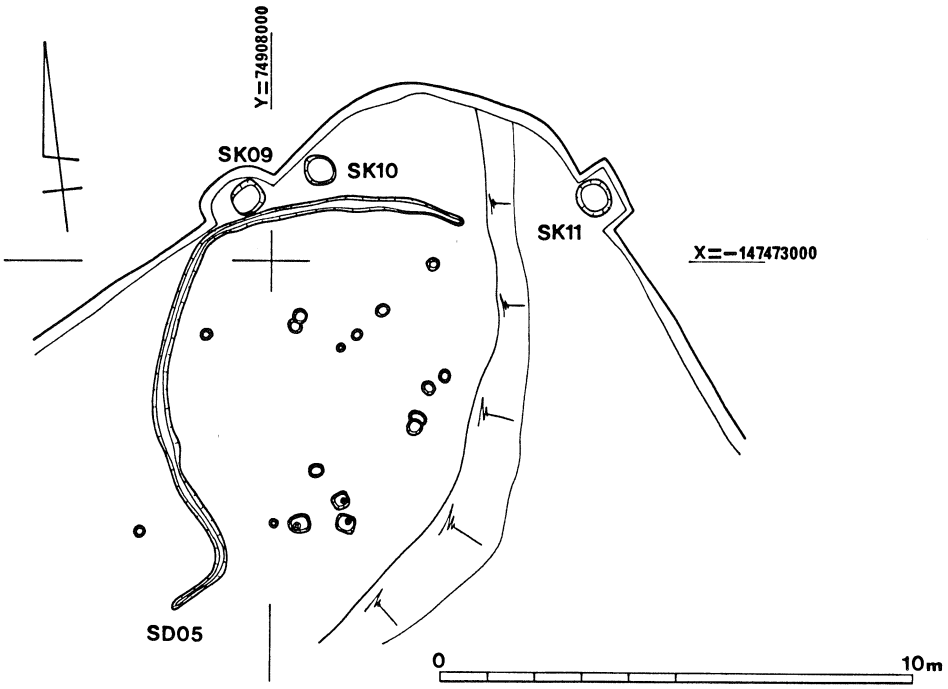
第21図　ＳＢ区土器群土器・土層関係図

土器群番号	実測図番号	層　位	土器群番号	実測図番号	層　位	土器群番号	実測図番号	層　位
9	72・74・75	礫　上		120　・122	シルト	F－12	151	シルト
	79・83・84			123　・131		F-13～F-14	109　・110	〃
	90～108			132　・135			149　・155	
13	76・78・80	〃	10	121　・125	〃	G－13	153	〃
	85			137		G－15	136	〃
22	86	〃	11	130	〃			
24	77・88・89	〃	12	112　・113	〃			
25	71・81・82	〃		127　・133				
	87		14	114　・124	〃			
E－15	73	〃		126　・142				
1	119　・139	シルト	17	111　・144	〃			
	143		18	128　・152	〃			
2	134	〃	19	115　・147	〃			
3	138	〃		148　・150				
5	146	〃	20	129　・140	〃			
6	141	〃	23	116	〃			
7	117　・118	〃	D－13	154　・145	〃			

表２　ＳＢ区土器群出土土器一覧表

第４節　古墳時代

この時期の遺構には、Ｎ地区で検出した溝とピット、土坑がある。



第22図　古墳時代遺構平面図

SD05　（第22図）

SD05は、直径約８ｍを測る半円形に巡るもので、幅20～30cm、深さ10cmを測る。溝の内側から20基程のピットが検出されたが、両者の関係は不明である。溝、ピット共に土師器細片が出土したにとどまる。

SK09～12　（第６図・第22図）

直径60～70cm、深さ20～100cmの円形土坑である。埋土の状態は共通し、青灰色シルトと暗茶灰色粘質土の小ブロックが混在する。遺物は少なく、SK09から７世紀初頭の須恵器坏蓋小片と鉄刀子が出土し、他は須恵器、弥生土器の細片が出土したのみである。

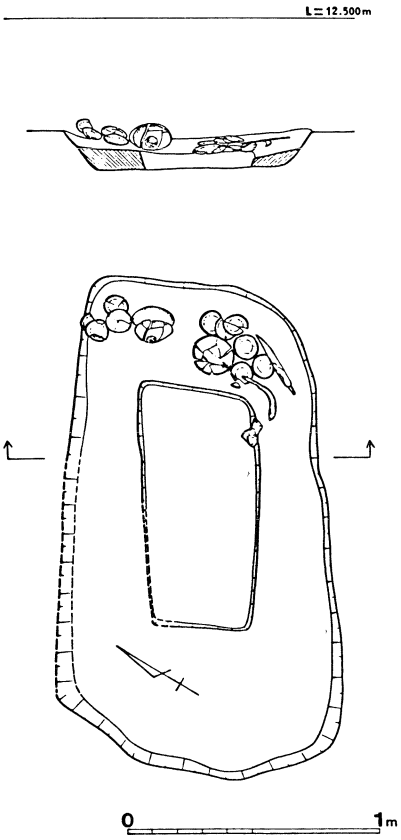
第５節　平安時代

ST02　（第23図）

SA区中央南寄りで検出された木棺直葬墓である。長さ２ｍ、幅0.9～1.1ｍ、深さ15cmの長方形墓坑内に、箱形木棺を収める。木棺は長さ１ｍ、幅40cm、深さ約10cmを測る。棺底は西が10cm程度高く、頭位は西と考えられる。

足方棺外から供献された鉄器、土器が検出された。遺物は２群に分かれ、その出土状態から、棺埋納途中で土師器大皿１枚、同小皿６枚と、鉄刀、鉄斧頭、鉄鎌、鉄錐各１を収め、棺を完全に埋めた後、須恵器埦２枚、土師器小皿４枚を供えたものと考えられる。前者の土器は１枚毎に食物等が盛られたような状態にあったが、後者は重ねられて出土した須恵器埦からみて同じ状況を想定できない。

時期は、12世紀前半と考えられる。



第23図　ＳＴ０２平面・断面図

第６節　鎌倉～室町時代

この時期の遺構は、SB・SC区から検出されている。井戸４、土坑３、不明遺構２と柱穴群がある。

SE01　（第26図）

SB区南寄りで検出したものである。掘形の平面は長径1.15m、短径95cmを測る楕円形で、深さ1.1mを測る。断面は截頭砲弾形を呈する。掘形のやや南寄りに水溜と井戸側として曲物が据えられていた。水溜用の曲物は直径40cm、高さ28cmを測る。井戸側の曲物は上・下２段が残っており、下段は水溜用曲物と上段は下段と一部入子の形となっている。下段は直径43cm、高さ10cm、上段は直径46cm、現存高26cmを測る。井戸側の検出状態から当初はこの上にもう１段曲物があったものと思われる。

掘形内の埋土は、暗青灰色シルトのブロックを含む淡黄灰褐色砂礫土、井戸内部の埋土は暗青灰色シルトである。

遺物は少なく、水溜内部から須恵器細片が出土したに留まる。

時期の確定は困難だが、後述するSC区SE03と同じ構造を持つことや、宇野隆夫氏の研究(注40)でこの型式の井戸が中世前期（12世紀中頃～14世紀）に類例が激増するという集計結果が示されていることから、12世紀後半を中心とする時期と考えるのが妥当と思われる。

SE02　（第27図）

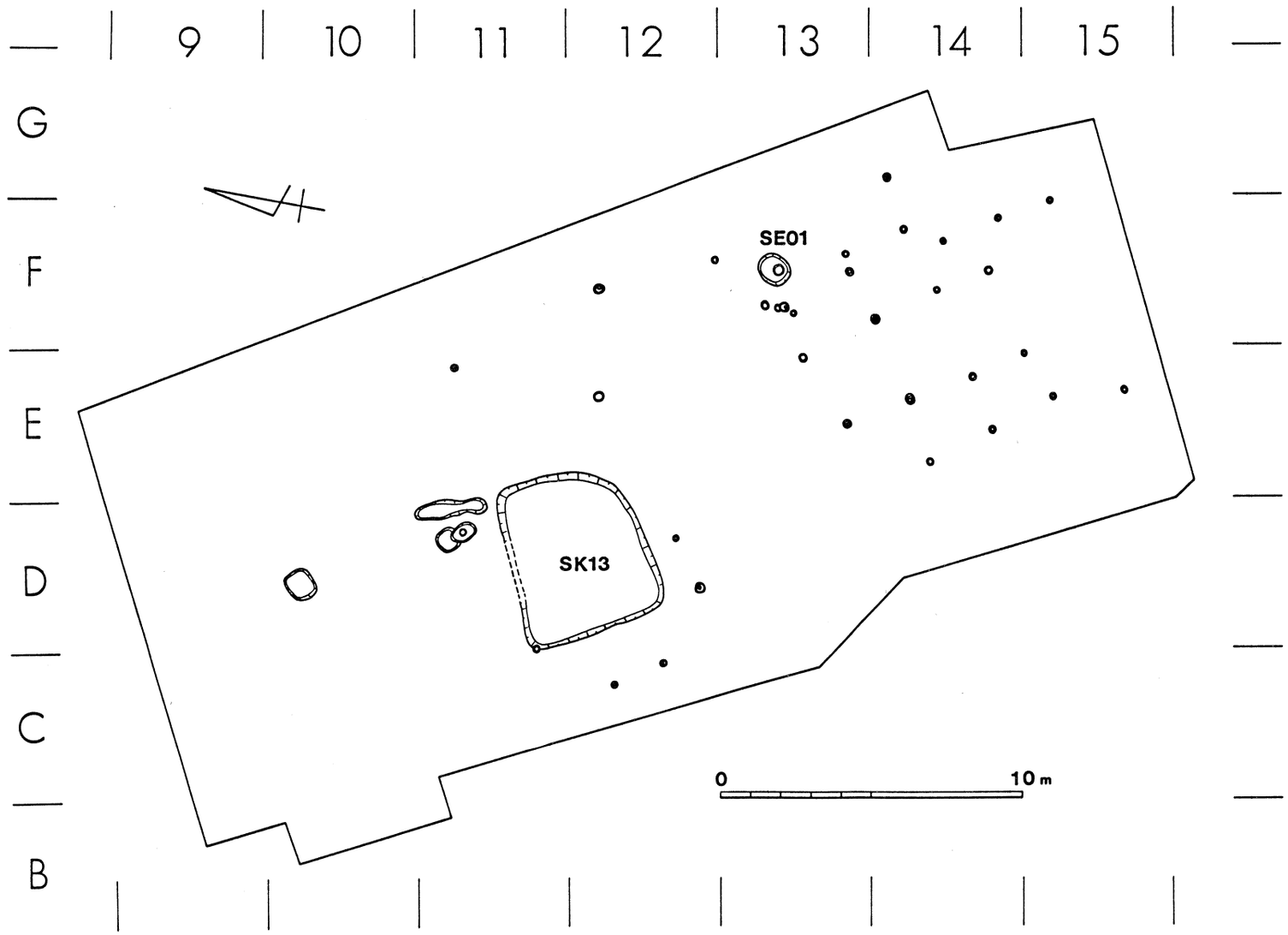
SC区中央で検出した木組井戸である。掘形の平面は楕円形を呈し、長径1.77m、短径1.24m、深さ86cmを測る。井戸側は一辺68cm、現存高約50cmの木組である。西隅に６～８cm角の角柱が比較的明瞭に残る。北西側の２枚の板材は、内側に倒れ込んだ状態であった。北東辺には４枚の板材と横桟と思われる横方向の木質部が残る。残存する板材下端部のレベルは揃わないが、構築当初からこの状態であったと思われる。以上から井戸側は四隅に隅柱を用い、一辺につき３～４枚の縦板を組み横桟で保持する構造と考えられる。水溜用の曲物は、井戸側下端部以下に据えられている。直径約45cm、現存高27cmを測る。

井戸側内の埋土は、下層が淡褐色砂質土と暗灰色粘質土の互層、中層が淡黄褐色砂質土、上層が灰色粘質土である。

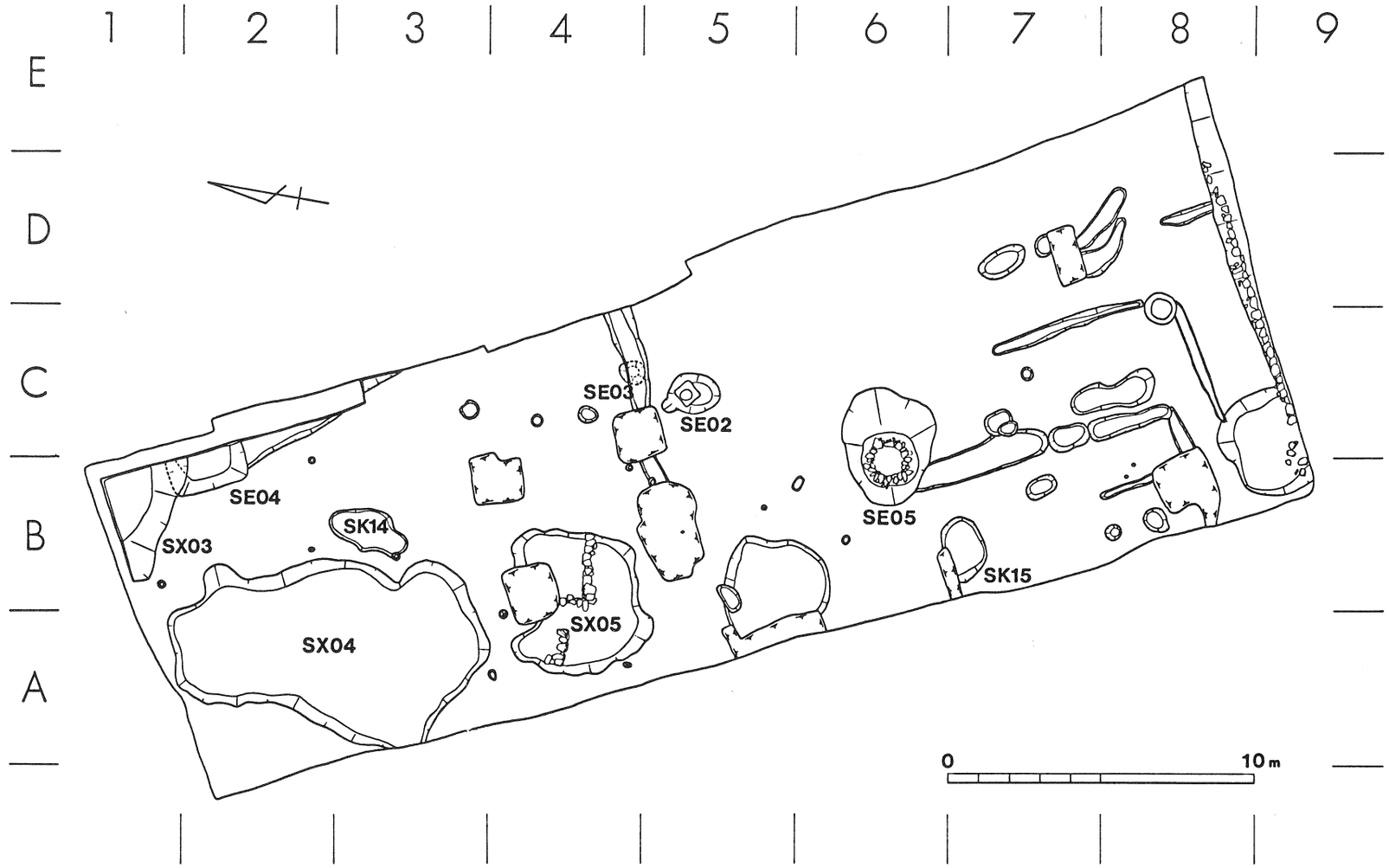
遺物は主に上層から須恵器埦、土師器小皿、瓦器埦などが出土している。時期は、12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。

SE03　（第28図）

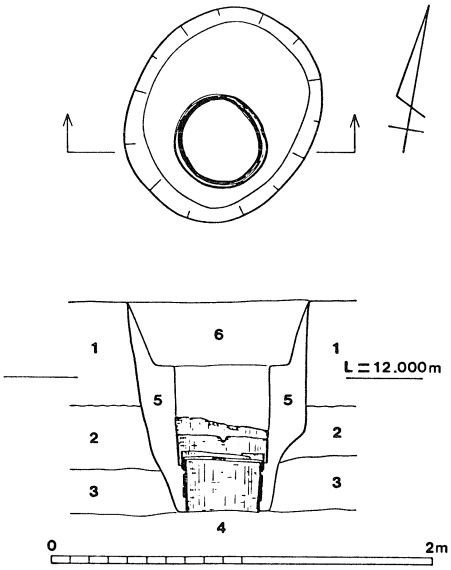
SE02の北東隣で検出したものである。掘形の平面は、不整楕円形を呈し長径98cm、短径82cm、深さ55cmを測る。断面は逆台形を呈する。平坦な掘形底部に上・下２段の曲物を入子にして据えていた。前者のような木組の井戸側は検出されず、上段の曲物が井戸側の機能を持った、SE01と同形態の井戸と考え



第24図　ＳＢ区全体図

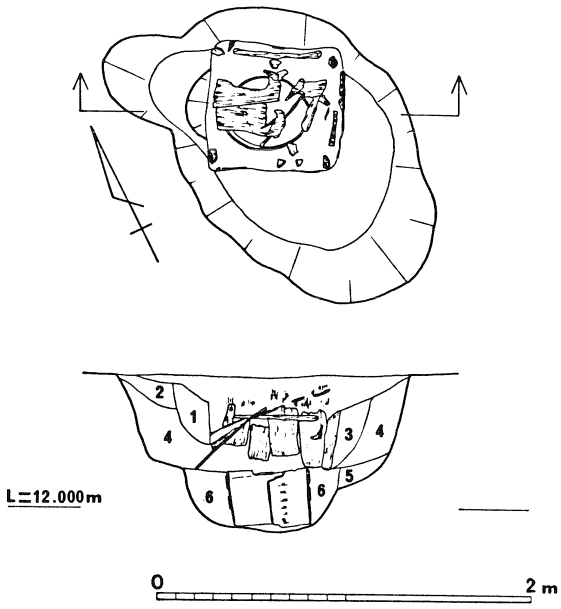

1
2
3
4
5
6
7
8
9
E
D
C
B
A
SE03
SE02
SE04
SK14
SX03
SE05
SK15
SX05
SX04
0
10m

第25図　ＳＣ区全体図



1．暗青灰色シルト層　4．黒灰色砂礫層(湧水層)
2．灰色～灰褐色礫層　5．淡黄灰褐色砂礫土
3．淡黄褐色砂層　6．暗青灰色シルト

第26図　ＳＥ０１平面図・断面図



1．淡灰色粘性砂質土　4．暗黄褐色砂質土
2．灰色粘質土　5．淡青灰色細砂質土
3．暗灰色粘性砂質土　6．淡灰色砂質土

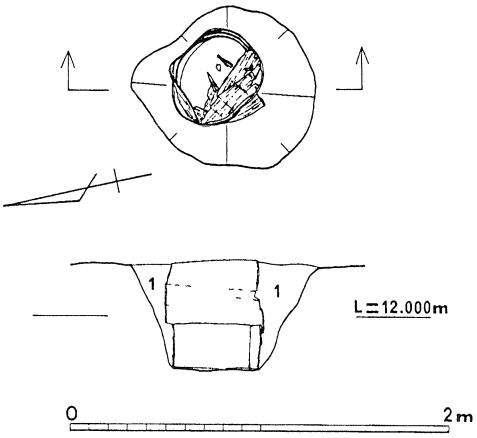
第27図　ＳＥ０２平面・断面図

られる。上段の曲物は長径52cm、短径42cm、現存高約32cm、下段のそれは直径40cm、高さ約26cmを測る。

遺物は寡少ではあるが、須恵器埦・甕が出土している。時期は12世紀後半を中心とする時期と考えられる。

SE04　(第29図)

SC区北東部で検出した。東半部は調査区外のため未調査だが、掘形の平面は方形を呈するものと推定される。南北2.56m、東西1.3m以上、深さ1.26mを測る。後世の破壊が激しく埋土中には拳大から人頭大程度の石が混在する。



1．灰色粘性砂質土

第28図　ＳＥ０３平面図・断面図

掘形底部に水溜用の曲物が据えられており、埋土中にも井戸側材と考えられる板材が廃棄された状態で検出されたことから、この井戸はSE02と同型式の可能性がある。曲物は直径約44cm、高さ約15cmを測る。

埋土は灰褐色粘性砂質土を主体に堆積していた。遺物は、上層（1～9層）から下層（10～14層）まで他の井戸に比べ多く出土している。須恵器埦、土師器小皿・堝、瓦器埦などがある。また現存長約23cmを測る呪符木簡が検出された。時期は、14世紀前半と考えられる。SE05同様、現在でも湧水がみられる。

SK13　（第24図）

SB区の中央部で検出した東西5.6m、南北4.8m、深さ約26cmを測る不整長方形土坑である。埋土は黄灰色～青灰色粘土塊を含む暗灰色砂質土で、坑底からやや浮いた状態で大観通宝（初鋳1107）が検出された。

SK14　（第25図）

SC区北半にある長径約2.5m、短径約1.2m、深さ約10cmを測る長楕円形の土坑である。土師器足釜の脚部、瓦器などが出土した。時期は13～14世紀と思われる。

SK15　（第25図）

SE02の西側にある長径約1.9m、短径約1.3m、深さ約10cmを測る楕円形土坑である。須恵器、土師器皿、瓦などが出土している。時期は14～15世紀と思われる。

SX03　（第29図）

SE04の掘形北辺を切って作られたもので、大部分が調査区外となっている。深さ1.05mを測り、底レベルはSE04とほぼ同じである。

埋土は粘性砂質土と砂の互層で、下層（9～12層）には有機質がみられた。埋土中には拳大から人頭大の礫が多く混在する。北壁断面中最下層（11層）には幅約25cmの板材が貫入しており、他にも若干板材が見受けられたことから、SX03は井戸が廃棄されたものとも考えられる。

遺物は上層（1～8層）から須恵器埦、土師器小皿、瓦器埦、瓦、銭貨、下層（9～12層）から須恵器、土師器、陶器などが出土している。時期は15～16世紀と考えられる。

SX04　（第25図）

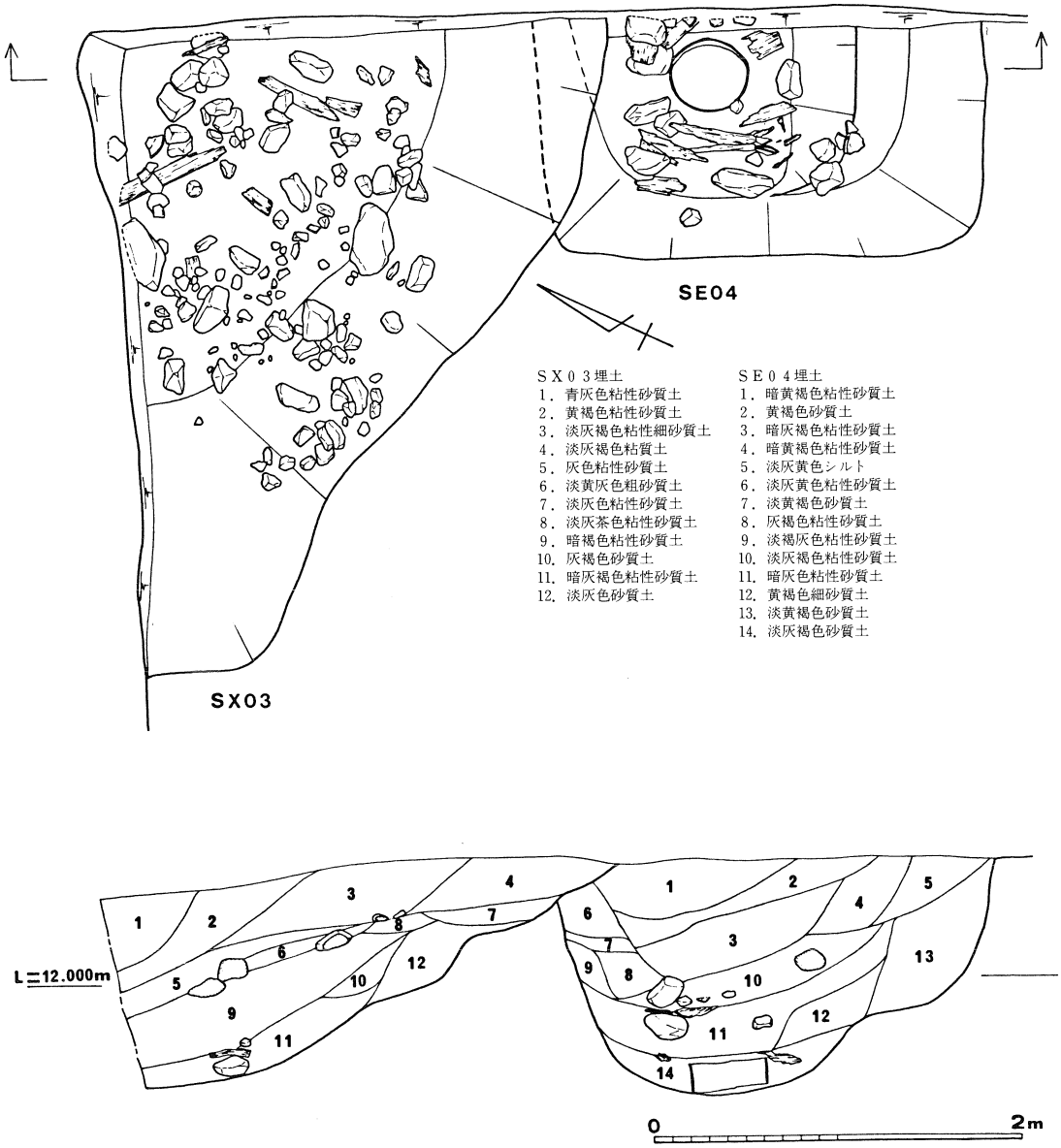
SC区北西部の浅く広い落ち込みである。長軸約10m、短軸約5.5mを測り、断面は浅い皿状を呈する。遺物は、須恵器埦・鉢・甕、土師器皿・堝、瓦器、陶器などが出土している。時期は15～16世紀と思われる。

柱穴群　（第24図）

SB区SE01の西側には、この井戸との関係が考えられる柱穴群が検出された。直径約20～30cm、深さ約10cmのものが大半で、遺物は殆んどないが、中に中世の土師器堝の細片を出土したものがある。

1～2棟の建物を想定できなくもないが柱穴間の距離のばらつきが大きく、

建物に復元することを避けた。

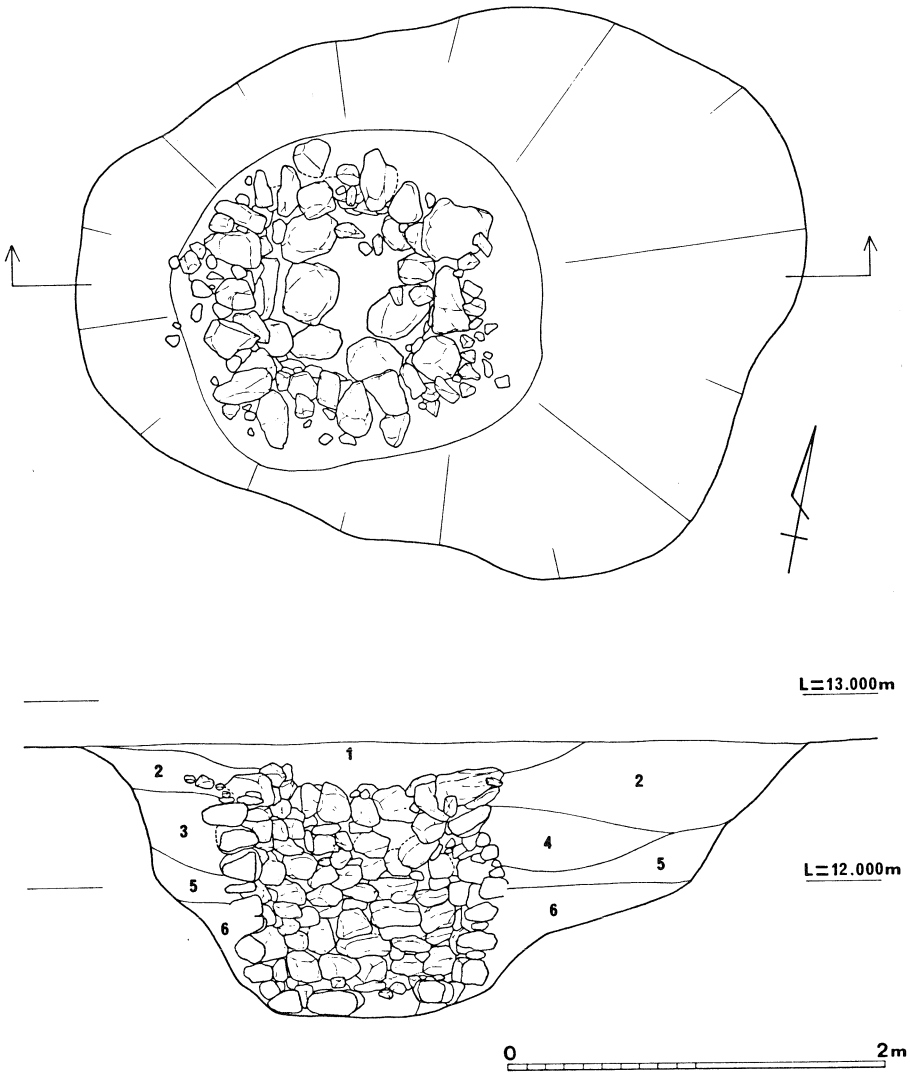


第29図　ＳＥ０４、ＳＸ０３平面・断面図

第７節　江戸時代

この時期の遺構には、SB・SC区で検出した石組井戸各１、SC区で検出した不明遺構１である。

SE05　（第30図）



1．淡褐灰色粘質土　2．灰褐色粘質土　3．灰色粘性砂質土　4．暗灰褐色粘性砂質土
5．灰褐色粘性砂質土　6．黄褐色砂礫土

第30図　ＳＥ０５平面・断面図

SC区中央やや南寄りで検出した石組井戸である。掘形の平面形は不整楕円形を呈し、規模は長径3.88m、短径3.08m、深さ1.46mを測る。断面形は、井戸側が位置する西側の傾斜がややきつい擂鉢状である。黄褐色砂礫層（＝湧水層）を切り込んでいる。

掘形底部に長さ約30cm、幅20～25cmの石を、中央の長径約40cm、短径約20cmの範囲を除いて敷き並べる。井戸側はこれを基底として、長さ10～30cm程の石

材を円形に積み上げる。井戸側断面は、上にいくに従いやや広がる。石組の高さは1.32m、上部での内径約１mを測る。

掘形埋土は大きく２層に分けられ、上層（１～４層）は暗灰褐色粘質土、下層（５・６層）は黄褐色砂礫土をそれぞれ主体とする。また、井戸側内埋土は、暗灰色粘性砂質土を主体としている。

遺物は須恵器、土師器、陶器等が出土しており、中世末から近世前半の時期と思われる。尚、SB区検出井戸もこれとほぼ同構造のものである。

SX05　（第25図）

SX04の南側にある石組遺構である。東西、南北各約４m、深さ約60cmの方形に近い土坑の中に２～３段残存する石組が２ヶ所存在する。東側のそれはＬ字形に屈折し、内側に面を揃えるが攪乱で半壊しており全容を明らかにし得ない。埋土から出土した遺物から近世期のものと考えられる。

第IV章　遺物

第１節　縄文時代

縄文時代の遺物には、晩期後半の凸帯文土器と、晩期以前に溯ると考えられるものの二種に大別できる。

晩期以前　（第33図－33・35～37）

33は、外面及び口縁端面に縄文を施す深鉢片である。縄文の原体は２段の縄でＬ｛$^{R}_{R}$ である。口縁端面の縄文も同一原体によるものと思われるが、確定できない。内面はナデで仕上げる。

35・36は浅鉢片で、口縁端部に近い部分と思われる。いずれも半截竹管により２条の沈線を施す。37も口縁端部近くの破片で、２条の沈線が巡り、その端部に浅い断面円筒形を呈する刺突が付加される。

晩期後半　（第31図～第33図）

晩期後半の土器には、口縁端部上面とそれよりやや下がった所に刻目凸帯を貼り付ける滋賀里IV式の深鉢（第31図－１～６）及び、土坑内でこれと共伴した深鉢（第33図－38・39）と、それ以外の凸帯文土器に大別できる。

分類　後者は口縁部の凸帯の位置と口縁端部の形状によりＡ～Ｃ類に分類できる。

Ａ類…口縁端部から下がって凸帯を貼り付けるもの。

Ｂ類…口縁端部に接して凸帯を貼り付けるもので、端部に小さな面を持つか丸くおさめるもの。

Ｃ類…凸帯の位置はＢと同じだが、口縁端部に面を作らないもの。

また、凸帯の断面形はＩ～IV類に分類できる。

Ｉ類…三角形。

II類…下さがり三角形。

III類…台形。

IV類…蒲鉾形。

SK01　（第31図－１～３・８・16・22、第32図－28・32、第33図－34・38・39）

SK01から出土した土器は、１・38・39で、これ以外の土器は土坑検出中に出土したものである。

１は、口縁端部と凸帯文上にＤ字形の刻目を持ち、外面を二枚貝条痕、内面をナデで仕上げる。凸帯断面形はIV類である。２の凸帯断面はＩ類であるが、１と胎土、調整、色調共に似ており同一個体の可能性がある。３は、凸帯下の外面にケズリを加える。

8はAIV類、16はＡＩ類の口縁部片、22はやや上げ底の底部で外面はケズリ、内面はナデを加える。28は体部片で凸帯断面形はＩ類である。

32は直径38.6cmを測る黒色磨研の「く」の字状口縁の浅鉢である。口縁部外面と内面全体を研磨し、体部外面にケズリを加える。口縁端部より下がった所と、頚部外面に凸帯を貼り付ける。頚部内面に１条の沈線を巡らす。体部外面に煤が付着する部分がある。

土坑上面からは別個体の浅鉢がもう１個体出土した。小片のため図化できないが、32より屈曲が鋭く、口縁部・体部内外面を研磨し、黒色を呈する。口縁端部内面に１条の沈線を巡らし、口縁端よりやや下がった外面に極く低い凸帯が１条巡る。煤の付着は見られない。

38・39は同一個体と思われる。ゆるやかに「く」の字状に屈曲する頚部を有する深鉢片で、外面は二枚貝条痕、内面はナデを加える。

その他の土器　（第31図－４～７・９～15・17～21、第32図－23～27・29～31）

４～６は滋賀里IV式に属する。４は外面にヘラ描の沈線文を施す。５は外面にケズリを加えている。６の凸帯文には刻目を施さない。

７・９～11・17・19はＡＩ類である。７は口径26cmを測る深鉢で、凸帯上に小Ｏ字形の刻目を加える。口縁端部内面に浅い凹部が巡り、指頭圧痕が残る。９は外面にヘラ描の山形文がある。10・11・17・19の凸帯の刻目は、いずれも小さく小Ｄ・小Ｏ字形や、ヘラ刺突による断面がＶ字形の細い刻みを施す。17は胎土に角閃石、雲母を含む河内系のものである。

12～14はＡII類である。凸帯上の刻目はいずれも小さく浅い。

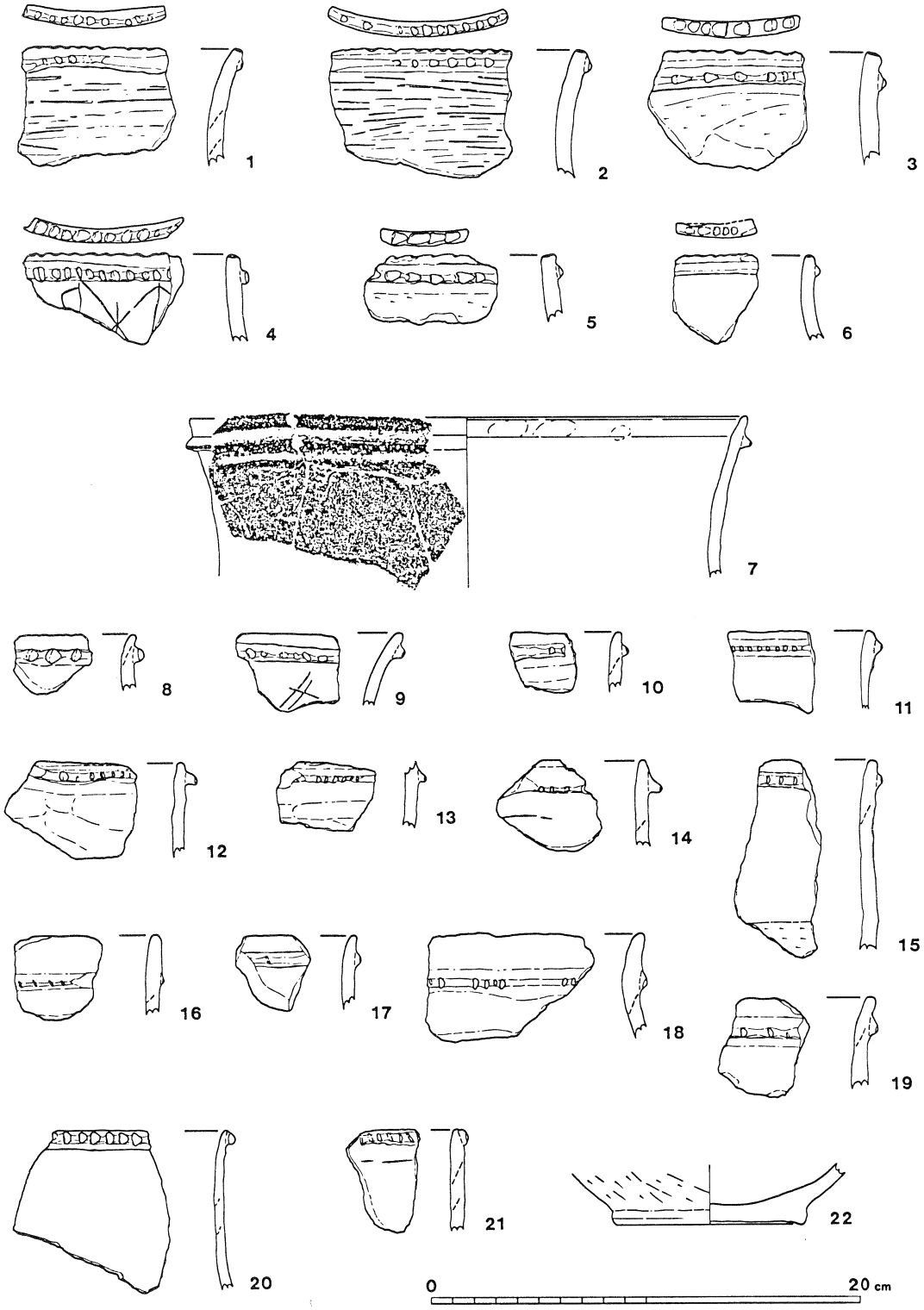
15はＡIII類で、わずかに屈曲する頚部を持ち、頚部以下にケズリを加える。

18はＡIV類で、口縁部から下がった所に低い断面蒲鉾形の凸帯を貼り付け、小Ｄ字形の刻目を施す。

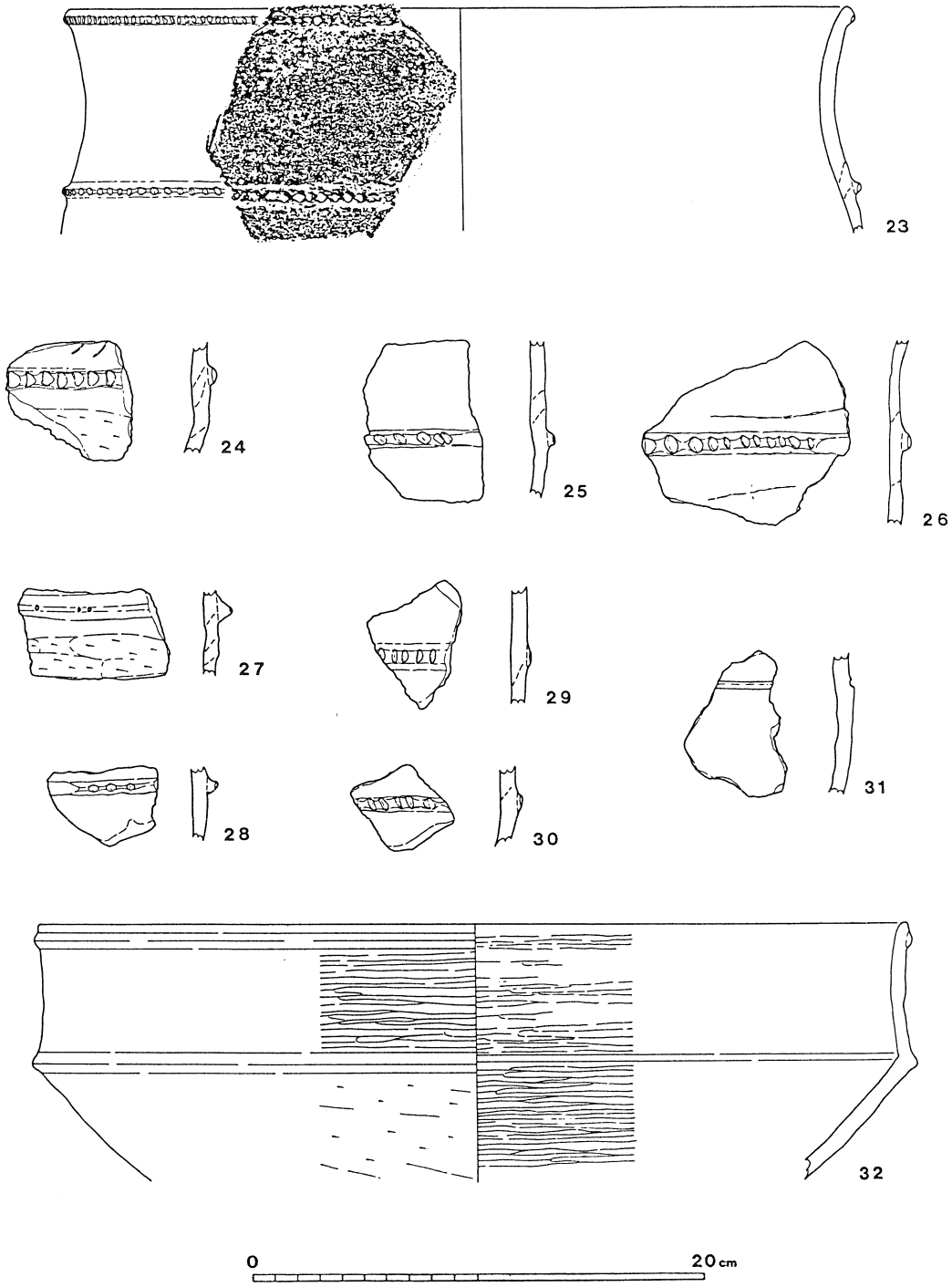
20・21はＢIV類に属する。前者は大きなＤ字形の、後者は刺突による断面Ｖ字形の刻目を加える。

23は肩部まで残存する２条凸帯の深鉢である。口縁部はＢＩ類である。胴部から頚部にかけゆるやかに彎曲し、胴部最大径付近よりやや上にＩ類の凸帯を貼り付ける。

24～27、29～31は胴部片である。24には凸帯上方にヘラ描の沈線が見られる。25・30は胎土に角閃石、雲母を含む河内系のものである。31は胴部と頚部の境に断面Ｖ字形の沈線を巡らすものである。



第31図　縄文土器実測図（1）



第32図　縄文土器実測図（2）

第33図　縄文土器実測図（3）

第2節　弥生時代～古墳時代前期

当期の土器類は、28ℓコンテナで約60箱出土した。その内の90数%以上は、弥生時代後期のものである。土器類は整理途上にあり、今回全てを報告することはできなかった。以下大半を占める弥生時代後期（庄内併行期を含む）土器を型式分類（第34図～第36図）し、遺構ごとに説明を加える。

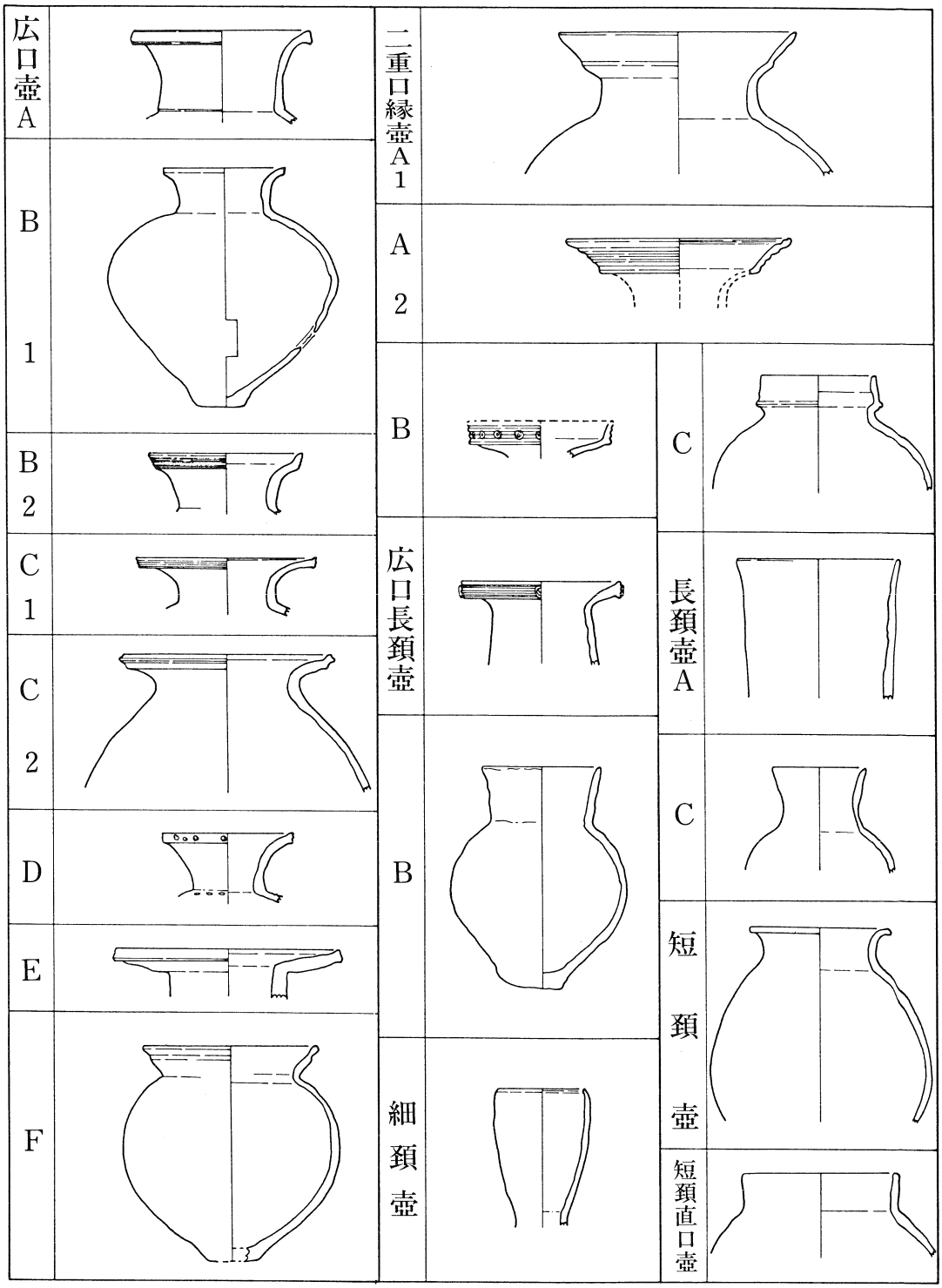
分類

広口壺A……太い筒状の頚部とゆるやかに斜め上方にひらく口縁部を持ち、口縁端部を下方又は上・下に拡張するもの。

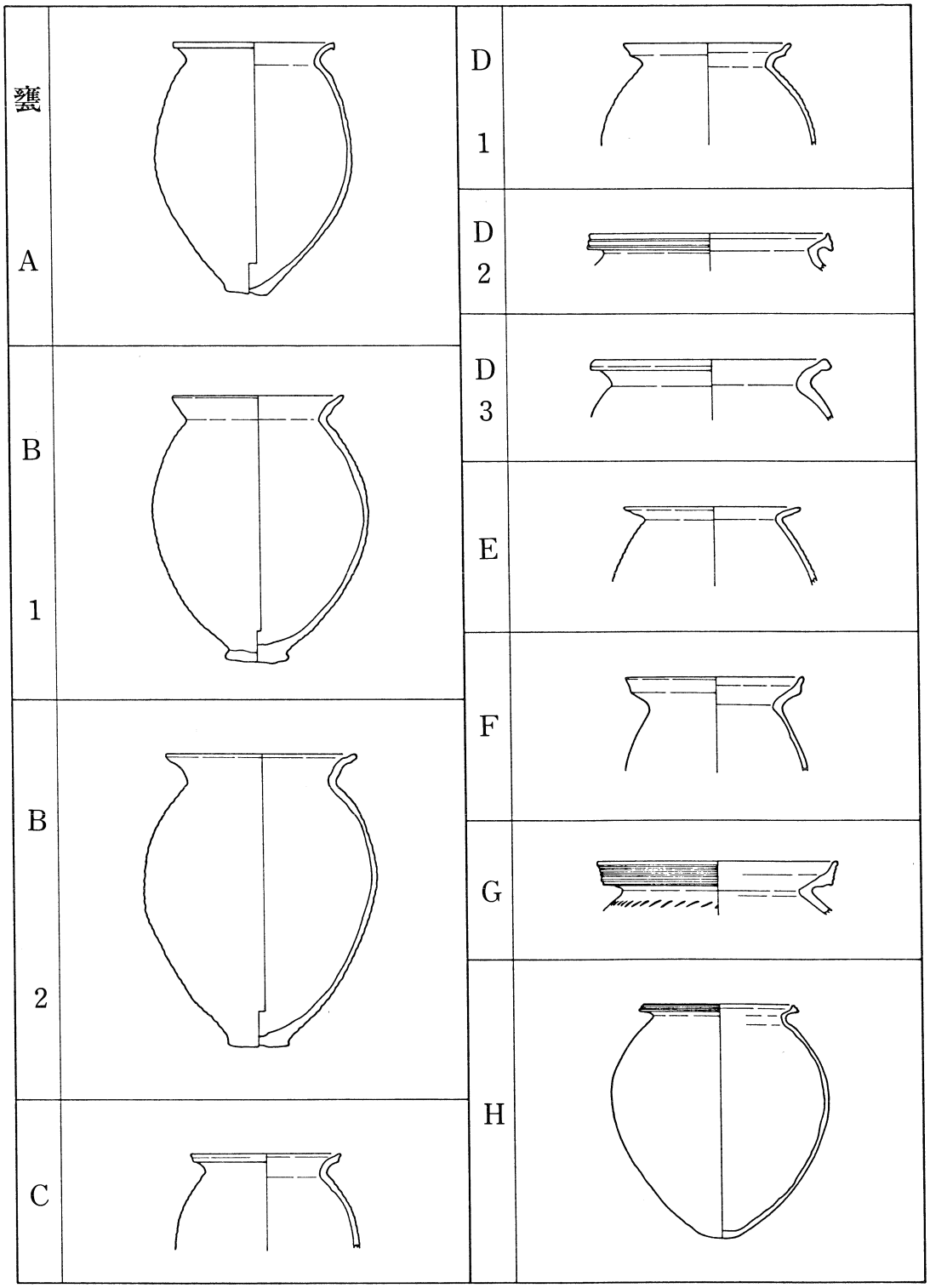
広口壺B_1…筒状の頚部から強く外反する口縁部がのびるもの。

広口壺B_2…B_1の中で、口縁端部を上方に拡張するもの。

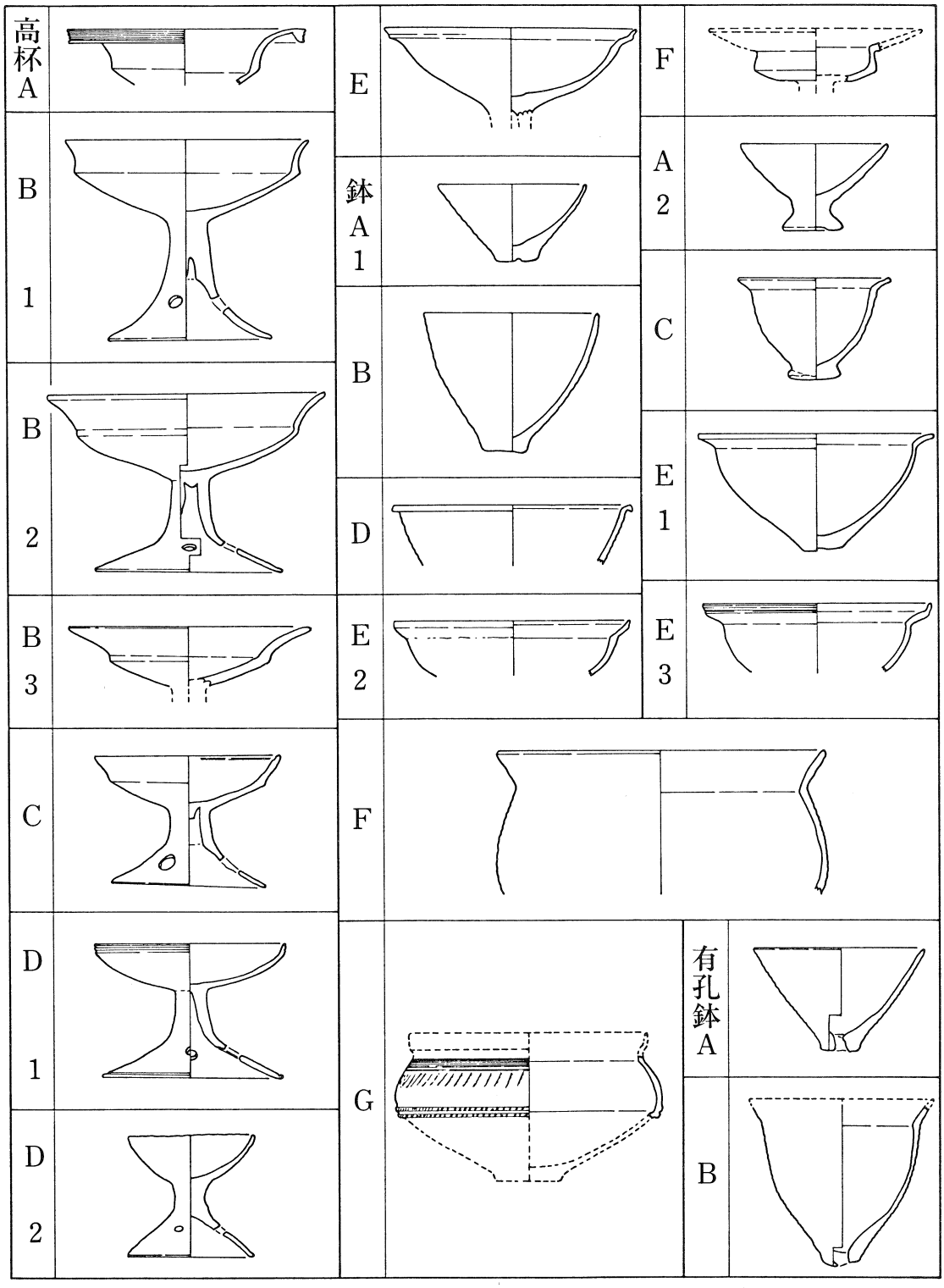
広口壺C_1…口縁部が大きく水平近くまでひろがるもの。
広口壺C_2…C_1の中で、口縁端部を上方に拡張するもの。
広口壺D……頸部の屈曲部から斜め上方にひらく口縁部を持つもの。
広口壺E……筒状の頸部に、水平方向にひらく口縁部を持つもの。
広口壺F……太く短い「く」の字状の頸部と、斜め上方に直線的にひらく口縁部を持つもの。
二重口縁壺A_1…通常の二重口縁壺で、口縁部外面に凹線を持たないもの。
二重口縁壺A_2…Aの中で、口縁部外面に凹線文が巡るもの。
二重口縁壺B……水平近くひらく口縁部の端部が直立気味に上方に拡張されるもの。
二重口縁壺C……山陰系の「5」の字口縁壺。
広口長頸壺…長く太い頸部と短く外反する口縁部を持つもの。
長頸壺A…太く長い頸部を持つもの。
長頸壺B…Aの内、頸部がやや退化したもの。
長頸壺C…小型のもので、斜め上方にひらく口縁部を持つもの。
細頸壺…細く中ぶくらみの口頸部を持つもの。
短頸壺…太く短い頸部を持つもの。
短頸直口壺…短頸壺の内、口縁部が垂直に近く立ち上がるもの。
甕A……口縁部が強く外彎し、口縁端部に面を持つもの。
甕B_1…口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部に面を作らないもの。
甕B_2…B_1の内、口縁部の上半に強いヨコナデを加えるもの。
甕C……口縁端部を上方につまみ上げるもの。
甕D_1…口縁端部を上方に拡張するもの。
甕D_2…口縁端部を上・下に拡張するもの。
甕D_3…口縁端部を下方に拡張するもの。
甕E……頸部内面に稜を持ち、口縁部が強く外傾するもの。
甕F……復合口縁部を持ち、体部内面をヘラケズリする所謂「丹後系」の甕。
甕G……口縁部を大きく拡張し、その外面に擬凹線を巡らす山陰系の甕。
甕H……短い口縁部と張りのある体部を持つ四国系の甕。
高坏A……大きく外反する口縁部を持ち、その端部下面に断面三角形の粘土紐を貼り付けるもの。
高坏B_1…坏体部と口縁部が成す角度が、130度～140度前後のもの。
高坏B_2…坏体部と口縁部が成す角度が、150度前後のもの。
高坏B_3…坏体部と口縁部が成す角度が、160度前後のもの。
高坏C……粗製の小型の高坏で、坏体部と口縁部界に稜を持つが、内面はな



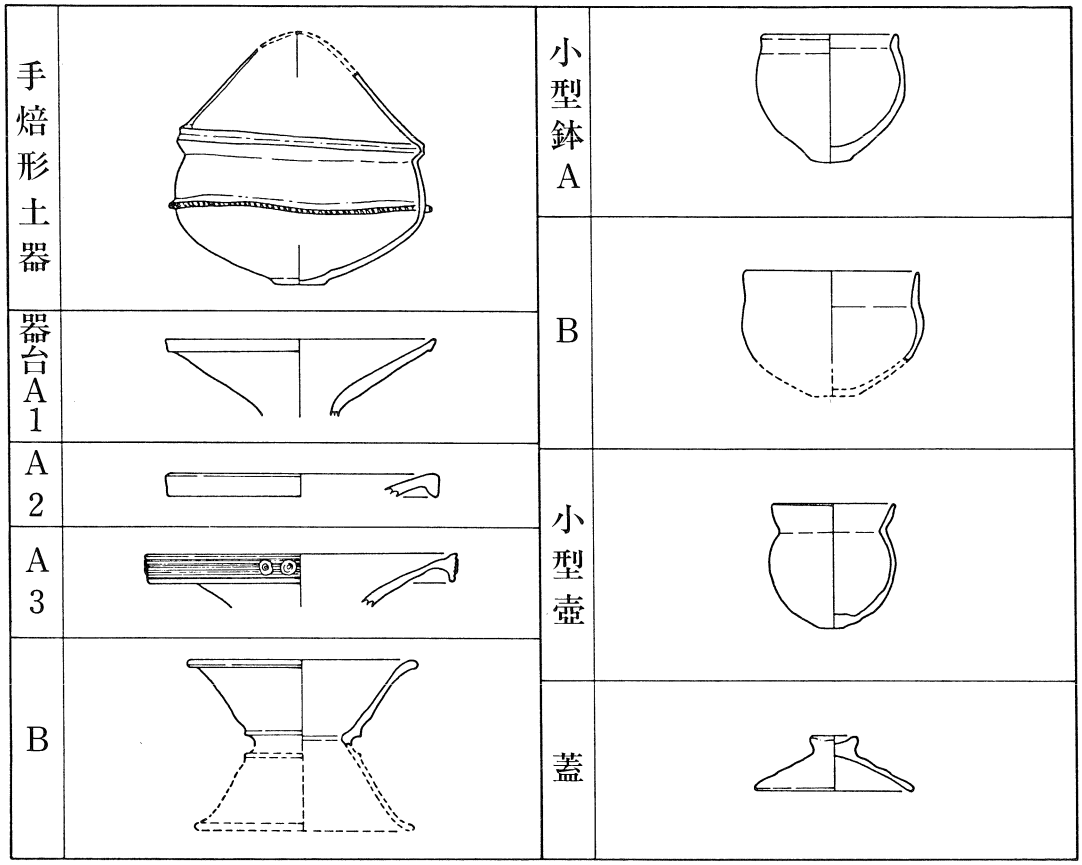
第34図　壺形土器型式分類図



第35図　甕形土器型式分類図



第36図　高杯・鉢・有孔鉢形土器型式分類図



第37図　手焙・器台・小型鉢・小型壺・蓋形土器型式分類図

なめらかな面を成すもの。

高坏D_1…埦形の坏部と大きく低くひろがる脚裾部を持つもの。

高坏D_2…埦形の坏部と内彎する脚裾部を持つもの。

高坏E_1…浅い埦形の坏体部と短く外反する口縁部を持ち、口縁端部を上方に拡張するもの。

高坏E_2…E_1の内、口縁端部外面に擬凹線を巡らすもの。

高坏F……強く屈曲して立ち上がる坏体部と、さらに屈曲して水平近く外反する口縁部を持つもの。

鉢A_1…小型鉢の内、口径が器高を凌駕するもの。

鉢A_2…A_1の底部に低脚台が付くもの。

鉢B……器高が口径を凌駕するもの。

鉢C……外反する口縁部を持つ小型鉢。

鉢D……中型の埦形の鉢で、口縁端部を外側に折りまげるもの。

鉢E_1…中型の埦形の鉢で、外反する口縁部を持つもので、口縁端部に面を持つか丸くおさめるもの。

鉢E_2…E_1の内、口縁端部を上方につまみ上げるもの。

鉢E_3…E_1の内、口縁端部を上方に拡張するもの。

鉢F……「く」の字状口縁を持つ大型の鉢。

鉢G……体部外面に凸帯を巡らせ、クシ描直線文と列点文で飾るもの。

有孔鉢A…口径が器高を凌駕するもの。

有孔鉢B…器高が口径を凌駕するもので、「く」の字状の口縁部を持つもの。

手焙形土器…複合口縁の鉢形土器に覆部が付くもの。

器台A_1…筒状の脚柱部から斜め上方にひろがる受部を持つもの。

器台A_2…A_1の内、口縁端部を下方に拡張するもの。

器台A_3…A_1の内、口縁端部を上・下に拡張するもの。

器台B……山陰系の鼓形器台。

小型鉢A…球形に近い体部に短く直立する口縁部を持つもの。

小型鉢B…張りのない体部に直立する口縁部を持つもの。

小型壺…球形に近い体部に「く」の字状に外反する口縁部を持つもの。

蓋……裾ひろがりの体部につまみの付くもの。

SB01　（第38図－1～6、第60図－244・245・247）

SB01は2度拡張が行われたが、土器類は最終のSB01－c段階のものが多く残存し、他は細片が多く器形を知ることができるものは、極めて少ない。

SB01－a　SB01－a出土土器には、二重口縁壺A_1：244がある。北西隅の柱掘形内から出土したもので、外面をクシ描波状文で加飾する。

SB01－c　SB01－c出土土器には、壺体部：1、ミニチュア土器：2、甕B_1：3、甕底部：4、高坏脚部：5、鉢B：6、細頸壺口縁部：245、壺肩部：247がある。1～5は中央炉内、6は北隅部のベッド上から出土した。他は埋土中から検出された。

1は細頸壺の体部と考えられるもので、径1㎝程の小平底を残す。外面はヘラミガキ、内面はハケの後、ていねいなナデを加える。

3は小型の甕で、やや雑な作りである。煤は付着しない。口径11.8㎝、器高15.2㎝、容量0.81ℓを測る(注41)。

4は不安定な小平底から斜上方にのびる体部を持つもので、底部裏面にもタタキが加えられる。

5は脚裾部外面と坏部内面をヘラミガキする。脚部外面には、右上がりのタタキが残る。

6は完形品で外面をタタキ、内面をハケで仕上げる。口径15.5㎝、器高12.6㎝を測る。

245の外面には、半円形に巡る弧状線と、放射状に並ぶ短くゆるい彎曲線が先

端が平らな棒状工具で描かれている。

247は、上半に7条のクシ描直線文、下半に3条＋αのクシ描波状文を描く。

SB02　（第38図－7～19）

SB02出土土器には、甕A：7・8、甕C：9、甕D_2：10、高坏D_3：11、鉢A_1：14、鉢A_2：12・13、鉢D：16、有孔鉢A：17、ミニチュア土器底部：18・19と、鉢または甕底部と考えられるもの：15がある。7・15は東張り出し部、8・14は中央土坑、9・16～19はP－1、10～13は北東部で出土した。

7は口縁部がゆるやかに外反し、甕Bに近い。頸部外面と口縁部内面にハケが残る。口径15.6cm。

8は体部の張りが強く、頸部内面にゆるい稜を持ち甕Eに類似する。体部外面の一部にハケを加える。口径15.0cmを測る。

9は頸部外面に粘土接合痕を残すが、その上部にもタタキが残る。内面はていねいなナデを加える。口径13.5cmを測る。

10は床面上で検出した小片である。口縁部を上・下に拡張し、2条の擬凹線を巡らす。内面頸部以下にヘラケズリを加える。口径16.6cmを測る。

11は口径21.2cmを測る高坏で、内外面にたてヘラミガキを施している。

12・13は、低脚部を体部からつまみ出して作る小型鉢である。12は口径13cm、器高6.4cm、13は口径12.4cm、器高6.3cmを測る。

14は口径13.8cm、器高6.3cmを測る。内面はナデ調整である。

16は口径21cmを測る中型の鉢で、外面はタタキの後一部ナデを加え、内面はナデで仕上げる。

17は完形品で、外面はタタキ、内面をハケで仕上げ、孔の外面にたて方向のヘラナデを加え、面を作る。口径16.8cm、器高9.5cmを測る。

SD02　（第39図－26）

26は、現長4.07cm、現最大幅1.26cm、重さ3.6gを測る銅鏃である。刃部周囲は腐蝕し、原状を留めないが浅い逆刺があるものと考えられる。身部中央に鎬を持ち、端部が尖る茎部を有する。

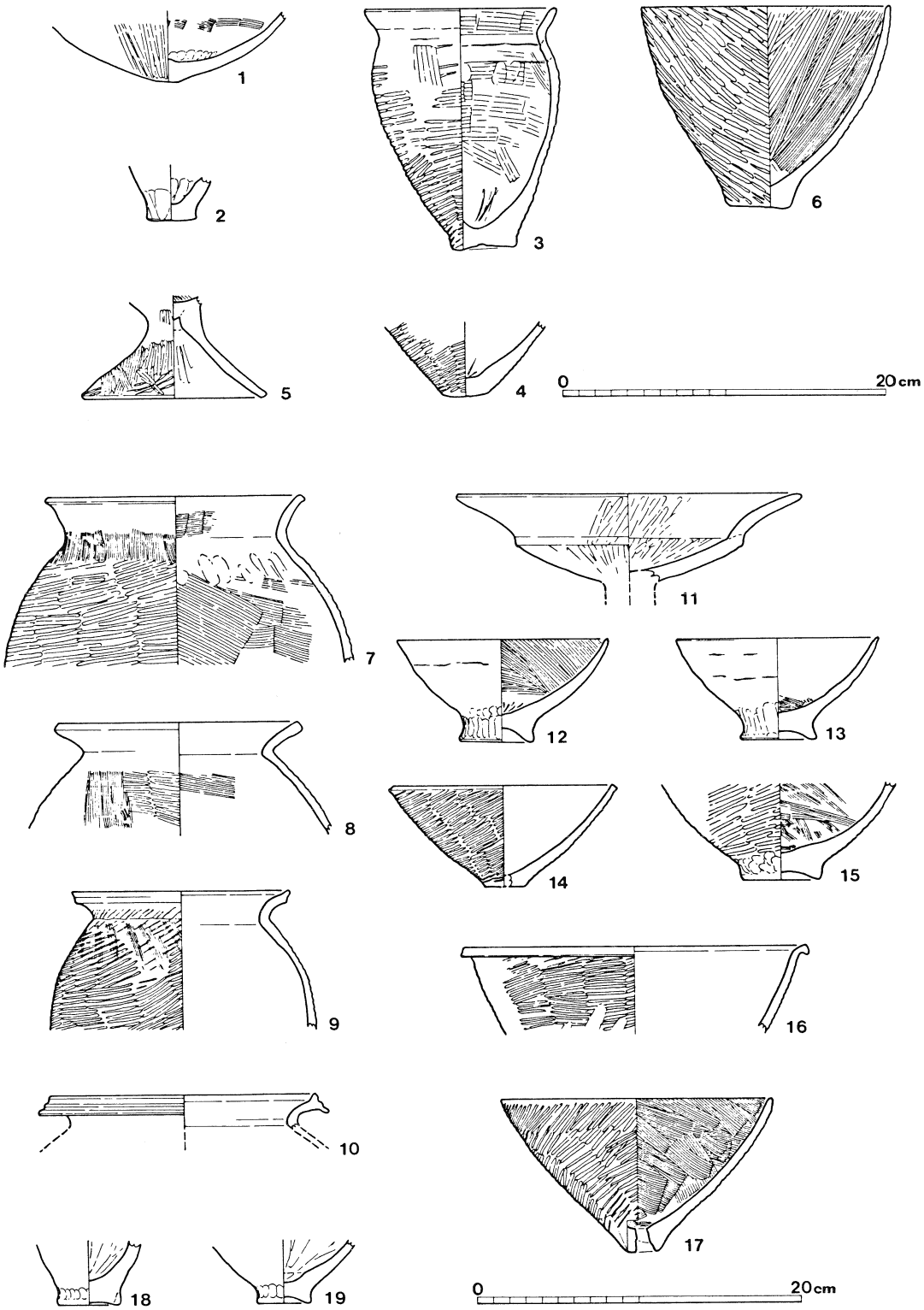
N地区包含層　（第39図－20～25、第60図－250～253）

包含層からは広口壺A：21、二重口縁壺A_1：20、器台A_3：22、器台脚部：23、器台B：24、土錘：25、庄内甕：250～252と石庖丁が出土した。

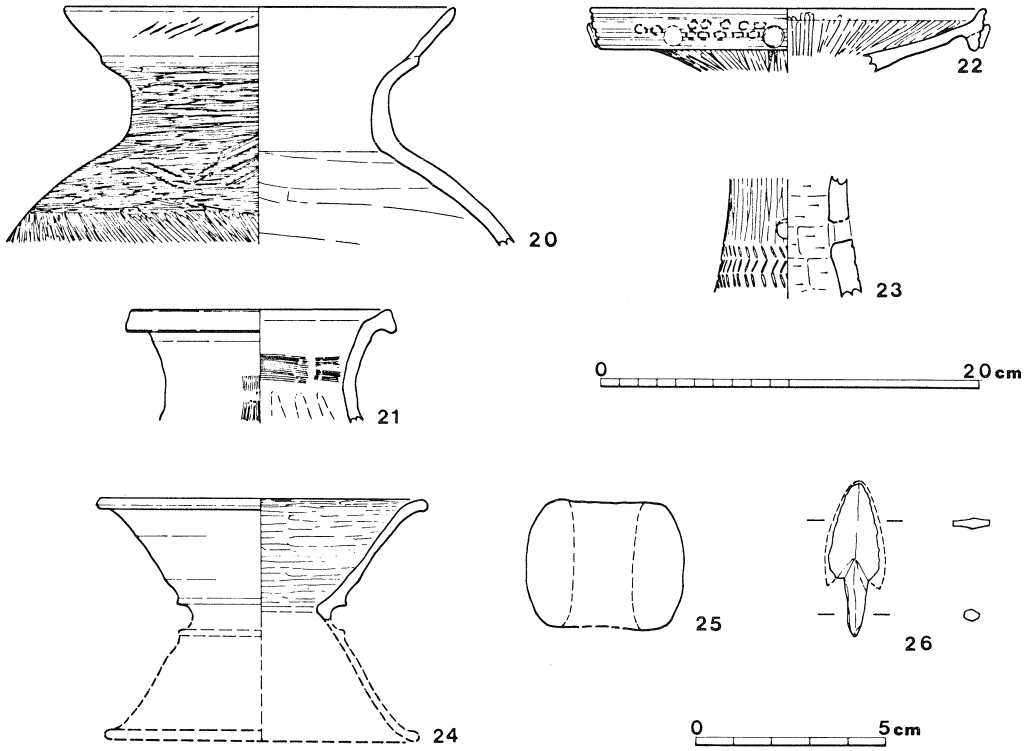
20は頸部～体部上半の外面にヘラミガキを加えるが口縁部外面に右上がりのタタキを残す。他の体部片にもタタキが残るものがある。口径20.8cmを測る。

21の内外面の一部にはハケが残る。口径13.6cmを測る。

22は、口縁端部を上・下に拡張し4条の擬凹線を巡らした後、円形浮文を付する。浮文間には竹管文を加える。口径21cmを測る。



第38図　ＳＢ０１・０２出土土器実測図



第39図　N地区出土土器・土製品・銅鏃実測図

23は器台脚部で、内面にヘラケズリを加える。外面は円孔の下方にヘラ描羽状文を施す。小片のため、円孔数は不明である。

24は山陰系の鼓形器台である。外面はヨコナデ、内面はヘラミガキである。肉眼では在地の胎土と大差ない。

25は素焼の管状土錘(注42)である。直径4.2cm、長さ3.4cm、重さ現47ｇを測る。

250～252は胎土に角閃石、雲母を含む生駒西麓産の庄内甕体部片である。外面はいずれも６本／cmのタタキ、内面は右方向のヘラケズリを加える。

253は砂岩製の石庖丁で、約½残存する。半月形直線刃型のものである。

SB06　（第40図－27～35、第60図－248）

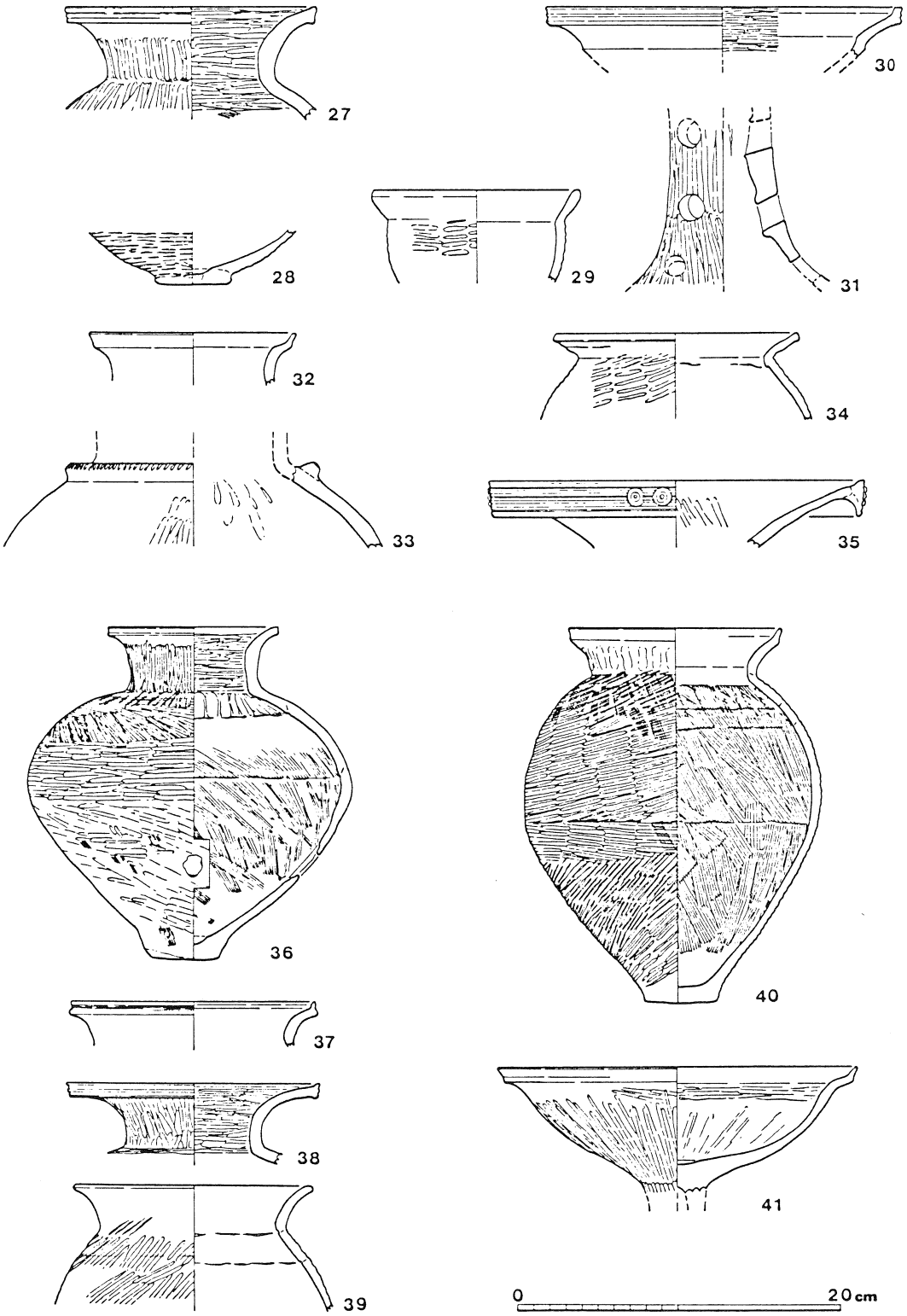
SB06出土土器には、広口壺B_1：27、広口壺B_2：32、壺体部：33、甕Ａ：34、甕Ｂ：29、甕底部：28、高坏E_2：30、器台A_3：35、器台脚柱部：31と甕体部片：248がある。27～31は埋土最下層、32～35・248は埋土最上層から出土した。

27は口縁端部をつまみ上げ、外面を板小口状工具でヨコナデする。内外面をヘラミガキするが、一部にハケを残す。口径15.7cmを測る。

28は球形に近い甕底部で底部裏面にタタキを加える。

29は口径12.6cmを測る小型甕で体部外面下半に煤が付着する。

30は丹後、但馬系の高坏で、口縁端面に２条の擬凹線を施文する。外面はヨ



第40図　ＳＢ０６・０７出土土器実測図

コナデ、内面はヘラミガキである。小片で傾き等は不確実である。

31は大き目の円孔を上・下3段、各段3孔穿つ。内面上半にはシボリ目が残る。上端の現径6.4cm、下端の現径12.5cmを測る。

32は、口径12.8cmを測るもので、内外面の調整はヨコナデである。

33は、壺体部上半で、頚部に刻目を持つ凸帯を巡らす。

34は、口径15.0cmを測る甕で、頚部の屈曲が強く甕Eのプロポーションに近い。体部外面に2本／cmのタタキを加える。体部内面は摩滅のため調整不明である。

35は口縁端部の拡張面に6条の擬凹線を巡らし、竹管文付円形浮文を付す。小片のため浮文間の間隔は確定できない。口径23.2cmを測る。

248は外面に右上がりの稜杉文タタキを有する甕体部片で、内面上半はナデ、下半はハケが残る。外面上端にヨコナデが残り、頚部に近い部分と思われる。

SB07　（第40図－36～41）

SB07出土土器には広口壺B_1：36、広口壺B_2：37、広口壺C_1：38、甕B：39、甕D_1：40と高坏E_1：41がある。36～40は住居址の埋没直前に投棄された土器群で、41が住居址南東部で、床面から若干浮いて出土した高坏である。

36は、張りの強い体部を持つもので、頚部～体部外面の上半はていねいなヘラミガキだが、下半はやや粗いミガキでハケが残る。体部下半に外からの打撃による孔が1ヶ所ある。口径10.5cm、器高20.4cmを測る。

37は口径15.4cmを測る壺口縁部で、内外面はヨコナデを加える。

38は口径16.0cmを測るもので、口縁端部を若干つまみ上げ、外面に2条の凹線を巡らす。

39は口径14.6cmを測る。体部に右上がりのタタキを施す。タタキは頚部中位まで及んでいる。

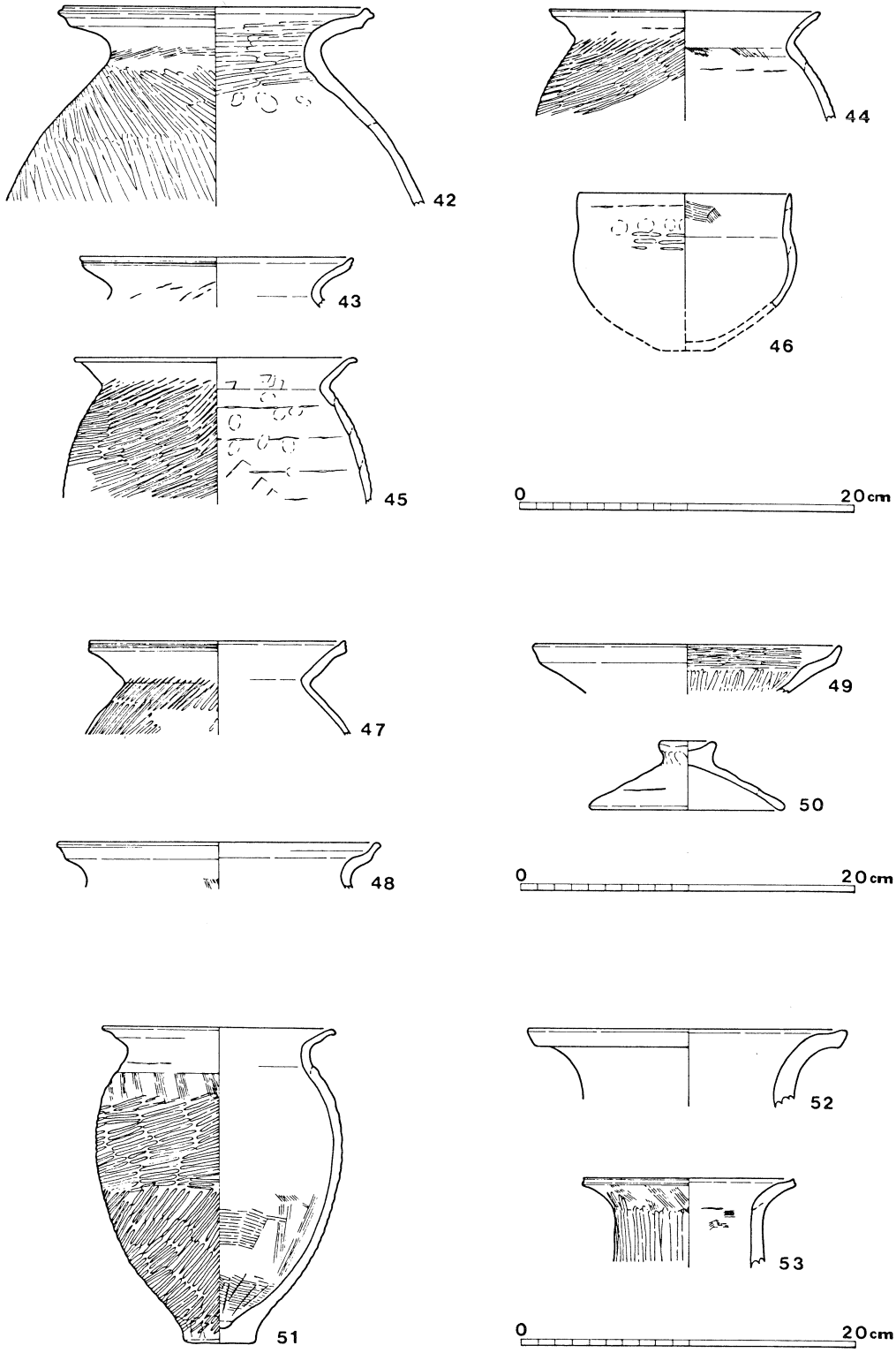
40は上方に拡張した口縁端部を持つ。口頚部外面にユビオサエ痕が残る。体部外面の上半と中位の一部に、タタキの後ハケを加える。体部外面下半は底部外面を除き煤が付着し、底部外面～裏面は2次過熱による赤変化を認める。口径13.4cm、器高23.2cm、容量2.71ℓを測る。

41の口縁部内外面はヨコナデし、他はヘラミガキする。脚部を欠くが、中空の脚柱部を持つと考えられる。口径22.6cmを測る。

SK02　（第41図－42～46）

SK02出土土器には、広口壺C_2：42、甕B_1：45、甕C：43・44と小型鉢B：46がある。

42はゆるやかな「く」の字状口縁部を持ち、端部を上方に拡張する。体部外面と口縁部内面をヘラミガキ、体部内面をていねいなナデで仕上げている。口径17.8cmを測る。



第41図　ＳＫ０２・０４～０６出土土器実測図

43・44は口縁端部を上方につまみ上げている。43の口縁端面には2条の擬凹線が巡る。両者共、口径16.0cmを測る。

45の口縁端部は水平方向に折りまげられている。体部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。

46は胎土も精良でなく、調整もタタキを残すなど、やや雑な作りと言える。口径12.6cmを測る。

SK04　(第41図－47～50)

SK04からは、甕C：47、甕D_1：48、高坏E：49と蓋が出土した。

47は口縁端部をつまみ上げ、端面に板小口状工具でヨコナデを施こす。内面は摩滅のため調整不明である。口径15.2cmを測る。

48は口径18.8cmを測るもので、拡張部内外面にヨコナデを加える。

49は体部の彎曲がゆるく、鉢の可能性もある。外面は摩滅のため調整不明だが、内面はヘラミガキで仕上げる。口径18.4cmを測る。

50は口径11.6cm、器高4.1cmを測る。煤の付着は見られない。

SK05　(第41図－51)

51は甕B_1に属す。口縁部外面に強いヨコナデによる凹部が巡る。内面上半はナデ調整である。煤は付着しない。口径14.0cm、器高19.0cm、容量1.67ℓ。

SK06　(第41図－52・53)

SK06から広口壺B_1：52、広口長頸壺：53が出土した。

52は摩滅のため、内外面の調整は不明である。口径12.6cmを測る。

53の口縁端部には浅い凹線が1条巡る。頸部外面にヘラミガキを加えるが、他はハケとナデで仕上げる。口径12.6cmを測る。

ST01　(第42図－54・55)

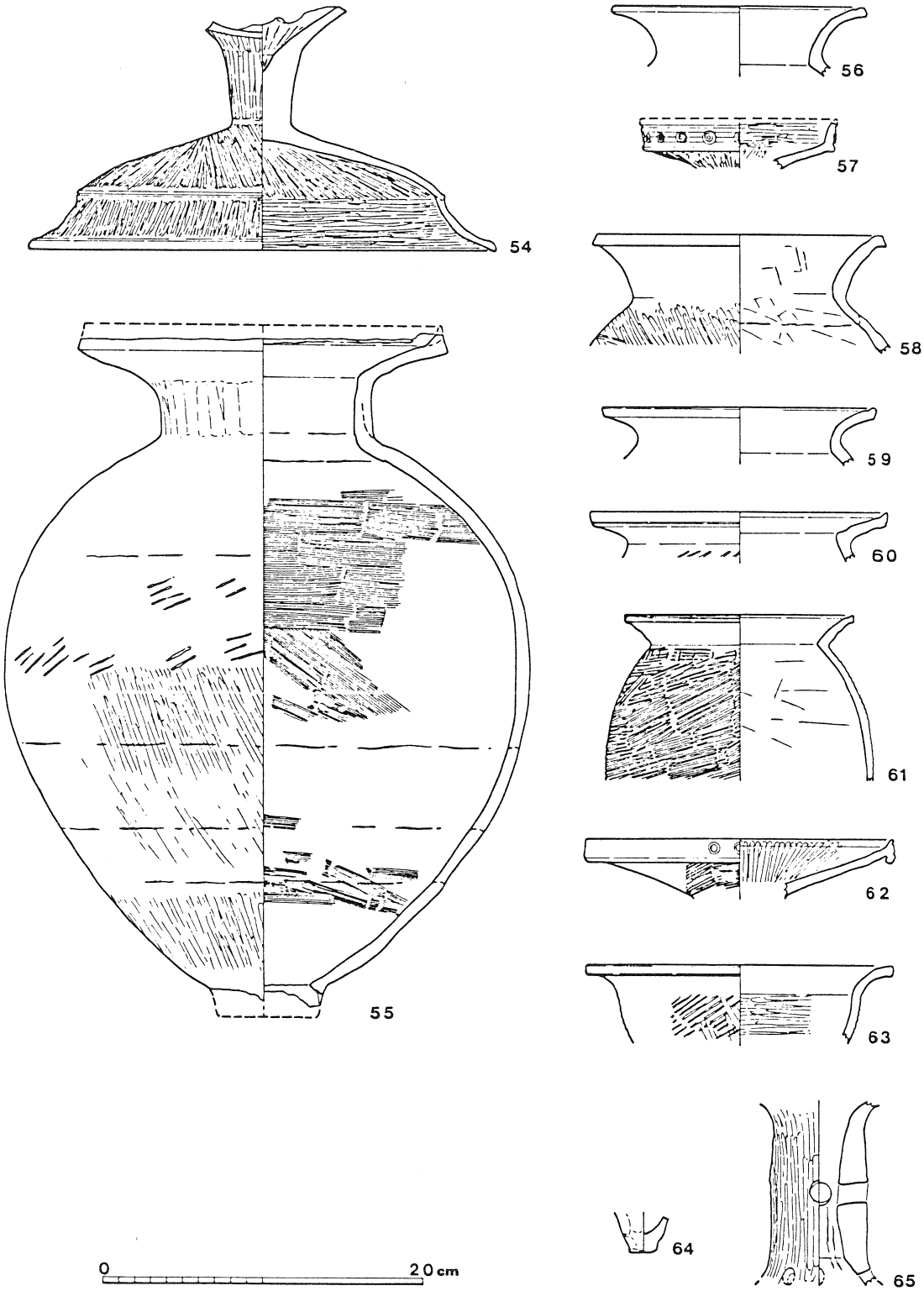
ST01は、SB06の北側で検出された壺棺墓で、54は高坏B_3、55は広口壺Eに分類される。

54は脚裾部の穿孔付近で人為的に打ち欠かれる。脚柱部は中実で、内面にシボリ目が残る。坏口縁端部は若干肥厚する。口縁部と体部の境に1条の沈線を巡らす。脚内面を除きヘラミガキを加える。口径29.4cm、現器高15.2cmを測る。

55は口縁端拡張部と底部を打ち欠く。体部外面上半は摩滅のため調整不明だが、下半同様ヘラミガキと思われる。体部外面中位に右上りのタタキを残す。底部は突出する平底と思われる。胎土は在地のものと変わらない。現口径23.0cm、現器高42.4cmを測る。

SA区土器群　(第42図－56～65)

当土器群から出土した土器には、広口壺C_1：56、広口壺D：58、二重口縁壺B：57、甕A：59、甕C：60、甕E：61、器台A_3：62、鉢E_1：63、ミニチ



第42図　ＳＴ０１・ＳＡ区土器群出土土器実測図

ュア土器：64と器台脚柱部がある。

56は口径15.8cmを測るもので、内外面はヨコナデで仕上げている。

57は口縁端部を上方に拡張し、外面に3条の凹線を巡らし、竹管文付円形浮文を貼り付ける。拡張部端は欠失する。口径推定14.4cmを測る。

58は口径18.2cmを測る。口縁端部に面を持ち、下方にややつまみ出す。口縁部内外面はヨコナデし、体部外面にヘラミガキを加える。

59は口径17.2cmの甕だが、現存部に煤は付着しない。

60は口縁端面に不明瞭な1条の沈線があるが、意識的なものか疑わしい。口径18.6cmを測る。

61も口縁端面に1条の沈線が巡る。体部外面上半、頸部に近い部分にツメ圧痕状の列点がある。体部内面は板小口状工具でナデる。口径14.4cmを測る。

62は口縁端部を上・下に拡張し、2個1対と思われる竹管文を付す。受部外面には4本／cmのタタキが残る。口径19.6cmを測る。

63の体部外面はタタキの後、一部ヘラミガキを加え、体部内面はヘラミガキで仕上げる。口縁部内外面はヨコナデを加える。口径19.2cmを測る。

64の胎土には砂粒を多く含む。底は不安定で径1.7cmを測る。

65は中ぶくらみの脚柱部で、上・下2段に4方向の円孔を穿つ。

SA区包含層　(第43図－66～70)

遺構ベース土　SA区の遺物包含層からは広口壺E：67、鉢A_2：69が出土し、遺構ベース土中からは、長頸壺B：66、甕D_2：68、高坏脚部：70が出土した。

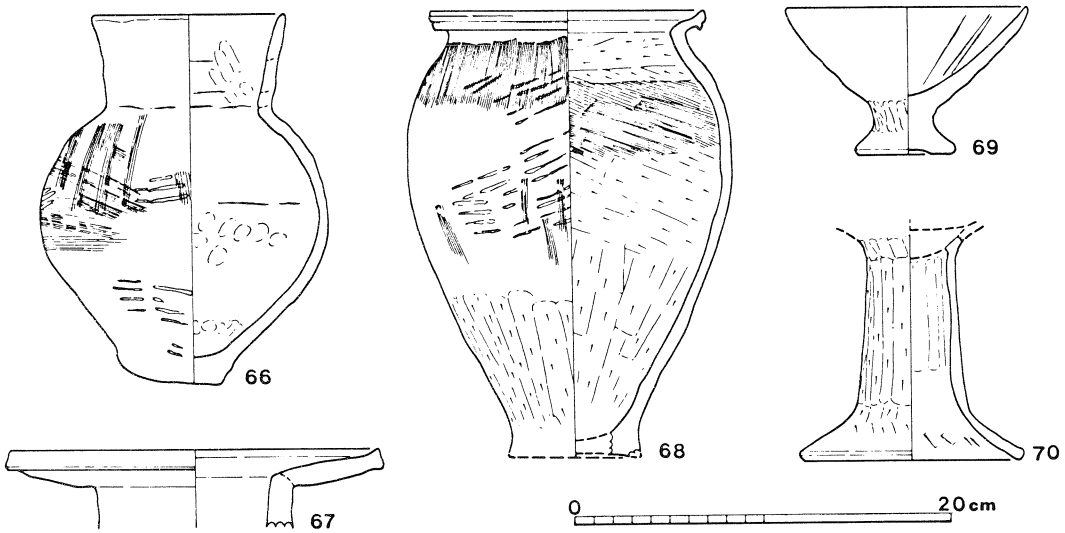
66は不安定な平底を持つもので、体部外面はハケの後ナデを加えるが、タタキを残している。体部外面下半に煤の付着が見られる。口径10.0cm、器高19.6cmを測る。

67は器壁の厚いもので、口縁部をヨコナデし、頸部をナデで仕上げる。胎土は在地のものと変化はない。口径19.4cmを測る。

68はSB06南側のベース土中から出土した（第14図）。口縁端部を上・下に拡張し、2条の沈線を巡らす。体部外面上半はタタキをハケで消す。同下半と体部内面にはヘラケズリが見られる。胎土から生駒西麓産のものと考えられる。口径14.5cm、器高推定23.6cmを測る。

69は口径12.8cm、器高7.7cmを測る。体部内面は、板小口状工具でナデる。

70は太い筒状の脚柱部と、斜め下方に短くひろがる裾部を持つ。上端部内面には、粘土円板が剥離した痕跡がある。



第43図　ＳＡ区出土土器実測図

SB区土器群　（第44図～第47図－71～108）

（礫層上面）　SB区で検出された土器群の内、礫層上面で出土したものには、短頸壺：71、甕Ａ：72～75・81～85、甕B_1：77～79・86、甕B_2：76、甕Ｃ：80・87・88、甕D_1：89、高坏B_1：90～99、高坏D_1：100～102、鉢A_1：103、鉢E_1：104～106、鉢E_3、有孔鉢Ｂ：107とミニチュア土器がある。鉢E_3は細片である。

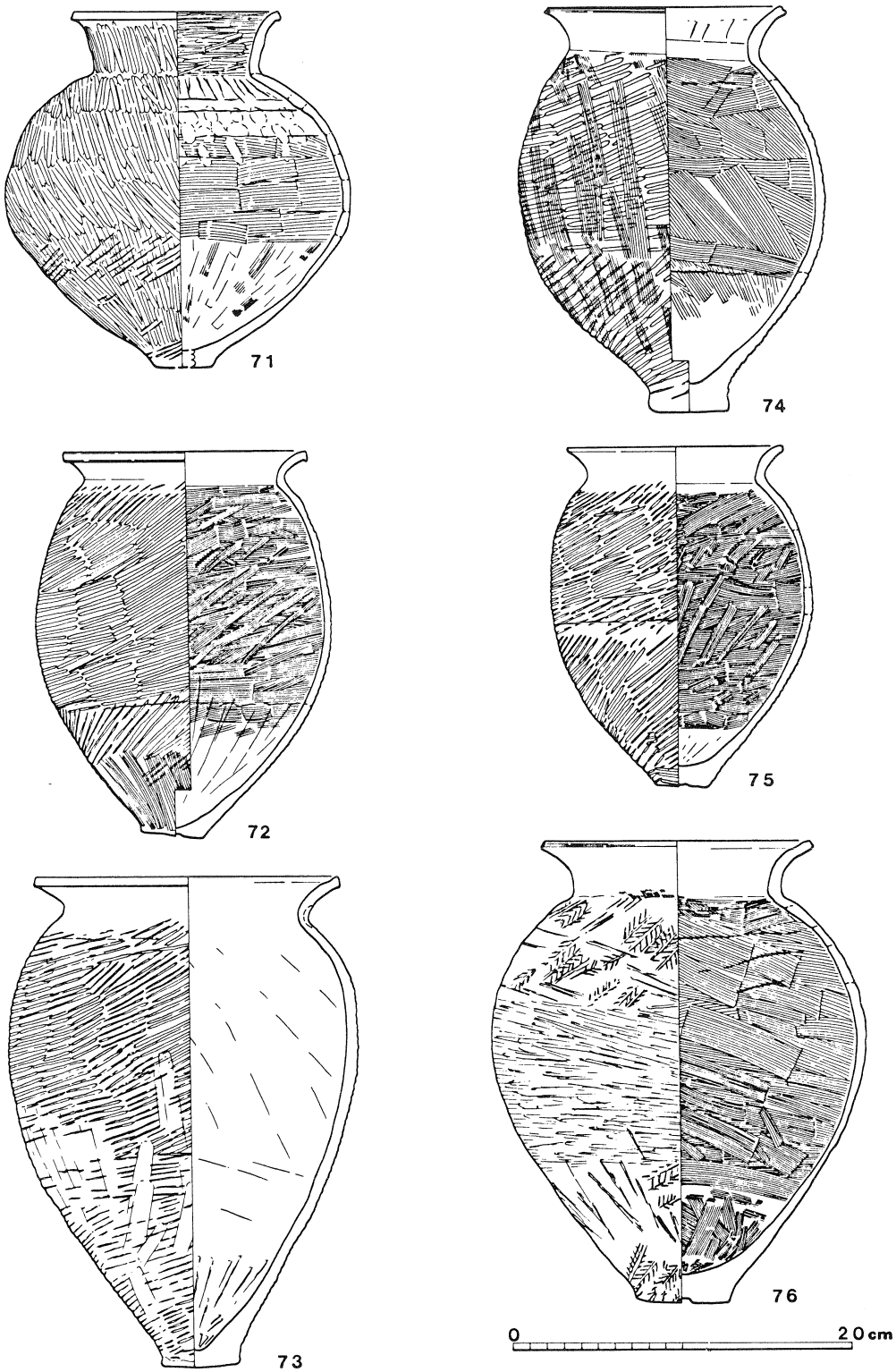
71は球形に近い体部と小さな平底を有するもので、外面と口縁部内面にヘラミガキを施す。外面下半には右上がりのタタキが残る。体部内面には、幅1.5～２cm程の粘土紐痕がよく残る。口径12.2cm、器高21.1cmを測る

甕Ａの内72・73・75は張りの弱い体部から直線的に底部につながるものである。一方、74は強い張りのある体部と突出した分厚い底部を持つ。口縁部はゆるやかに斜上方にのび、B_1の形態に近い。

72は75と胎土・調整等がよく似る。底部内面は板小口により荒くかき上げた痕跡がある。口径14.2cm、器高27.9cm、容量2.9ℓを測る。

73はやや大型で、体部外面下半の一部にナデを加える。底部裏面に木の葉圧痕が残る。口径17.8cm、器高29.0cm、容量4.17ℓを測る

74は口縁端面に１条の凹線が巡る。体部外面はタタキの後、粗くハケを加え



第44図　ＳＢ区土器群（礫上）出土土器実測図（１）

る。口径13.8cm、器高24.1cm、容量3.24ℓを測る。

75は口径12.8cm、器高20.4cmを測るもので、72に比し、やや口縁部の返りがゆるやかである。容量2.19ℓを測る。

76は右上りの綾杉文タタキを有するもので、体部外面中央部は、草の茎を束ねた様なものですり消している。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はハケを加える。底部片とは接合せず、図上で復元した。口径15.6cm、器高推定27.3cm、容量推定5.47ℓである。

77はやや外に拡がる底部を持つ。体部外面下半は、タタキの後、板小口によるたてナデを加える。体部内面はハケ乃至ナデで、下半に板小口部の圧痕が残る。口径13.2cm、器高推定24cm、容量推定2.81ℓを測る。

78は小型のものであるが、体部外面上半には煤が付着する。体部外面は上半と下半で傾きの異なるタタキが施される。下半にはさらにたて方向のタタキが加えられる。体部内面下半は、摩滅のため調整不明である。口径10.6cm、器高14.5cm、容量0.97ℓを測る。

79はさらに小型で、煤は付着しない。底部裏面に粘土を充塡した跡が明瞭に残る。タタキは右下がりで他と異なる。口径12.2cm、器高11.3cm、容量0.55ℓ。

80の底部外形は77に似るが、これは分厚いものである。底部外面に板小口による粗いナデを加える。口径14.8cm、器高21.4cm、容量2.13ℓを測る。

81の体部内面には、左回りのヘラケズリが加えられる。口径15.0cmを測る。

82の体部外面にはタタキの後、一部ナデが施される。体部内面は板小口によるナデである。口径15.0cmを測る。

83の口縁端部は若干上・下に拡張されている。体部内面は板小口によるナデである。口径13.8cmを測る

84・85も前者と同様の調整を加える。84は口径13.8cm、85は14.2cmである。

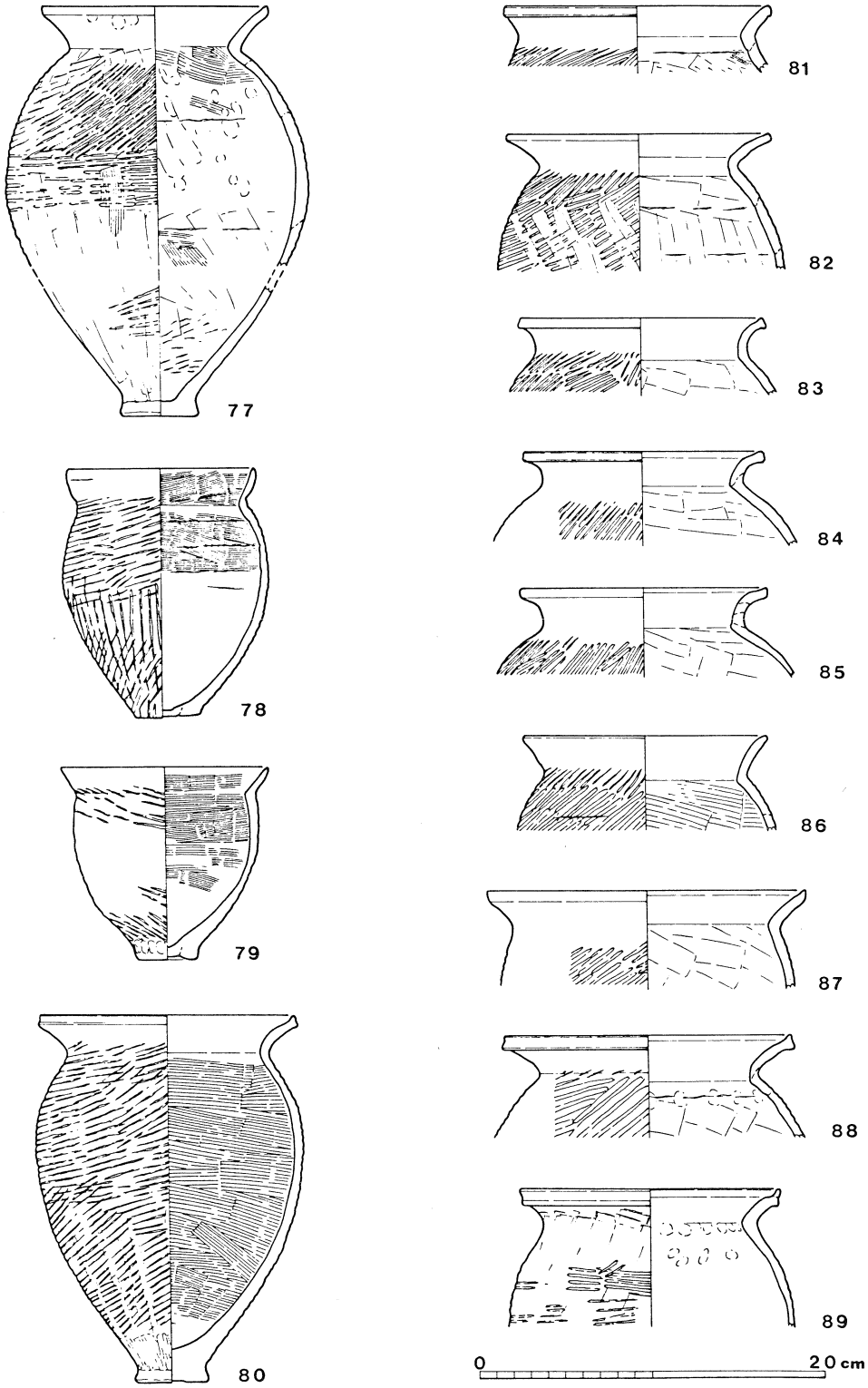
86は80と共に外面のタタキが頚部の屈曲部より上方に及ぶものである。口径11.8cmを測る。

87は中型のものでは珍しく口径が体部径を凌駕する。口径18.4cmを測る。

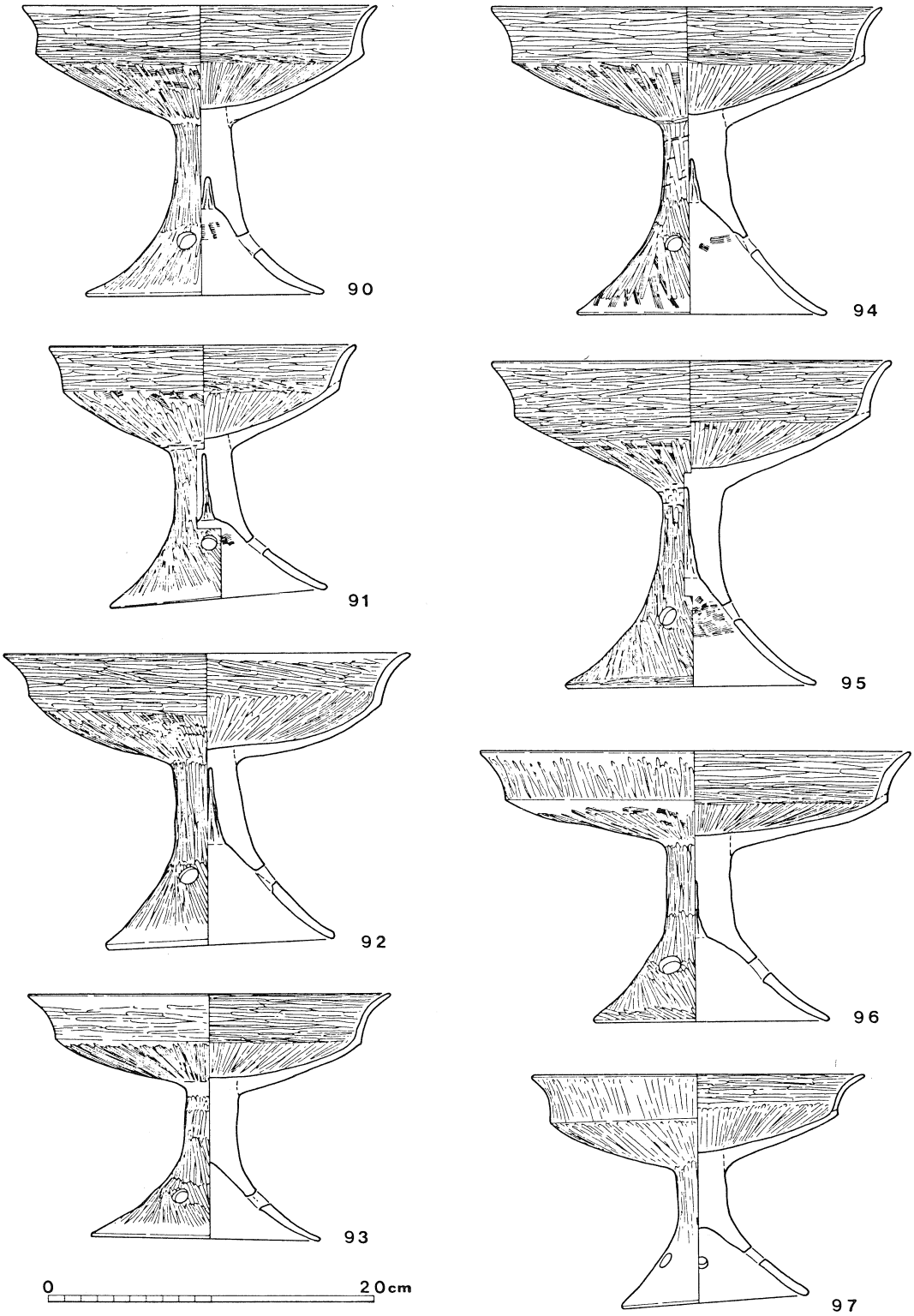
88は口径16.4cmを測るもので、外面に2本／cmのタタキを施している。

89は頚部～体部上半に板小口によるナデを加え、水平方向のタタキを消している。体部内面はナデ、上半に指頭圧痕が残る。口径14.8cmを測る。

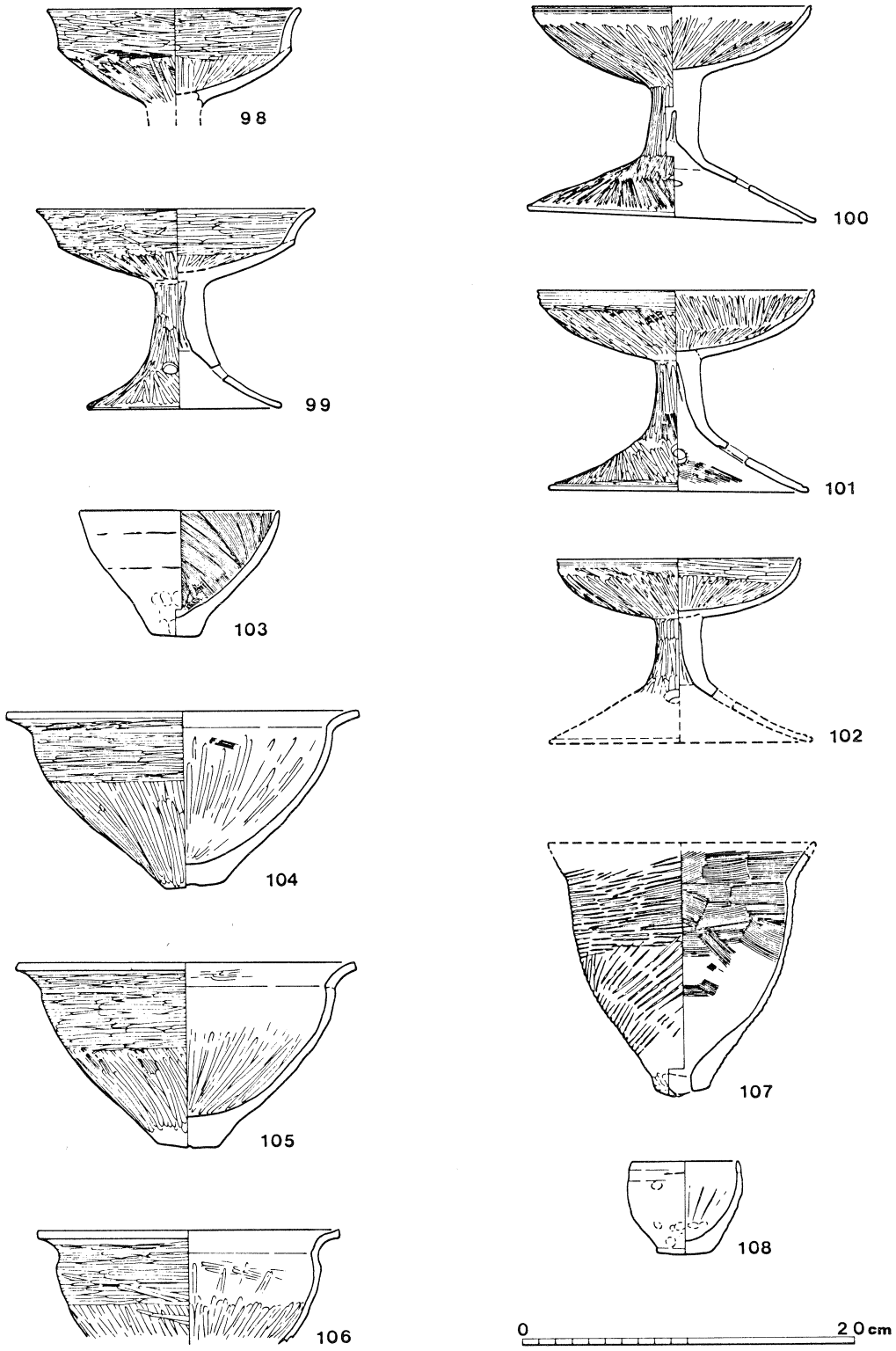
高坏B_1には大型（90～97）と小型（98・99）の2種がある。大型のものは、脚柱部の形状によって、中実のもの（93・97）とそれ以外とに細分できるが、後者も脚柱部内面にシボリ目の残る細い穴を残すのみで、中実に近い形態を有する。ここにあげたB_1は、ほぼ同様の胎土、調整を持つもので、脚裾部の円孔数も3と一致する。



第45図　ＳＢ区土器群（礫上）出土土器実測図（２）



第46図　ＳＢ区土器群（礫上）出土土器実測図（３）



第47図　ＳＢ区土器群（礫上）出土土器実測図（４）

90は口径21.8cm、器高18.0cm、91は口径18.8cm、器高16.5cmを測る。92は坏体部に彎曲を持ち、次の93と共に口縁部の外反度が他と比較し、やや大きい。口径25.0cm、器高18.5cm、93は口径22.2cm、器高15.2cmを測る。脚柱部が短く脚裾部が若干開き気味である。94は脚裾部外面にハケが残る。口径23.6cm、器高19.1cm。95は96と共に脚裾端部外面によこ方向のヘラミガキを加える。口径24.2cm、器高20.2cmを測る。

96・97は坏口縁部外面のヘラミガキが、やや粗いたて方向のもので、他と異なる。96は口径26.4cm、器高17.0cm、97は口径20.2cm、器高14.5cmである。

98は小型のもので口径15.4cmを測る。99も同様で、口径16.8cm、器高12.1cmを測る。前者に比べ口縁部の外反度は大きい。

高坏D_1は3個体ある。いずれも胎土精良で、焼成も良好である。調整・色調も共通する。脚裾部の円孔数はいずれも4である。

100は中実の脚柱部を持つもので、口縁端部外面に3条の浅い擬凹線を巡らす。口径16.8cm、器高15.1cmを測る。

101は中空の脚部を有する。坏外面と脚柱部外面の一部にハケが残る。口縁端部外面に2条の擬凹線を施文する。口径17.0cm、器高12.2cmを測る。

102も中空の脚柱部を持つもので、口縁端部外面に2条の擬凹線を巡らす。脚裾部を欠失するが前2者同様、大きく拡がるものと思われる。口径14.8cm。

103は口径12.2cm、器高7.7cmの小型鉢である。外面はナデ、内面はていねいなハケで仕上げる。

104・105はほぼ同形、同大のものである。調整も外面はヘラミガキ、内面はナデの後、粗いヘラミガキを加え、外面ヘラミガキの範囲も共通している。104は口径21.2cm、器高10.6cm、105は口径20.2cm、器高11.1cmを測る。

106は前者と口縁部の形がやや異なるが、胎土・調整・色調等は共通する。体部外面下半にうすく煤が付着する。口径18.4cmを測る。

107は土器の歪が激しく、口径は誤差を含む。外面のタタキは口縁部に及ぶ。内面上半はハケ、下半はナデを加える。焼成前にやや大き目の穿孔がなされる。煤の付着は見られない。口径推定16.4cm、器高推定15.4cmを測る。

108は口径6.4cm、器高5.7cmを測る。外面はナデ、内面に板小口痕が残る。

SB区土器群（シルト層）　（第48図～第52図－109～155）

SB区で検出された土器群の内、シルト層中から出土したものには、広口壺B_1：109・110、広口壺B_2：111・112、広口壺D：113、広口壺F：117、細頸壺：114、短頸直口壺：115、短頸壺：116、甕A：118～128、甕B_1：129～136、甕B_2、甕C：137～139、甕D_1：140・141、甕D_2：142、高坏B_2：143、高坏D_1：145～147、高坏D_2：144、鉢A_1：148、鉢D、鉢E_1：149・150、鉢E_2：

151、鉢E_3：152、有孔鉢A：153、手焙形土器：154と小型鉢A：155がある。

109は外面をハケで調整し、体部の一部に粗いヘラミガキを加える。体部上半内面は明瞭な粘土接合痕が残り、頸部近くにシボリ目がある。口径12.0cm。

110は内外面にヘラミガキを加える。口縁端部は若干垂下する。口径13.8cm。

111は受口状口縁を持つもので、体部外面にタタキが残る。口径13.8cm。

112は口縁部拡張面に4条の擬凹線が巡る。内外面はていねいなヘラミガキを加える。胎土に砂粒をやや含むが密である。口径13.2cmを測る。

113は口縁端面と肩部に3～4個が1組となる竹管文を有する。口径17.4cm。

114は口頸部上半を欠くが、直線的に開くものと思われる。体部上半内面にシボリ目が残る。胎土に砂粒を含むが密である。胴部最大径14.8cmを測る。

115は内外面の調整がハケとナデのみのやや雑な作りのもので、口縁端部はゆるく内彎する。口縁部と体部外面に煤が付着する。口径9.0cmを測る。

116は体部下位に最大径を持つもので、体部外面と口縁端部内面にヘラミガキを加える。胎土に砂粒を含むが密で、焼成も良好である。口径11.8cmを測る。

117は短く斜め上方に開く口縁部と球形に近い体部を持ち、形態は甕に近い。口縁部外面に強いヨコナデによる凹部が巡る。体部外面と口縁部内面はヘラミガキである。体部外面に煤が付着する。口径14.4cm、器高18.8cm、容量2.6ℓ。

118は体部に2本／cmのタタキを施す。口縁部の上半は屈曲する。口径14.4cm。

119は体部外面を連続ラセンタタキで仕上げ、一部にたてハケを加える。タタキは口縁部中位に及ぶ。口径14.6cm、器高22.6cm、容量3.47ℓを測る。

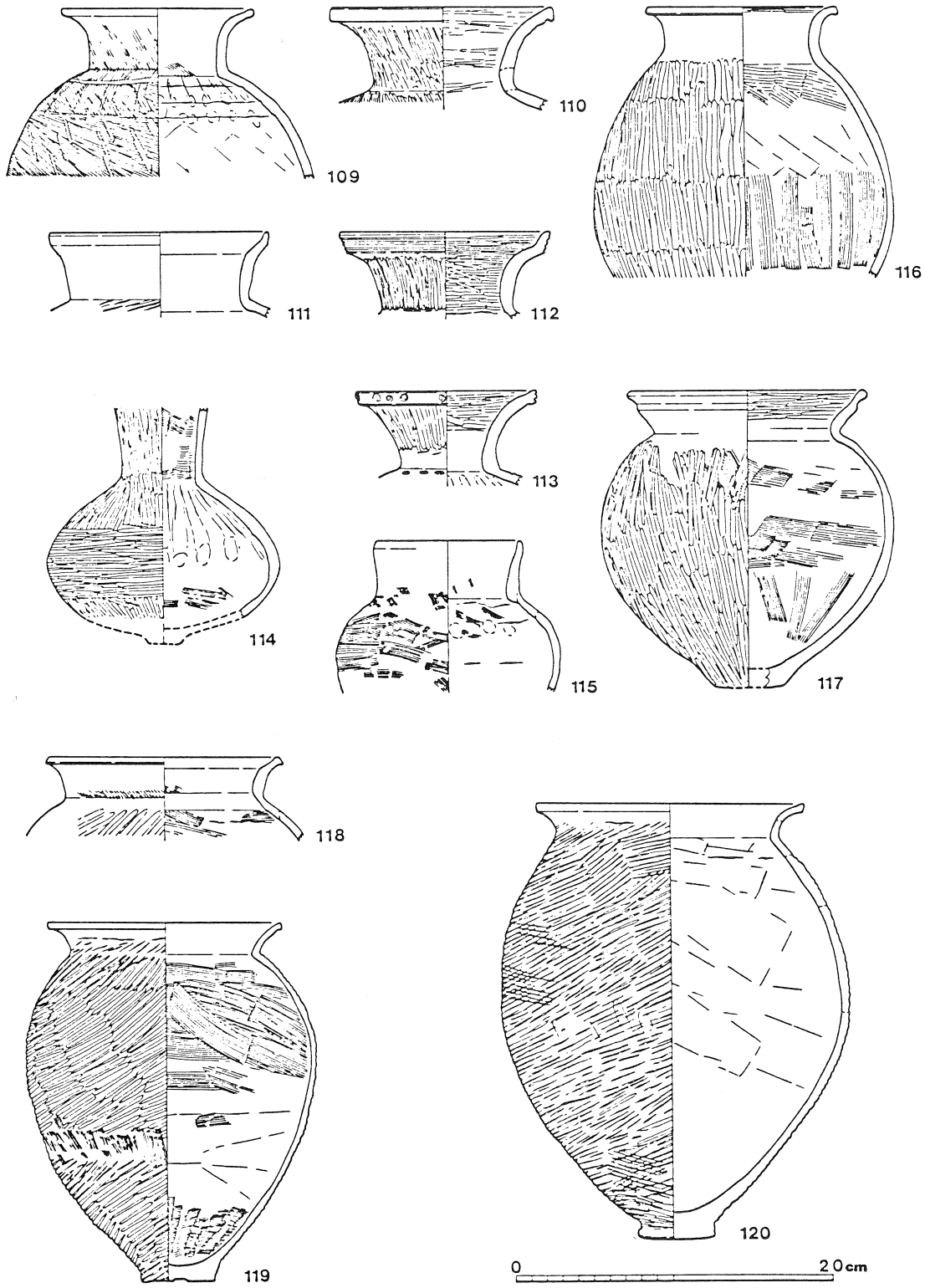
120は大型のもので、口径16.8cm、器高27.5cm、容量5.77ℓを測る。底部と体部上半に傾きの異なるタタキを有するが、他はラセン状にタタキ上げる。口縁部中位にタタキが認められる。体部内面は板小口によるナデを加える。

121のタタキは上半・中位・下半で傾きが異なる。下半にはハケを加えタタキを消し、上半～中位にも粗いハケを加える。体部内面は板小口によるナデ調整である。口径15.2cm、器高28.2cm、容量5.44ℓを測る。

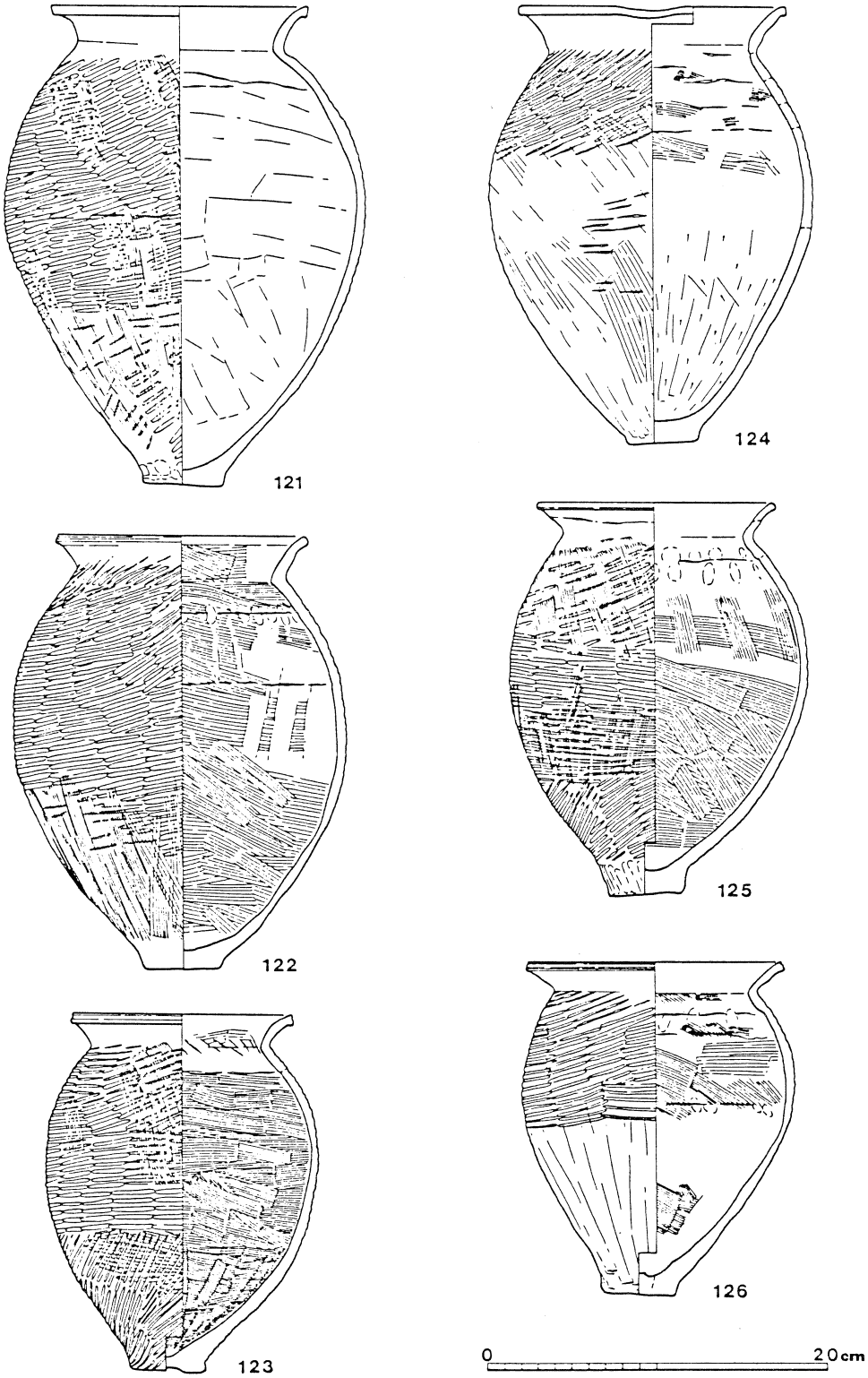
122の口縁端部には1条の不明瞭な凹線が巡る。体部外面下半にハケを加える。口縁部のタタキは中位に及ぶ。口径14.7cm、器高25.6cm、容量4.22ℓ。

123の口縁端部には1条の凹線が巡る。体部外面下半の右上がりのタタキの下に右下がりのタタキが残る。上半の一部と内面にハケを施す。底部裏面に木の葉圧痕がある。口径12.8cm、器高12.1cm、容量2.19ℓを測る。

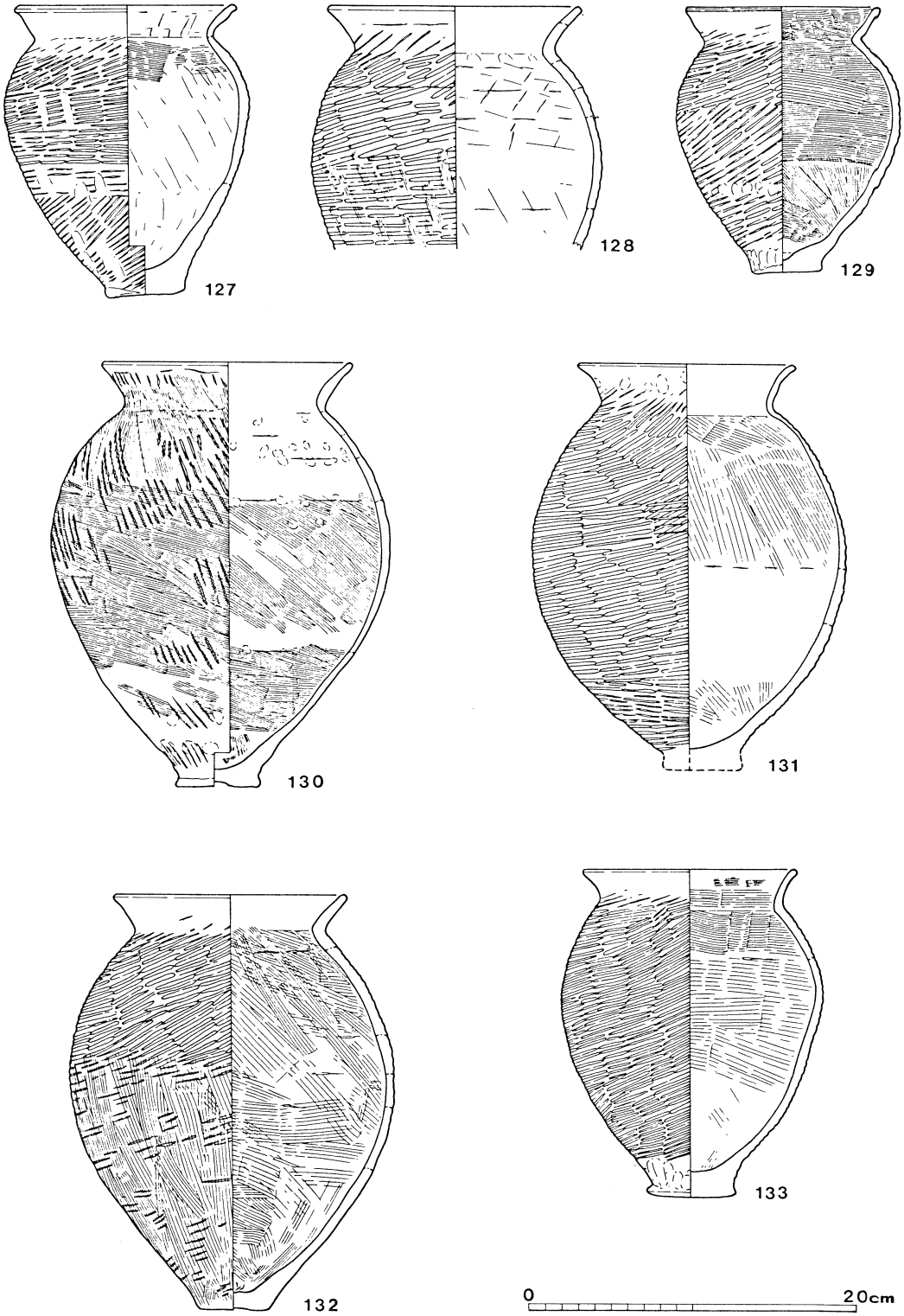
124は口縁部に片口を作る。体部外面は、中位～下半にかけ板小口によるナデを加え、タタキを消す。体部内面下半に浅いヘラケズリを加える。胎土は在地産と変化ない。口径15.8cm、器高25.7cm、容量3.83ℓを測る。



第48図　ＳＢ区土器群（シルト層）出土土器実測図（１）



第49図　ＳＢ区土器群（シルト層）出土土器実測図（２）



第50図　ＳＢ区土器群（シルト層）出土土器実測図（３）

125の体部外面のタタキは上半・中位・下半で方向が変わる。上半～中位にかけ粗いハケを加える。口径13.8cm、器高23.2cm、容量3.07ℓを測る。

126の口縁端部には板小口によるヨコナデが加えられ、擬凹線状になる。体部外面下半は板小口でナデ調整する。口径14.8cm、器高19.6cm、容量2.04ℓ。

127は口径13.0cm、器高18.2cm、容量1.53ℓの小型甕である。外面のタタキは上・中・下で傾きが異なる。体部外面の一部と内面にユビナデを施す。

128のタタキは口縁部中位に及ぶ。体部外面の一部にハケ、同内面には板小口によるナデを加える。口径14.8cmを測る。

129は口径11.6cm、器高16.6cm、容量1.27ℓを測る。口縁部中位にタタキが残る。タタキは体部上半で傾きが変化する。内面全面にハケが加えられる。

130は底部を除く外面全面にハケが加えられる。タタキも他と異なりたて方向に近い。口縁部のタタキは上半に及ぶ。胎土に赤色酸化粒を含まず、この点で在地ものと異なる。口径15.2cm、器高26.1cm、容量4.39ℓを測る。

131の口縁部はやや雑で、端部が波打ち、外面に指頭圧痕が残る。タタキは口縁部中位に及ぶ。口径12.8cm、器高推定25cm、容量3.89ℓを測る。

132は体部外面中位～下半にハケがかかる。口縁部中位にタタキが及ぶが、ヨコナデで大半は消える。口径14.2cm、器高25.5cm、容量4.19ℓを測る。

133は連続ラセンタタキを施す。口径13.0cm、器高20.2cm、容量2.13ℓ。

134は口径12.8cm、器高18.4cm、容量1.43ℓを測る小型の甕である。

135は張りの強い体部を持つもので、タタキをナデですり消す部分がある。体部内面もハケ後ナデである。口径12.2cm、器高15.3cm、容量1.14ℓを測る。

136の口縁部は、内面のヨコナデで浅い受口状となる。口径14.0cmを測る。

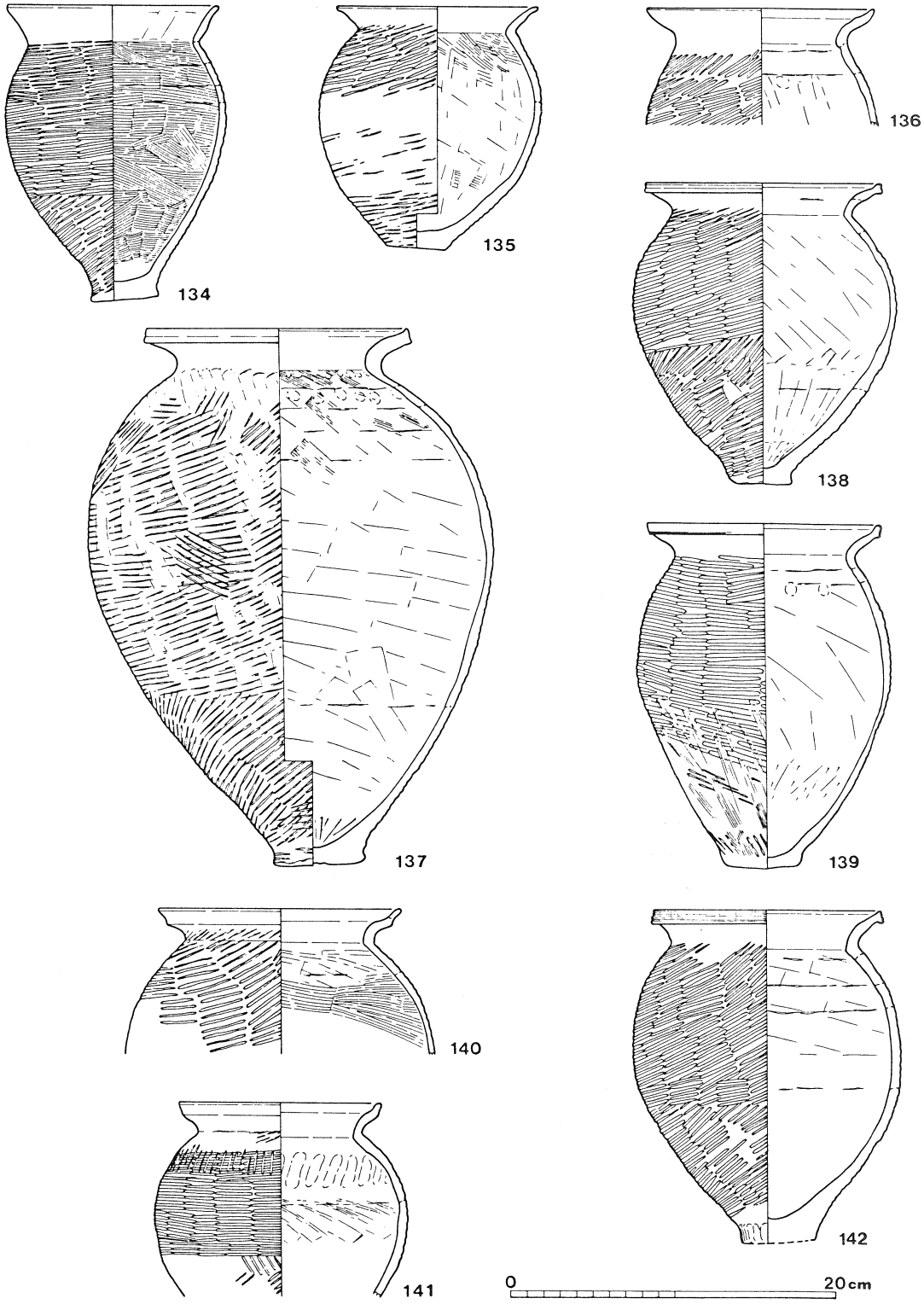
137は出土した甕の中で最大のもので、口径16.2cm、器高33.6cm、容量8.83ℓを測る。口縁部は分厚く、端部はつまみ上げて終る。タタキは上半・中位・下半で傾きが異なり、一部にユビナデを加える。体部内面は板小口によるナデである。口縁部の一部と体部の外面に煤が付着する。

138は口縁端部を上方につまみ上げ、外面に1条の凹線を巡らす。体部内面は板小口によるナデである。底部裏面に木の葉圧痕が残る。口径14.6cm、器高19.0cm、容量1.98ℓを測る。

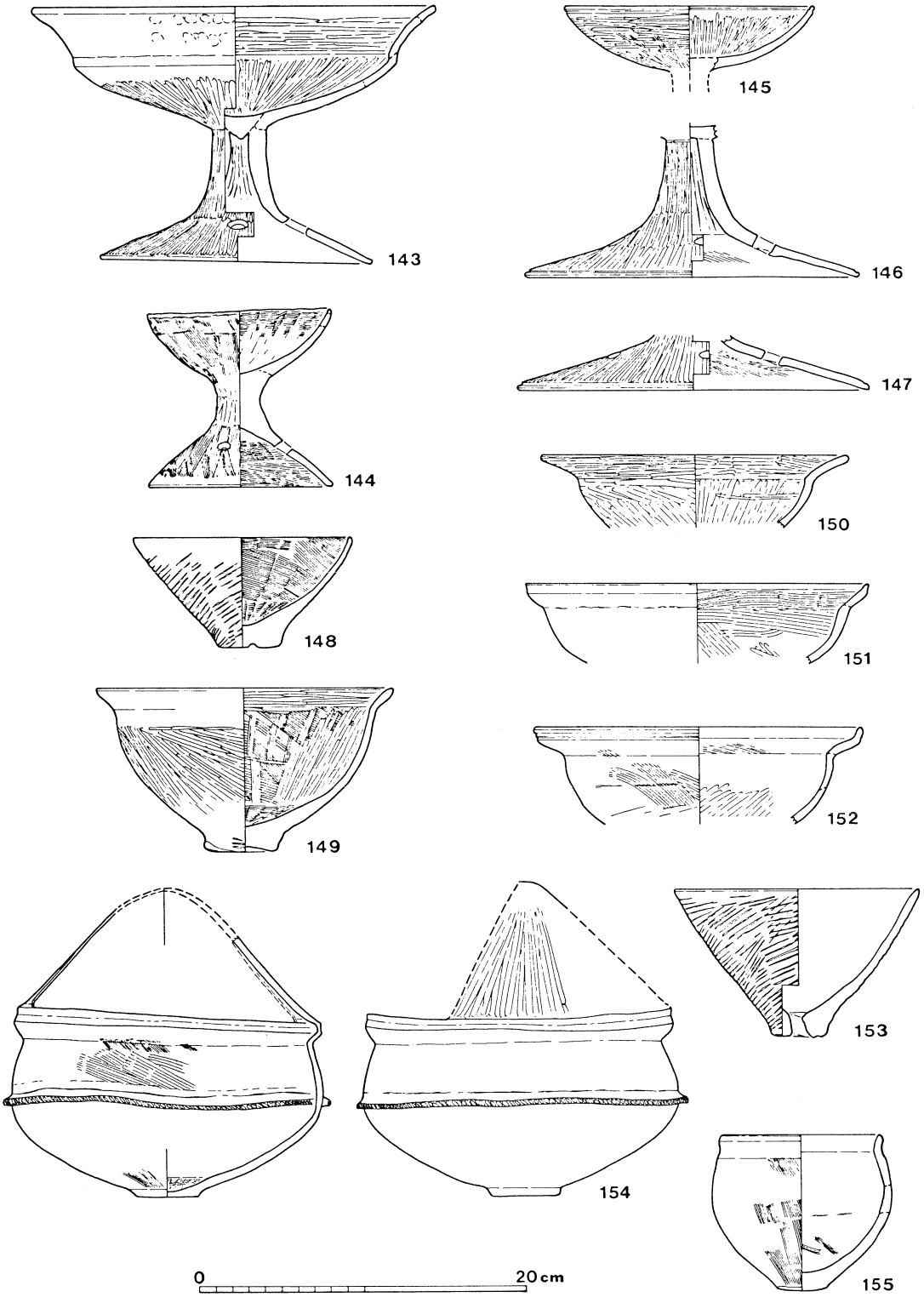
139は右下がりのタタキを施し、底部も薄い円板状を呈して他と相違する。体部内面下半の一部にヘラケズリが見られる。他の内面はナデで仕上げている。胎土に赤色酸化粒を含まない。口径14.6cm、器高21.5cm、容量2.28ℓを測る。

140の胎土は、若干砂粒を含むが密のものである。口縁部外面にタタキが残る。口径14.8cmを測る。

141は口径12.2cmを測る小型の甕で、体部外面上半に、平行タタキの後、た



第51図　ＳＢ区土器群（シルト層）出土土器実測図（４）



第52図　ＳＢ区土器群（シルト層）出土土器実測図（５）

て方向のタタキを加える。体部下半には、右下がりと左下がりのタタキが残る。

142は口縁端面に3条の擬凹線を巡らす。内面は板小口によるナデ調整である。底部裏面は剥離している。口径14.0cm、器高20.6cm、容量2.27ℓを測る。

143は脚部と坏部を連続して成形し、後で円錐形の粘土を充填する。脚柱部は中空で、内面にシボリ目を残す。坏口縁部外面は摩滅のため指頭圧痕のみ明瞭に残るが、ミガキが加えられていたと思われる。口径24.6cm、器高16.3cm。

144は粗雑な作りのもので、内外面をハケのみで仕上げ、口縁端部も波打つ。脚柱部は中実で、脚裾部に3円孔を穿つ。口径11.2cm、器高11.2cmを測る。

145は礫上例と比較し、やや胎土に砂粒が多くなるが、他の高坏と比べれば、精良である。口縁端部外面に浅い沈線が1条巡る。口径15.2cmを測る。

146・147は高坏D_1の脚部と考えられる。いずれも脚裾端部上面に凹線が1条巡る。円孔数は4である。脚柱部は中空で、内面にシボリ目が残る。

148は小型鉢で口径13.2cm、器高6.9cmを測る。外面はタタキ、内面はハケ。

149は体部外面にヘラミガキを加えるが、底部付近にタタキが残る。体部内面にもハケの後、粗いヘラミガキを施している。口径18.2cm、器高10.2cm。

150は胎土精良で、内外面をヘラミガキで仕上げる。口径18.8cmを測る。

151は外面にナデ、内面にハケを加える浅い鉢である。口径21.0cmを測る。

152は口縁端部拡張面に不明瞭な擬凹線を巡らす。体部外面はハケとナデ、同内面はナデの後粗いヘラミガキを加える。口径20.0cmを測る。

153は口径15.0cm、器高9.2cmを測る有孔鉢である。煤は付着しない。

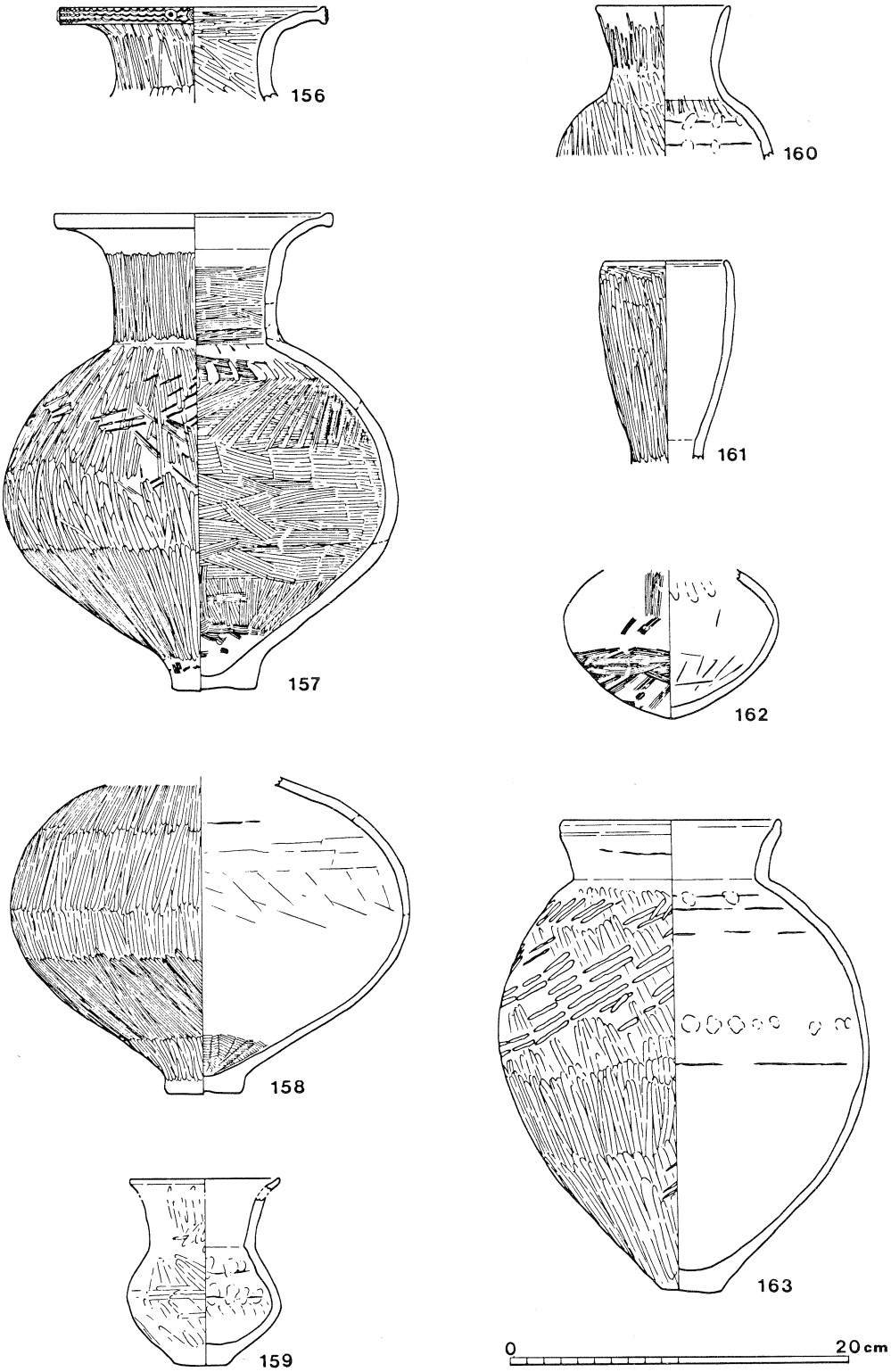
154は覆部の残存が悪いが、ほぼ全形を知り得る。鉢部は小さく薄い平底と、張りのある体部、屈曲して立ち上がる口縁部を持ち、体部中位に刻目凸帯が巡る。凸帯貼り付け前に、1条の沈線を巡らしている。覆部は鉢口縁端部に接続するタイプである。覆部外面はヘラミガキ、内面は不明である。体部は摩滅激しいが、外面上半にはハケが残る。同下半はナデ又はヘラミガキと思われる。内面は不明である。鉢口径18.5cm、器高推定19.5cmを測る。

155は不安定な小平底と短く屈曲する口縁部を持つ。外面はハケの後ナデ、内面はナデ調整する。体部外面下半に煤が付着する。口径9.9cm、器高9.8cm。

SD04　（第53図～第55図－156～180）

SD04出土土器には、広口壺B_1：156・157、広口壺B_2、二重口縁壺A_1、長頸壺C：160、細頸壺：161、壺体部：162、短頸直口壺：163、甕A：164～166、甕B_1：167～171、甕B_2：172～174、甕C、甕D_1：175、高坏B_3：176、高坏C：177、鉢A_1：178、鉢E_2：179、鉢F：180とミニチュア土器：181がある。

この内、156・162・181は溝上層から出土したものであり、図化しなかった器種については、小片の状態で確認したものである。



第53図　ＳＤ０４出土土器実測図（１）

156は口縁端部を上・下に拡張し、３条のクシ描波状文を施文し、竹管文付円形浮文を貼り付ける。円形浮文の間隔は不明である。口径15.8cmを測る。

157は強い張りを有する体部を持つもので、容量5.0ℓを測る。頚・体部外面をヘラミガキするが、体部上半に右上がりのタタキと右下がりのハケが残る。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はハケである。口径16.2cm、器高28.4cm。

158は前者と同様の形態の壺体部である。外面はヘラミガキ、内面はナデで仕上げ、底部内面にくもの巣状のハケが残る。体部最大径23.6cmを測る。

159は作りの雑な小型長頚壺である。外面はナデ後粗いヘラミガキを加える。体部内面には指頭圧痕と、ユビによるナデが明瞭に残る。口径9.0cm、器高推定11.2cmを測る。

160は斜め上方にゆるやかに開く、退化した口頚部を持つものである。口頚部外面は、ヨコナデの後粗くヘラミガキをする。口径7.8cmを測る。

161は中ぶくらみの口頚部を持つ。外面をヘラミガキし、内面にナデを加える。胎土に砂粒を含むが密で焼成も良好である。口径7.2cmを測る。

162の底部は丸底で、体部外面はハケ、内面はヨコナデと板小口によるナデを加える。体部上半の内面にユビナデ痕が残る。体部最大径12.9cmを測る。

163は不安定な平底と、短い口頚部を有する壺である。体部外面はヘラミガキするが上半は粗く右上がりのタタキが残る。体部内面は摩滅のため詳細不明だが、ナデを施すものと考えられる。口径12.8cm、器高28cm、容量5.42ℓ。

164のタタキは連続ラセン状である。頚部外面にハケ、体部内面はハケの後たてのナデを加える。口径14.4cm、器高20.6cm、容量2.28ℓを測る。

165は長い体部を持つもので、底部はあげ底となる。体部内面に粘土接合痕が明瞭に残る。口径16.8cm、器高推定28cm、容量推定4.33ℓを測る。

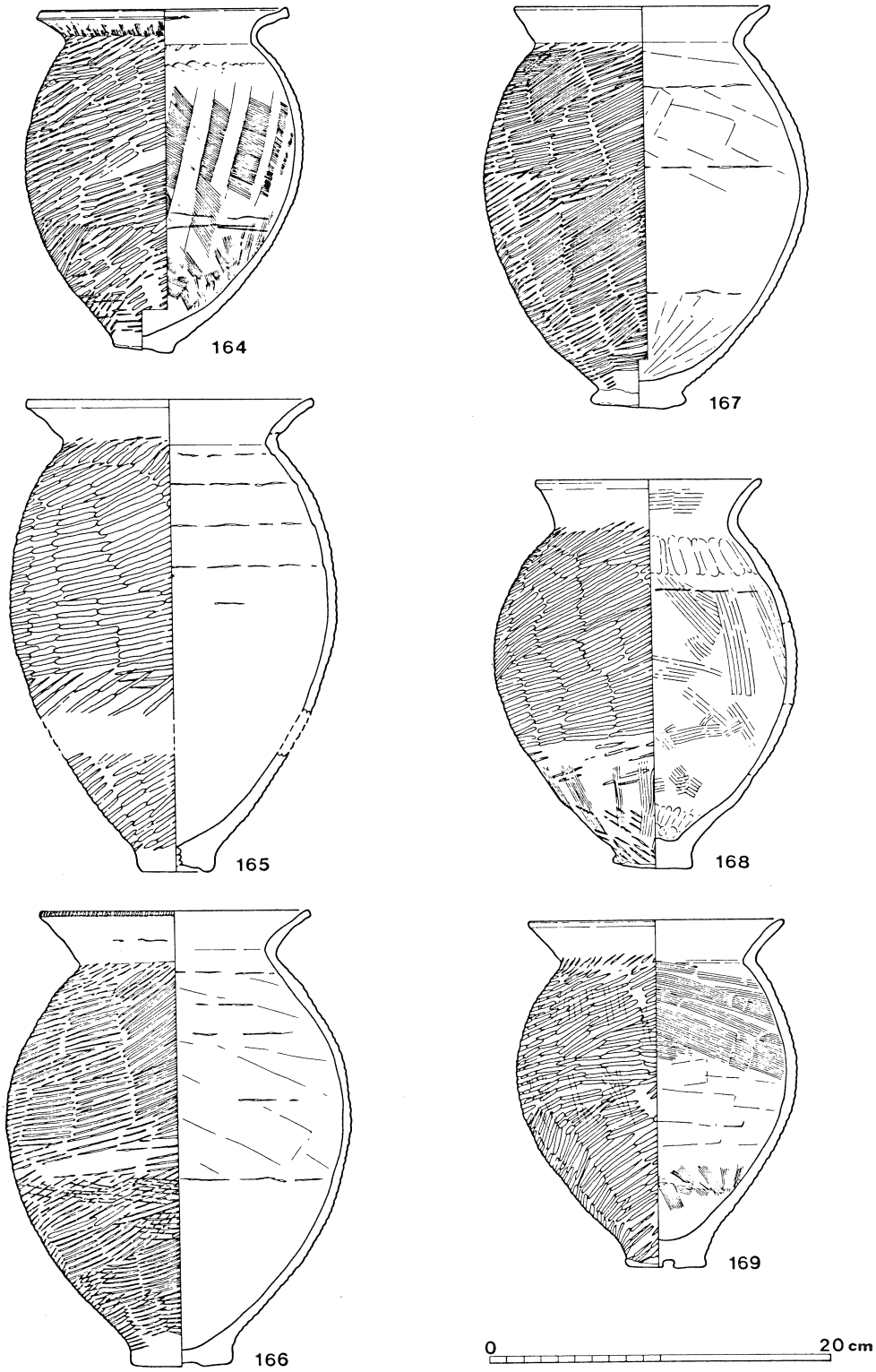
166は口縁端面に刻目を有するが、摩滅のため原体不明である。刻目を持つ甕は、本遺跡では極めて稀な存在である。胎土中に赤色酸化粒を含まない。口径15.6cm、器高27.0cm、容量4.55ℓを測る。

167は分厚い円板状の底部を持つ。体部に連続ラセンタタキを施す。体部の内面は板小口によるナデ、下半には小口痕が残る。口径15.0cm、器高23.9cm、容量3.51ℓを測る。

168は体部中位～上半に右上がりの、下半に右下がりのタタキを施し、接点付近にはハケとナデが加えられる。内面は粗いハケ調整。底部内面と、体部上半にユビナデ痕が残る。口径13.2cm、器高23.1cm、容量2.63ℓを測る。

169は口径14.8cm、器高20.8cm、容量2.2ℓを測る。体部外面はタタキの後クシに近い粗く深いハケを加える。体部外面下半にモミ圧痕がある。

170は外面を連続ラセンタタキ、内面をナデで仕上げる。口縁部外面に粘土



第54図　ＳＤ０４出土土器実測図（２）

接合痕が残る。木の葉底。口径14.2cm、器高18.6cm、容量2.02ℓを測る。

171は体部内外面に粘土接合痕が残る。底部裏面に木の葉圧痕がある。口径14.8cm、器高15.1cm、容量1.1ℓを測る小型品である。

172は体部下半でタタキの方向が異なる。タタキ変換点付近にナデを加え、タタキを消す。口縁部のタタキは中位に及びそれ以上に粘土を継ぎ足す。木の葉圧痕が底部裏面にある。口径16.8cm、器高26.2cm、容量4.53cmℓを測る。

173は前者と胎土、色調、成形、調整等においてよく似る。体部外面のタタキ方向の変換点にユビナデを加える。体部内面は板小口にるナデ、底部裏面に木の葉圧痕残る。口径16.2cm、器高23.8cm、容量3.21ℓを測る。

174の口縁部は強いヨコナデのため受口状となる。体部外面の一部と内面にハケを加える。木の葉底。口径15.4cm、器高23.2cm、容量2.86ℓを測る。

175は口径14.8cmを測る受口状口縁の甕である。口縁部内面はヨコナデ調整する。その他は摩滅のため詳細不明であるが、タタキはないと思われる(注43)。

176は口径21.0cmを測る。内面はヘラミガキ、口縁部外面はヨコナデする。

177は胎土に砂粒を多く含み、調整も雑である。脚部と坏部の成形を連続的に行い、坏底部に截頭円錐形の粘土を充塡する。口径16.2cm、器高11.7cm。

178は口径11.6cm、器高6.7cmを測る。外面は板小口によるナデ、内面はナデを加え、内面下半には板小口痕が残る。底部裏面に木の葉圧痕が残る。

179は口径22.8cmを測る。口縁部内外面をヨコナデし、体部外面に粗いヘラミガキを加える。同内面はハケの後、粗いヘラミガキを施している。

180は口径29.0cmを測る大型鉢である。「く」の字状口縁と張りの強い体部を持つ。外面は口縁部がヨコナデ、体部が2本／cmのタタキである。内面はヘラミガキする。

181は蓋又は鉢形のミニチュア土器である。口径5.0cm、器高2.8cmを測る。

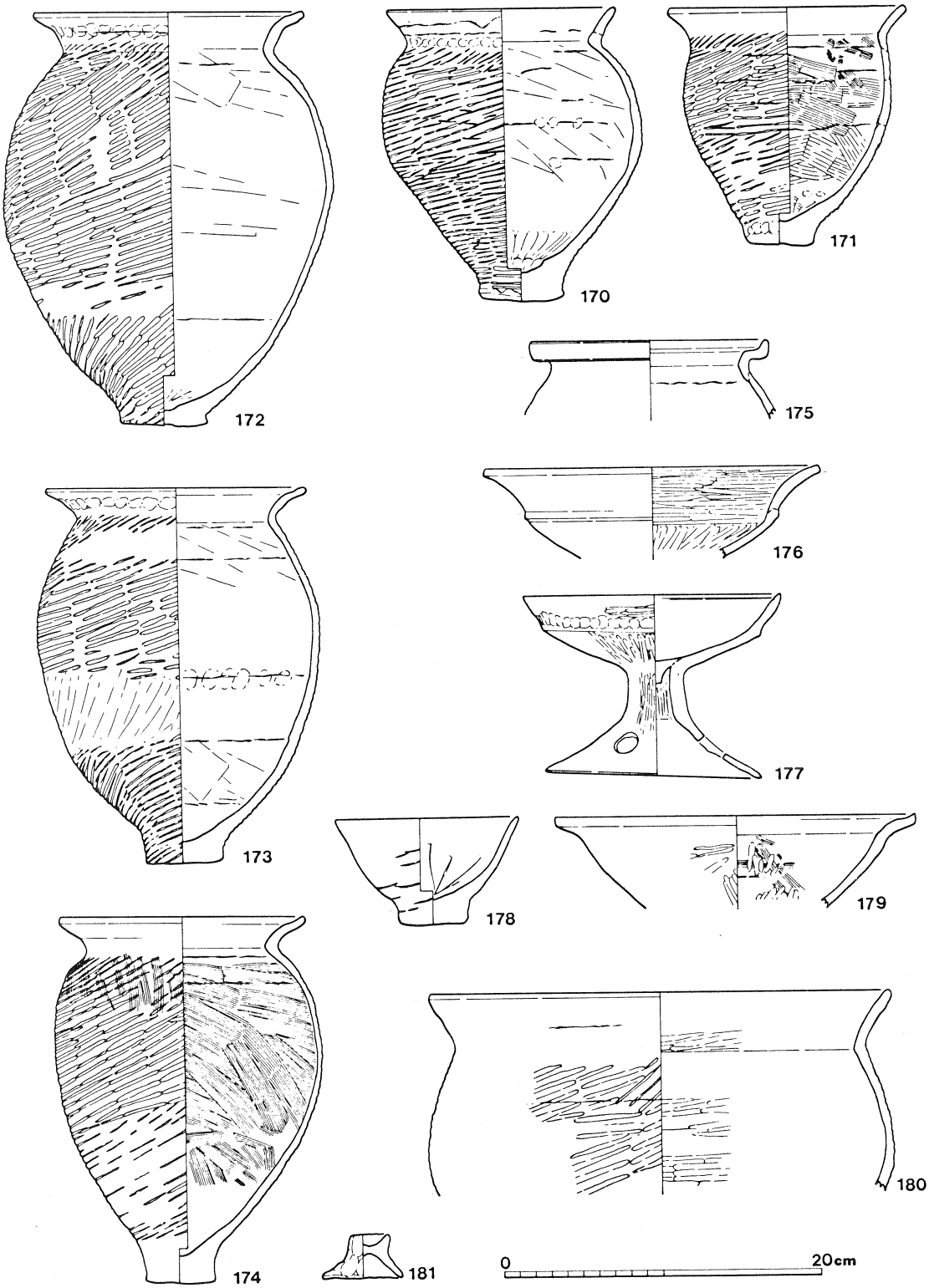
SB・SC区

（第56図～第60図－182～243・246・249）

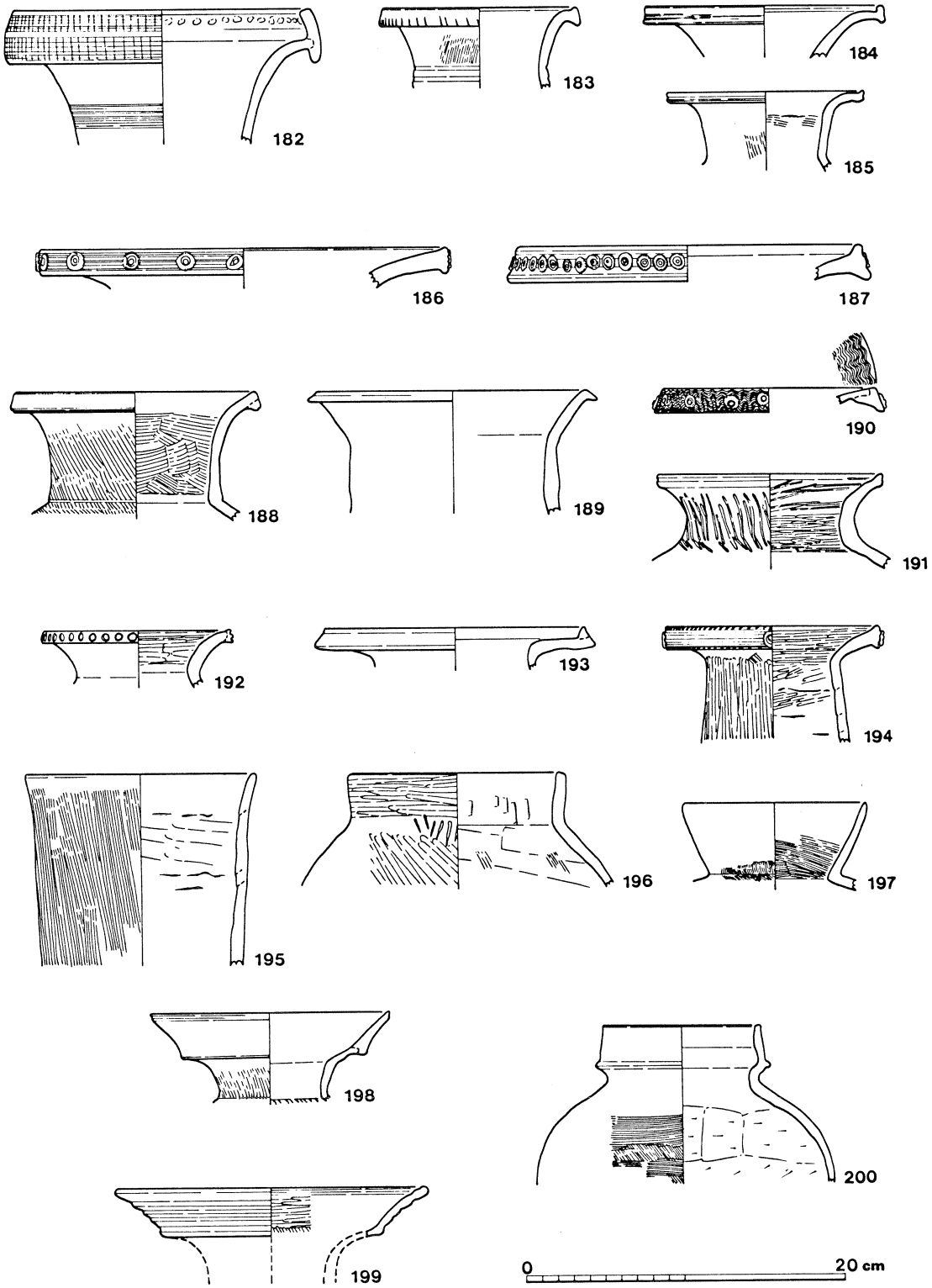
河道

SB・SC区の河道からは多量の土器類が出土したが、その大半は弥生時代後期に属する。後期以外のものには、弥生時代前期の甕：243、同中期の壺：182～185、同甕：202、同高坏：219や布留式併行期の壺：197・198・200、同甕：218、同小型丸底坩：240がある。

弥生時代後期の土器には、広口壺A：186～189、広口壺B_1：191、広口壺D：192、広口壺E：193、広口長頸壺：194、長頸壺A：195、短頸直口壺：196、二重口縁壺A_1：201、二重口縁壺A_2：199、甕A：205・206、甕B_1：207、甕D_1：208・209、甕D_2：203・204・216、甕D_3：210、甕E：211～213、甕F：214、甕G：217、甕H：215、高坏A：220、高坏B_3：221・222、高坏E_2：223、高坏F：224、器台A_1：227、器台A_2：228・229、鉢A_1：230、鉢C



第55図　ＳＤ０４出土土器実測図（３）



第56図　ＳＢ・ＳＣ区河道内出土土器実測図（１）

：231、鉢D：232、鉢E_1：223～236、鉢G：237、鉢F：238、小型壺：239と土錘：241・242がある。

182は河内地域の形態、文様を持つが、胎土に角閃石、雲母共に含まず、色調も乳白色を呈する。内外面摩滅し、調整不明である。口径19.0cmを測る。

183は口縁端部にヘラによる刻目を持ち、頸部外面に2条＋αの凹線を施文する。頸部外面にたてハケが残る。口径12.2cmを測る。

184は口径14.8cm。185は口径12.2cmを測り口縁端面に1条の凹線が巡る。

186は生駒西麓産のもので、口縁端面に4条の擬凹線と竹管文付円形浮文を貼りつける。187と共に器台の可能性もある。口径25.4cmを測る。

187は口縁端部拡張面に2条の凹線と竹管文付円形浮文を付す。口径21.2cm。

188は口径15.2cmを測るもので、頸部外面と、口縁端面下端に1条の沈線を巡らす。口縁部内外面はヨコナデ、頸部内外面はハケを加える。

189は口径17.0cmを測る。内外面は摩滅のため調整不明である。

190は口縁端面に12条のクシ描波状文と竹管文付円形浮文を付する。内面にも14条＋αのクシ描波状文を施文する。庄内期に下ると思われる。口径13.2cm。

191の内外面は粗いヘラミガキが施される。口径14.0cmを測る。

192は口縁端部を肥厚させ、外面に竹管文を巡らしている。口径11.9cm。

193は口径16.4cmを測るもので、壺棺：55と同形態と考えられる。

194は口縁端部を上・下に肥厚し、4条の擬凹線と4ヶ所に各1個の竹管文付円形浮文を付し、端面の上・下にヘラによる刻目を加える。口径13.2cm。

195は外面をハケのみで調整し、内面をヨコナデとナデで仕上げる。生駒西麓産の胎土を持つ。口径14.4cmを測る。

196の外面はヘラミガキするが、体部外面上半にタタキが残る。口径12.8cm。

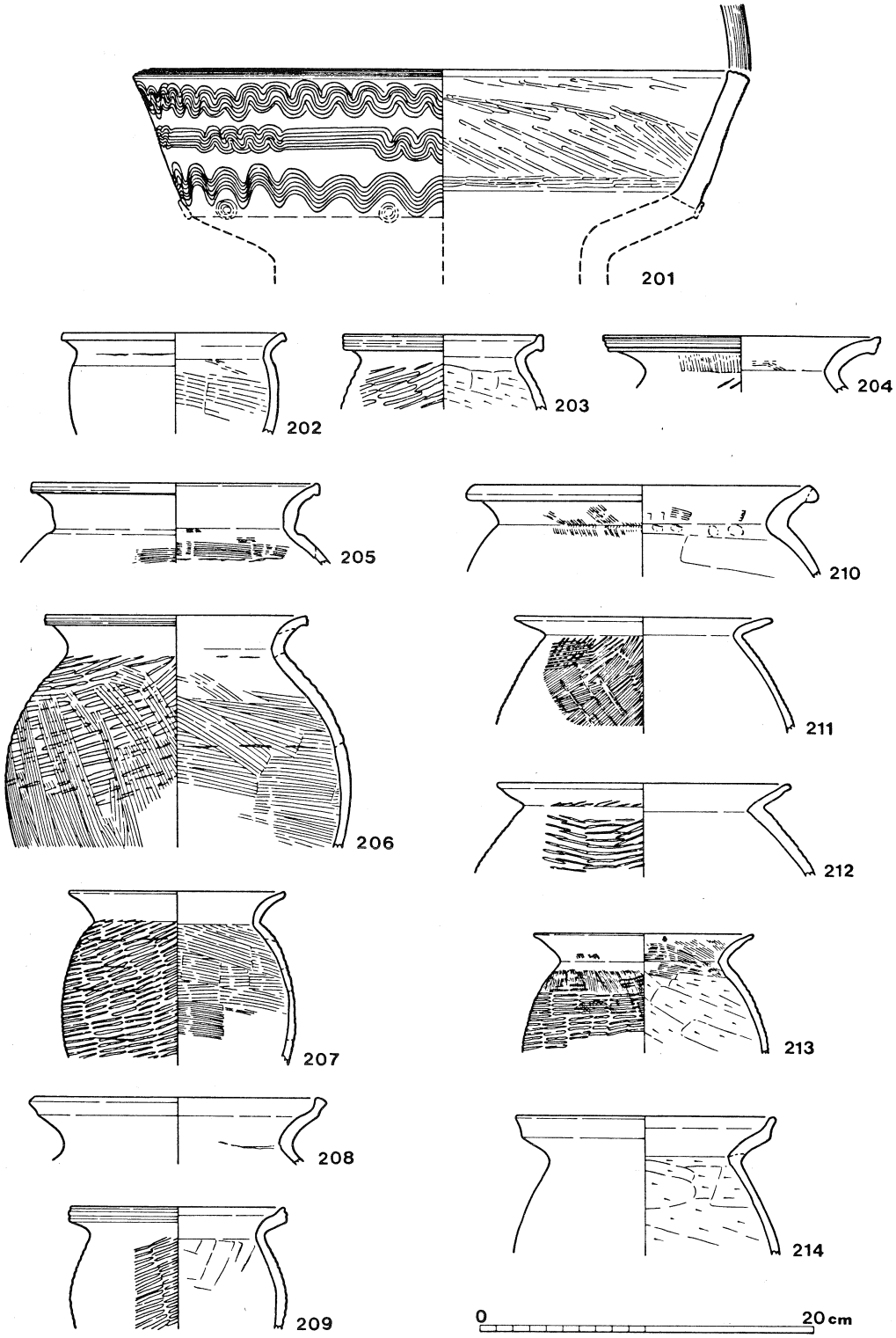
197は内外面にヨコナデを施すが、下半にハケが残る。口径11.2cmを測る。

198は口縁部内外面をヨコナデし、頸部外面はハケが残る。口径15.2cm。

199の口縁部外面には4条の凹線が巡る。内面上半にも浅い凹線が2条施文される。内面にはヘラミガキを加える。口径19.4cmを測る(注44)。

200は山陰系の二重口縁壺で、体部外面はハケ、同内面は右まわりのヘラケズリを加える。これ以外はヨコナデする。淡黄灰白色を呈する。外面に煤の付着が見られる。布留式併行期と考えられる。口径9.8cmを測る。

201は口径34.6cmを測る大型のもので、粘土接合部で剝離している。外面には3段のクシ描波状文を施文する。上段はクシをコンパス様に用いて描く波状文（櫛描波状文II種a）(注45)、中段は同巧の波状文と直線文の組み合わせ。下段は通常の波状文である。残部下端に竹管文付円形浮文を付す。口縁端面に4条の擬凹線を巡らす。内面はヘラミガキを施している。



第57図　ＳＢ・ＳＣ区河道内出土土器実測図（２）

202の口縁端部は下方に若干肥厚する。口径13.2cmを測る。

203は口縁端部上・下に拡張し、板小口状のものでヨコナデする。体部外面はタタキ、同内面は左まわりのヘラケズリである。口径11.8cmを測る。

204は口縁端面に3条の擬凹線を巡らす。体部にタタキが残る。口径16.4cm。

205の体部内外面はハケが残る。外面はタタキが見られない。口径17.0cm。

206の口縁端面には不明瞭な擬凹線がある。体部外面はタタキの後ハケ、内面はハケで仕上げる。口径15.8cmを測る。

207は体部外面に4本／cmのタタキを施すが、外面には幅1.5cm前後の粘土紐痕が残る。体部内面はハケを加える。口径12.8cmを測る。

208はSK01出土壺：42と似た口縁部を持つ。外面に煤付着。口径17.0cm。

209は口径12.6cmを測る小型甕で、口縁端部を肥厚させ、2条の凹線を施文する。体部内面はケズリと思われるが、摩滅して断定できない。

210は口縁端部下面に粘土紐を付加するものである。内外面の摩滅が激しいが頸部外面にハケが残る。体部内面は強いナデと思われる。口径20.2cmを測る。

211の体部外面は右上がりのタタキで下半に板小口による右下がりの圧痕が残る。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ調整する。口径15.2cmを測る。

212は口縁部外面にタタキが残る。体部内面は右下がりのナデ。口径17.4cm。

213の体部外面はタタキの後上半部にハケを加える。同内面は左回りにヘラケズリする。口縁部外面はヨコナデ、内面はハケである。口径13.2cmを測る。

214は口縁部内外面はヨコナデし、体部外面をナデ、同内面に左回りのヘラケズリを加える。複合口縁部を持つ所謂丹後系の甕である。口径15.4cmを測る。

215は上半と下半が接合せず、図上で復元した。口縁端面に3条の擬凹線を巡らし、体部外面は底部裏面までハケを加える。体部内面は上半はユビナデ、下半はヘラケズリする。胎土に長石、石英粒を含むが精良で、焼成も良好である。結晶片岩の砂粒は肉眼では観察できない。口径13.6cm、器高20.8cmを測る(注46)。

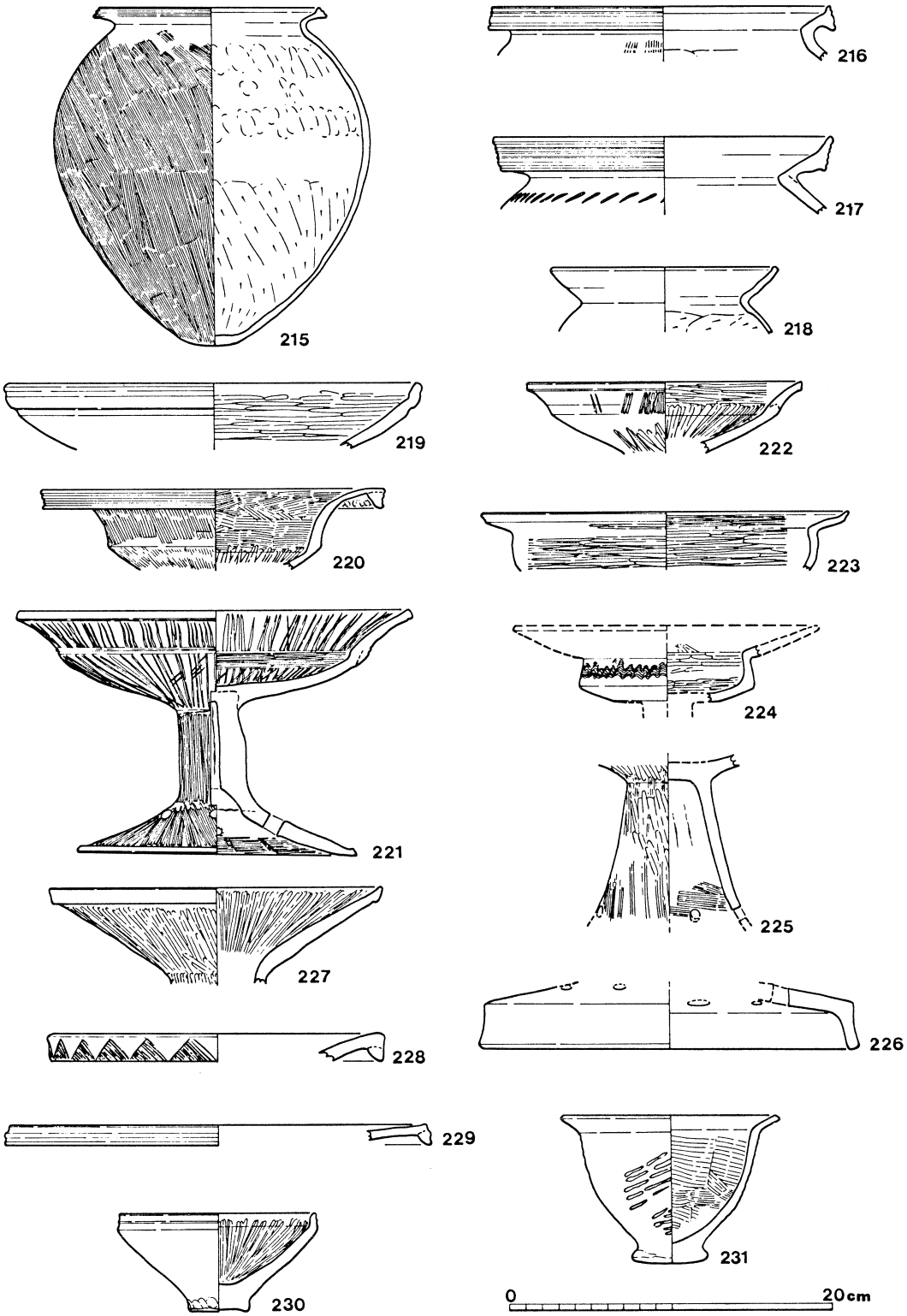
216は口縁端部拡張面に3条の擬凹線を持つ。体部外面はハケ、同内面はケズリと思われるが摩滅のため確定できない。口径21.0cmを測る。

217は口縁端部を主に上方に拡張し、外面に5条の擬凹線を巡らす。肩部外面にハケ原体による列点文を施文する。体部内面はナデである。口径20.8cm。

218は布留式甕で、口縁端内面を若干肥厚させる。口径13.8cmを測る。

219は高坏坏部で内面はヘラミガキ、外面も同様と思われるが摩滅により、断定できない。外面に浅い凹線を2条施文する。口径25.2cmを測る。

220は口縁端部下面に断面三角形の粘土紐を付加し、外面に3条の擬凹線を巡らす。体部内面のヘラミガキ以外はハケのみである。口径20.2cmを測る。



第58図　ＳＢ・ＳＣ区河道内出土土器実測図（３）

221は坏口縁部が大きく開く高坏で、坏体部と口縁部の境に2条の沈線が巡る。坏部はヨコナデ後、暗文に近いヘラミガキを加えるが体部外面に右上がりのタタキが残る。脚柱部は中空だが器壁は厚く、内面にシボリ目が残る。脚裾部の円孔は4ヶ所不等間隔に穿たれる。口径24.2cm、器高15.1cmを測る。

222は口径17.0cmを測る小型品で、内外面にヘラミガキを施している。

223は高坏としたが、鉢の可能性もある。内外面はヘラミガキ。口径22.6cm。

224は坏体部外面に13条＋αのクシ描波状文を施文する。体部最大径10.8cm。

225は太い中空の高坏脚部で、下端部に不等間隔の円孔を4ヶ所穿っている。

226は大きく開く脚裾部の先端が下方に屈曲するもので、脚裾部に推定9ヶ所の円孔を穿つ。内外面は摩滅のため調整不明。径23.0cmを測る。

227は内外面をヘラミガキする。口縁部は摩滅のため調整不明。口径20.4cm。

228は口縁端面にヘラ描三角文を施文し、内部を斜線で埋める。口径20.0cm。

229は口径25.6cmを測る。口縁端面に2条の凹線が巡る。

230は小型鉢で、屈曲して立ち上がる口縁部を持つ。口縁部内面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキだが、外面は不明である。口径12.0cm、器高6.1cm。

231は不安定な平底を持つ小型鉢で、外面に右上がりのタタキが残る。内面はハケで仕上げる。底部裏面にモミ圧痕がある。口径13.2cm、器高9.1cm。

232は外面を右上がりのナデ、内面をハケで仕上げ、一部ヘラミガキを加える。口縁端面に1条の沈線が巡る。口径18.8cmを測る。

233は口径26.2cmを測り、口縁部外面以外はヘラミガキを加えている。

234は口縁部外面をヨコナデし、内面全体にヘラミガキする。体部外面は草の茎を束ねたようなものでナデ調整する。口径20.2cmを測る。

235は口縁部外面にタタキを残す。体部外面はユビナデである。口径23.0cm。

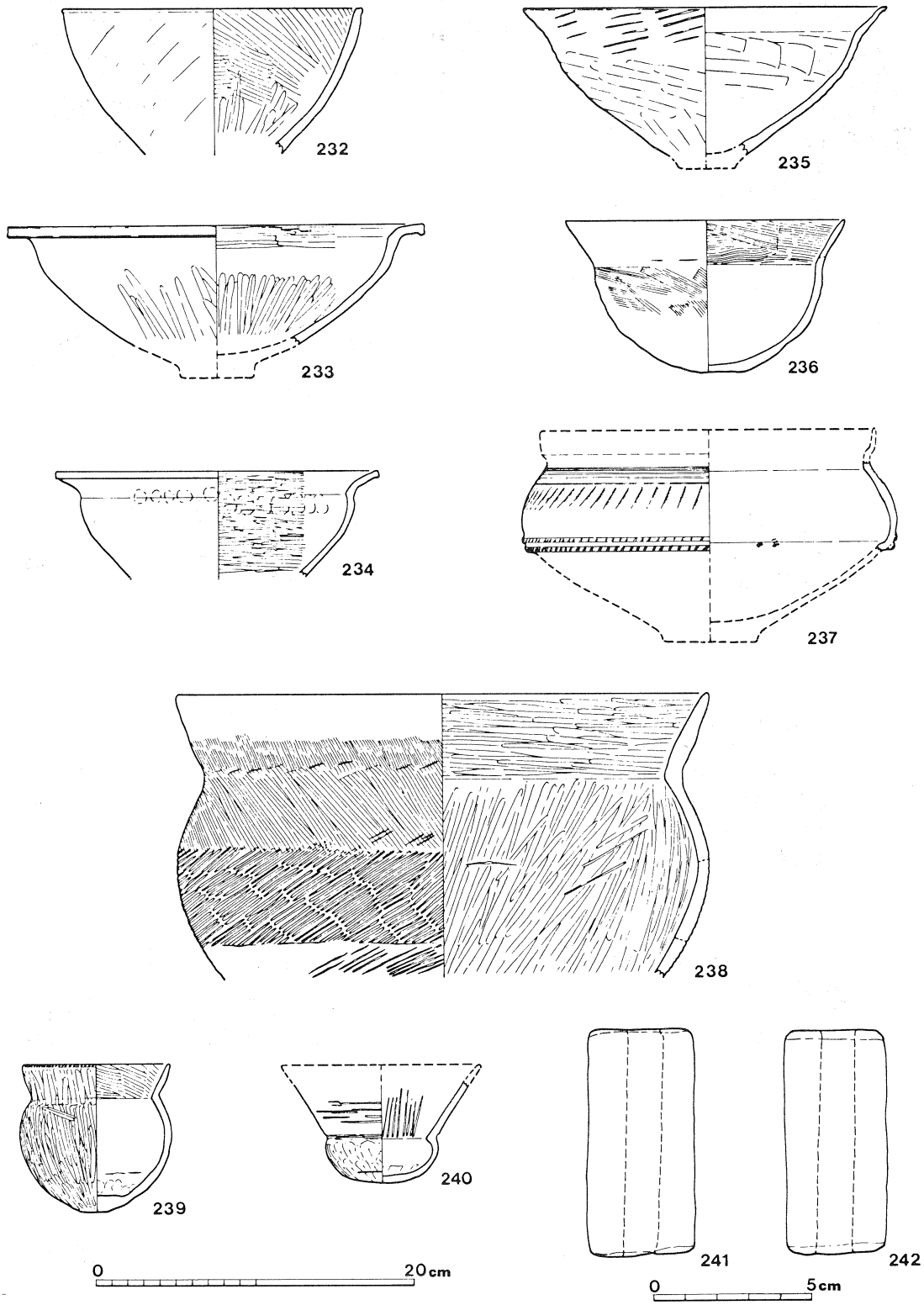
236は器面の凹凸が激しく、ハケ調整もよく残る。口径17.6cm、器高9.6cm。

237は体部上半に6条のクシ描直線文、クシ列点文を施文し、体部中位にクシ原体による刻目を持つ貼り付け凸帯を2条巡らす。内面はナデで、わずかにハケが残る。胎土に角閃石、雲母を含み、色調も暗茶灰色を呈す。手焙形土器になることも考えられる。小片のため直径等は不確実である。

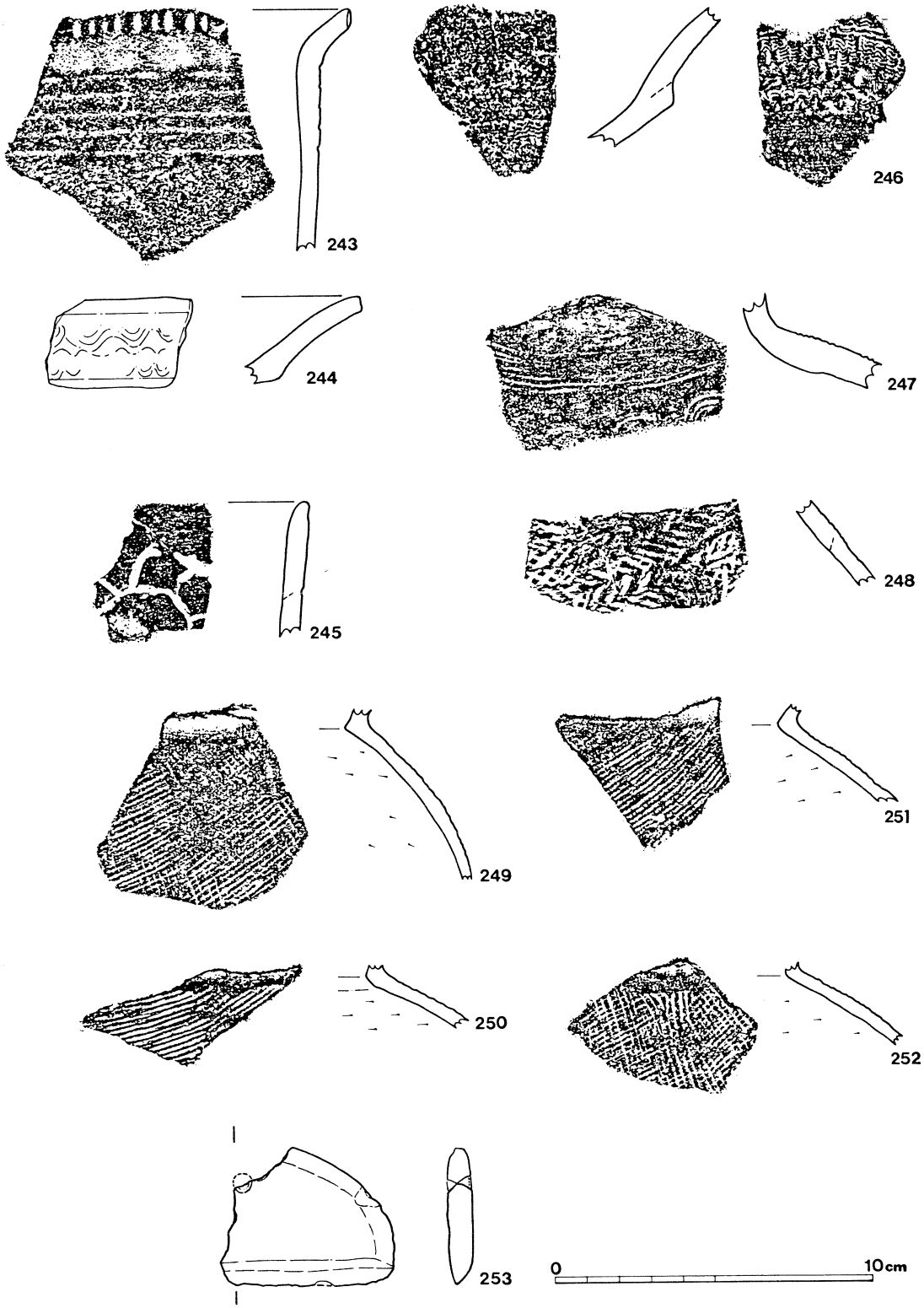
238は「く」の字状口縁で強く張る体部を持つ。体部外面は右上がりのタタキの後、上半をハケで消し、内面全体にヘラミガキを加える。口径33.4cmを測る。

239は口径9.0cm、器高9.4cmを測る。球形の体部と不安定な小平底を持つ。口縁端面にヘラによる刻目を持つ。外面はヘラミガキ、口縁部内面はハケ、体部内面はナデで、底部内面に指頭圧痕が残る。

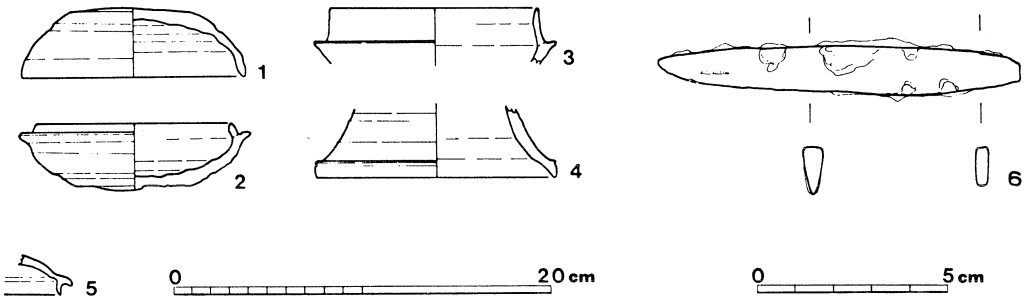
240は口径が体部最大径を凌駕する形態を持つ。口縁部外面はヨコナデの後、粗いヘラミガキ、内面はヨコナデの後、粗く暗文を加える。体部外面はヘラケ



第59図　ＳＢ・ＳＣ区河道内出土土器実測図（４）



第60図　弥生土器・石器実測図



第61図　N・S地区出土須恵器・鉄器実測図

ズリの後ナデ、内面はナデで仕上げる。

241・242は素焼の管状土錘である。241は径3.4cm、長さ7.2cm、重さ92g、242は径3.2cm、長さ7.0cm、重さ82.6gを測る。時期は特定できないが。布留式期を下ることは考えられない。

243は外面に5条のヘラ描沈線が巡る。口縁端面に刻目を持ち、頸部外面に指頭圧痕が残る。調整は摩滅のため詳細不明である。

246は二重口縁壺で、内面全体と外面上半部をクシ描波状文で飾る。

249は生駒西麓産の庄内甕である。外面は6本／cmタタキ、内面は右方向のヘラケズリを加える。頸部外面はヨコナデする。

第3節　古墳時代後期

当期の遺物は量的に少なく、N地区の土坑、包含層やS地区の自然流路中で出土したに過ぎない。

SK10　（第61図－5・6）

SK10からは弥生土器の小片と共に、須恵器坏蓋の小片：5が出土した。胎土・焼成共に良好で、淡灰白色を呈す。

6は埋土中位から出土した鉄製刀子である。全長9.6cm、刃部最大幅1.2cmを測る。目釘孔、木質部等は確認できない。

N地区包含層　（第61図－1・2）

1・2はN地区第1遺構面上に堆積した暗灰色砂質土から出土した。1は、口径11.8cm、器高3.6cmを測る。天井部外面はヘラ切り。内面にはナデを加える。2は口径10.4cm、器高3.5cmを測る。底部外面はヘラ切り。内面にナデを加える。焼成は1は良好だが2はあまい。色調は両者共淡灰白色を呈する。

S地区河道内　（第61図－３・４）

SA区のSK02北側には、褐色粗砂が堆積する極めて小さな流路があった。３・４は堆積土中から出土した。３は立ち上がりは高いが口縁端部に面を作らず、丸くおさめている。口径10.8cmを測る。４は高坏脚部で端部径12.6cmを測る。約50％残存するが、スカシ孔は見られない。

第４節　平安時代

ST02　（第62図－１～９）

ST02出土遺物は、木棺埋納後に供献されたもの：１・２・５と木棺埋納の途中で収められたもの：３・４・６～９に分類される。

１・２はほぼ同形同大の須恵器埦である。底部と体部の境にわずかに段を作る。底部裏面に回転糸切り痕を有す。ロクロ回転方向はいずれも右まわりである。口縁端部外面は淡黒灰色～黒灰色を呈す。胎土に砂粒を多く含み、焼成もややあまい。１は口径16.2cm、器高5.2cm、２は口径15.4cm、器高4.9cm。

３は土師器大皿で、口径14.8cm、器高2.6cmを測る。口縁部外面に上・下２段のヨコナデを加える。口縁端部は丸くおさめる。

４・５は土師器小皿である。４は３同様、口縁部外面に２段のヨコナデを加える。体部内面はヨコナデ、外面はナデる。口径9.6cm、器高1.6cmを測る。５は口縁部外面と内面全体にヨコナデを加えるが、他は摩滅により詳細不明である。口縁端部は４・５共に丸くおさめる。口径9.6cm、器高1.6cmを測る。

土師器小皿は計10枚であったが、ほぼ同形同大で、調整も特に変化はない。

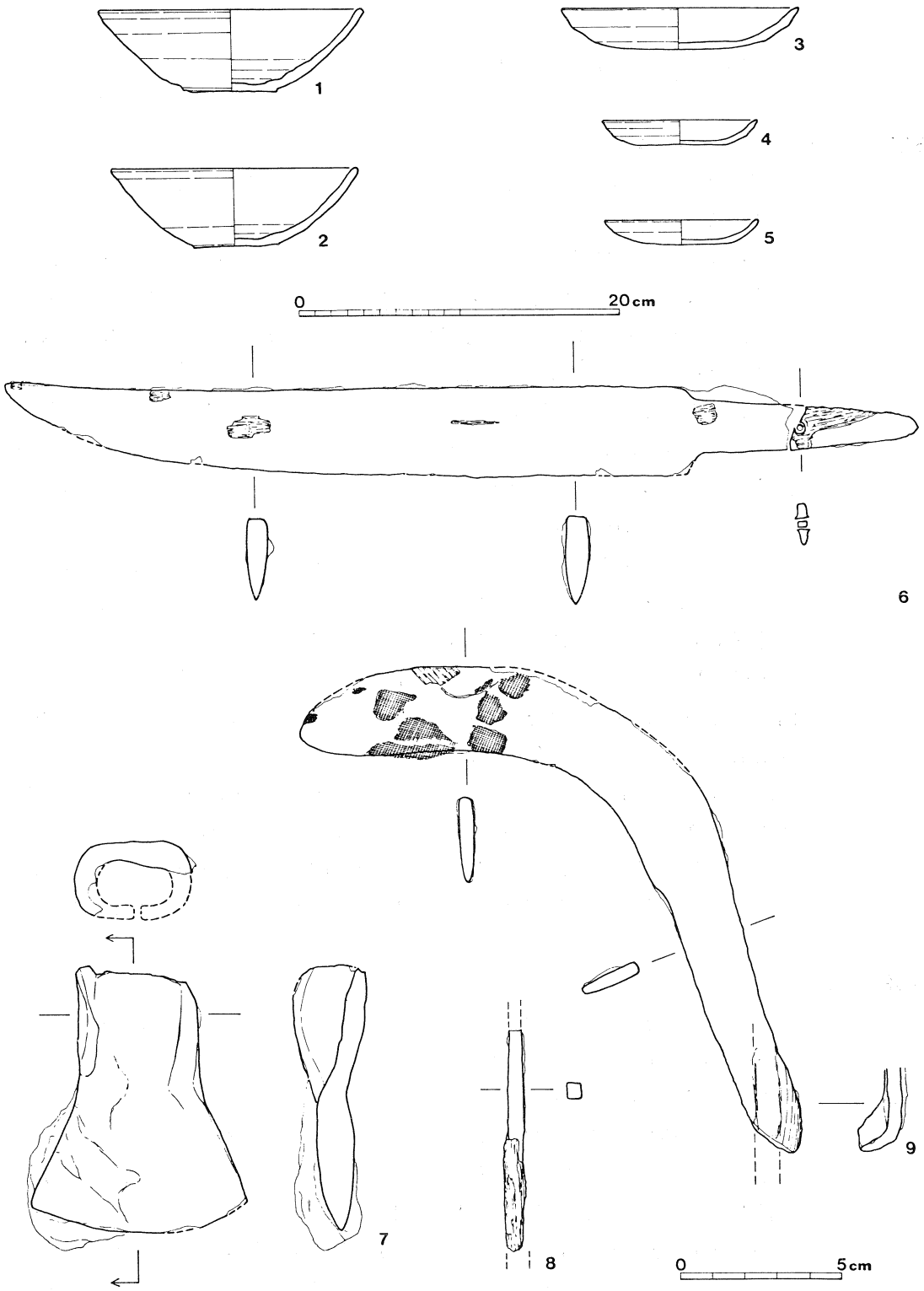
６は鉄刀である。茎中央部に欠損箇所がある。推定全長28.5cm、刃部最大幅2.8cmを測る。刃部及び茎部の一部に木質部が残存する。目釘孔は１ヶ所で、目釘残片がある。

７は鉄鎌で、全長20.2cmを測る。刃部に木質部と布が付着する。布は経糸24本／cm、緯糸20本／cmである。柄込部の末端は着柄のために直角に折り曲げられている。折り曲げ部分付近に幅１cm前後の木質部が残るが、柄は本来３cm前後の幅を有するものと思われる。

８は鉄斧頭で、袋部端の一部を欠いている。現長8.4cm、刃部幅6.8cmを測り、刃部端はゆるやかに彎曲する平面形を持つ。

９は鉄錐と考えられるもので、下半に木質部が残る。断面は一辺５～６mmの方形を呈すものである。先端は欠失している。

以上の時期は、東播系の須恵器埦及び土師器から12世紀前半と考えられる(注48)。



第62図　ＳＴ０２出土須恵器・土師器・鉄器実測図

第５節　鎌倉～室町時代

SE02　（第63図－１～９、第64図－63）

SE03からは須恵器片、土師器小皿、瓦器埦などが出土したが、いずれも小片である。

須恵器埦１は口縁部片で、外面に比較的強いナデが施される。口径15.2cmを測る。２は内彎気味の体部を持ち、口縁部外面にやや強いナデが加えられる。口径15.0cmを測る。３・４は須恵器底部である。底部から屈曲して体部へ続く。底径はそれぞれ5.4cm、5.8cmである。

土師器小皿５は、口径6.4cm、器高1.2cmを測る。厚い底部から短く口縁部が内彎気味に取り付く。内外面共、ナデで仕上げている。６はやや内彎する口縁部分である。口径は10.2cmを測る。７は厚い底部から屈折して立ち上がる体部を持つ。底径8.0cmである。

８・９は瓦器埦である。８は、口縁部外面に強いナデによる凹部が巡る。ヘラミガキは内外面とも明瞭でなく、粗略化が著しい。口径は15.6cmを測る。９は体部下半が残存するが、高台は完全に剝離していた。断面三角形を呈するものと思われる。外面のヘラミガキは器面の凸部に限られ、最終段階に近い。内面はやや粗いがヘラミガキがみられ、見込み部は格子目状に施している。SC区出土瓦器の中では比較的丁寧な作りをしている。

63は水溜に転用された曲物である。直径約45cm、高さ約27cmを測る。取り上げ後に崩壊してしまったが、周囲にまわしを３段用い、側板とまわしの間にへぎ板を４枚当て固定している。側板内面に縦方向のケビキ線を施す。下端部には木釘穴が残る。尚、SE01の水溜用曲物はこれと同構造で大きさも大差ないものである。

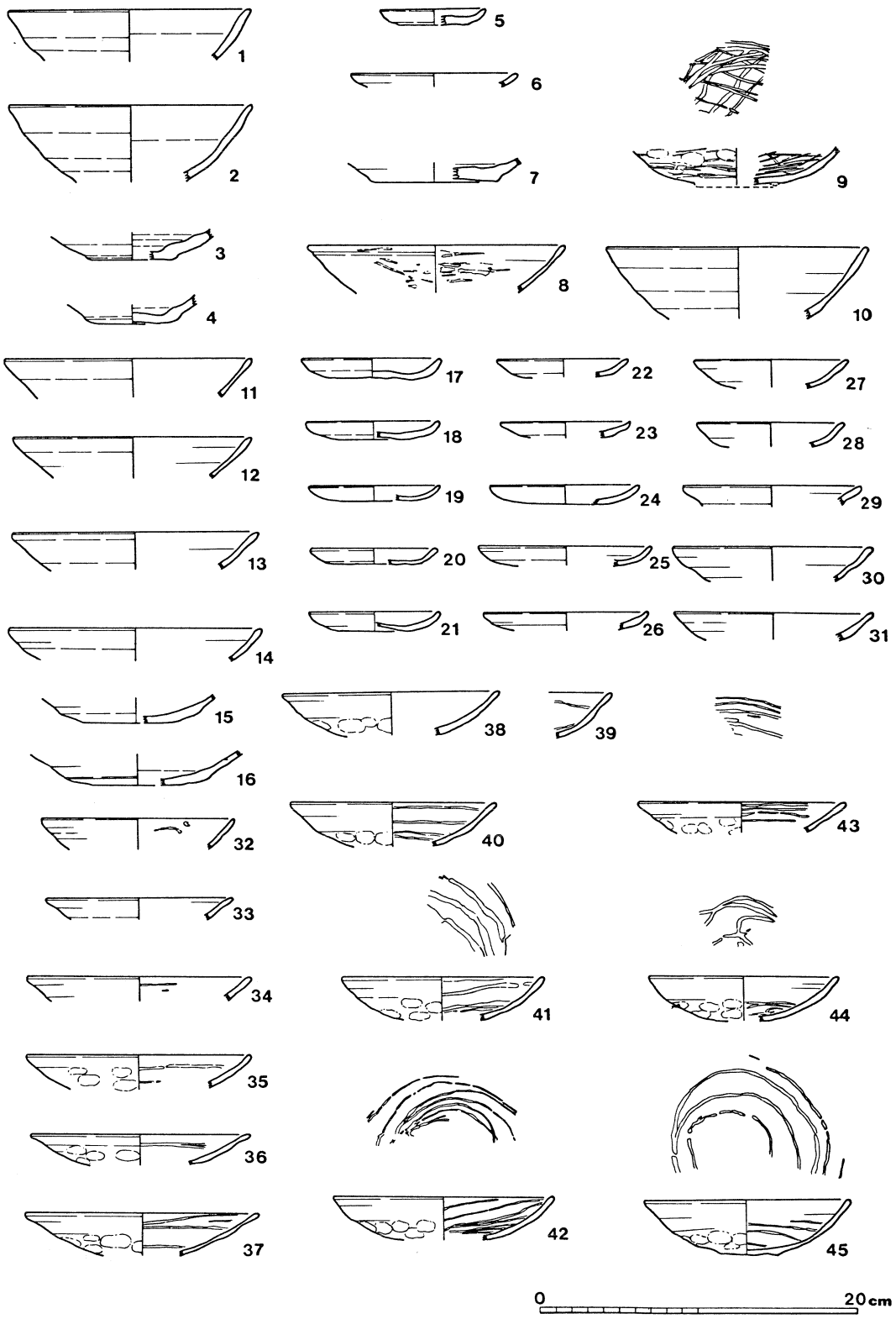
SE03　（第63図－10）

須恵器埦と同甕が出土している。須恵器埦10は内彎気味の口縁部を持つもので、口径16.4cmを測る。甕は体部の小片で図化に至らなかった。

SE04　（第63図－11～45、第64図－46～49･64）

SC区の遺構中、遺物が最も多く出土している。井戸廃棄時に投棄されたものと思われる。須恵器埦、土師器皿・堝、瓦器埦、木簡などがある。この内、須恵器埦12、瓦器埦45と呪符木簡49が第11層（第29図）から出土した

須恵器埦11は口径15.1cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部は肥厚する。12は口径14.7cmを測る。前者と同様、直線的に開くもので、端部が肥厚する。13は、口縁部外面やや下がった部位にやや強いナデが施される。口径15.2cmを



第63図　ＳＥ０２～０４出土土器実測図

測る。14は内彎気味の口縁部で、口径15.6cmを測る。15・16は須恵器埦底部で、底径はそれぞれ5.4cmと5.8cmを測る。

土師器小皿17は平底から内彎しながら口縁部につづく。口径8.5cm、器高1.4cmを測る。18は上げ底気味の底部から内彎する口縁部がつく。口径8.3cm、器高1.2cmを測る。19は底部から内彎しつつ短く立ち上がる口縁部をもち、口径8.2cm、器高1.1cmを測る。20は、底部からやや器壁が厚くなる口縁部を有す。口縁端部に面を持つ。口径7.6cm、器高1.2cmを測る。21は上げ底の底部から口縁部が内彎しながらつづく。口径8.0cm、器高1.3cmを測る。22は直線気味に開く口縁部である。口径は8.0cmを測る。23は口縁部が底部から浅く直線的に開く。口縁部内面はごく弱い段を持つ。口径は8.4cmである。24は浅く内彎気味に開く口縁部である。口径9.2cm、器高1.3cmを測る。25は内彎気味の短い口縁部で、口径10.6cmを測る。26の口縁端部内面には、ナデによる弱い段がみられる。口径10.2cmを測る。27は直線的に開く口縁部で、やや深い器形を呈する。口径は9.6cmである。28は内彎気味に開く口縁部で、端部はナデにより若干外反する。口径9.2cmを測る。29は下半部に屈曲がみられる。口径11.0cmを測る。30は、一度屈曲して外方に伸びる口縁部で、端部はやや丸みを帯びる。外面下半は指頭圧で整形され、上半はナデにより仕上げられている。口径12.4cmを測る。31は直線的に開く口縁部で、端部はやや尖り気味である。口径12.2cmを測る。46は土師器堝である。屈曲して立ち上がる口縁部の外面は、強いナデにより整形され、内面はハケで調整される。口径は29.8cmである。47は土師器堝である。偏平な球形の体部を持ち、くの字状に強く外反する口縁部を有する。口縁部外面はナデにより仕上げ、体部は指頭圧の後、下半についてはハケにより調整されている。内面は、外面と同一原体により横方向のハケで調整している。外面には煤化痕が著しい。口径は19.4cmを測る。

瓦器埦32は直線的に開く口縁部を持つ。内面のヘラミガキは殆んど認められない。口径11.8cmを測る。33はナデによりやや外彎する口縁部である。小片のためヘラミガキの有無は不明である。口径11.4cmを測る。34は直線的に開く口縁部で、内面には粗略化が進んだヘラミガキを施す。口径13.6cmを測る。35も直線的に開く口縁部で、外面上端はナデにより、下半は指頭圧により整形している。内面は幅2.5mmのヘラミガキが施されている。口径は13.8cmを測る。36は口縁部が浅く広がり、外面上端は強いナデが施される。内面には幅2mmのヘラミガキがわずかにみられる。口径は13.6cmである。37は直線的に浅く開く口縁部で、器壁は比較的薄い。ヘラミガキの幅は1.7～4mmで、口径は14.3cmを測る。38は内彎気味の口縁部を持ち、外面上半はナデ、下半は指頭圧により仕上げられている。内面にヘラミガキはみられなかった。口径13.5cmを測る。39

は口縁部片である。外面は強いナデにより外反する形状をなす。ヘラミガキは非常に粗く、２条しか観察できなかった。40は内彎気味に開く口縁部を持つ。外面は上半はナデ、下半は指頭圧により調整されている。内面のヘラミガキは幅2.5～３㎜であり、４条観察できた。口径12.8cmを測る。41は口径12.0cmと小さく、高台が付かないタイプの埦と思われる。外面は上半がナデ、下半には指頭圧痕がみられ、内面のヘラミガキは太く粗い。42は内彎気味に開き、内面には幅１～1.5㎜のヘラミガキが圏線状に施される。口径は13.6cmを測る。43は直線的に浅く広がる口縁部で、端部は肥厚する。外面は指頭圧痕を明瞭に残し、口縁部はナデにより整形する。外面にヘラミガキはなく、炭素の吸着は悪い。口径12.6cmを測る。44は内彎する口縁部を持つ。底部には形骸化した高台がわずかに認められる。内面の一部にヘラミガキが認められる。口径11.8cm、器高2.9cmを測る。45の外面下半は指頭圧が残り、上半はナデ、特に口縁部は強いナデにより整形されている。断面三角形を呈する高台は、粘土紐を両側から撫で押したようなつくりで、底部の方が若干突出するため高台としての機能は果たさない。外面のヘラミガキはなく、内面のそれは見込み部から側面にかけて見られる。また、口縁部内面の一部に炭素未吸着がある。口径12.9cm、器高3.5cmを測る。48は瓦器羽釜である。口縁部の外側面に２条の幅広の凹線を施し、丁寧なナデ調整を加える。口縁端部には面を持つ。鍔は狭く、体部以下は薄く仕上げている。内面はハケ調整する。口径20.8cm、鍔部最大径26.5cmを測る。

49は呪符木簡である。現存長約23cm、幅約３cm、厚さ２㎜を測り、上端の両側に切り込みを入れる。墨書は表裏両面にみられる。表面の墨書は上半部のみ残存し、「咄呋噁□—□□—□>□<□□□□」と判読できた。裏面のものは残存状態が悪く、判読できなかった。

SK14　（第64図－50）

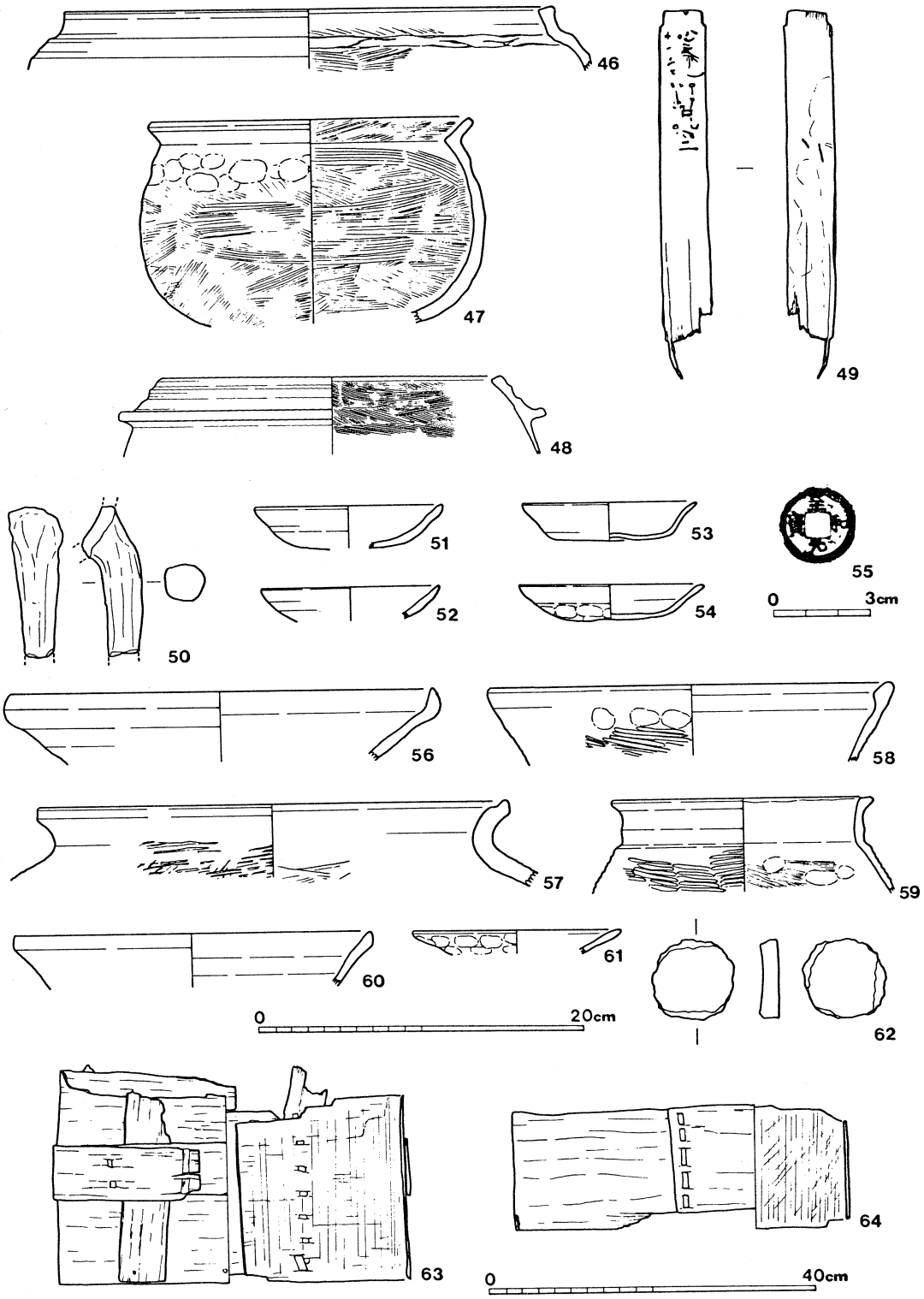
SK14からは須恵器、土師器、瓦器が出土しているが、いずれも小破片である。50は土師器足釜の脚部で、先端部が欠損している。直径約2.4cmを測る。

SK15　（第64図－51・52）

51・52共に土師器小皿である。51は口径11.3cmを測り、口縁部は強いナデによりやや外反する。52は直線的に開く口縁部で、端部はやや尖り気味である。口径10.8cmを測る。両者とも器高は2.5～3.0cmと推定される。

SX03　（第64図－53～55）

須恵器、土師器、瓦器埦、陶器、瓦、銭貨などが出土している。53は土師器小皿で、口縁部は底部から外反しながら取り付く。口径10.7cm、器高2.4cmを測る。54も土師器小皿である。底部からゆるく外方にのびる口縁部を持つ。口



第64図　ＳＥ０２・０４・０５、ＳＫ14・15、ＳＸ０３・０４出土遺物実測図

径11.2cm、器高2.1cmを測る。

55は上層（第２層、第29図）から出土した銅銭「至和元宝」（初鋳1055年）である。その他の遺物については小片のため、図化し得なかった。

SX04　（第64図－56～59）

56は須恵器鉢である。直線的に開く口縁部と直立する口縁端部を持つ。口縁端部外面は肥厚する。口径25.7cmを測る。57は須恵器甕である。口縁部は外反して端部に面を持つ。端部は上方につまみ上げて終る。口径28.5cmを測る。

58は土師器堝である。外面は左上がりのタタキで、口縁端部内面は強いナデにより断面三角形状に隆起する。口径24.2cmを測る。59も土師器堝である。体部から屈曲して頸部につづき、口縁端部は外方に張り出す。外面は左上がりのタタキ、頸部は強いナデにより仕上げられている。口径14.4cmを測る。

第６節　江戸時代

SE05　（第64図－60～62）

SE05からは須恵器埦・鉢、土師器皿、陶磁器などが出土しているが、量は多くない。その他、漆器椀も出土している。

60の須恵器鉢は、口径21.8cmを測る。直線的に開く口縁部で、端部外面に若干肥厚がみられる。

土師器小皿61は、浅く外方に開く口縁部を持ち、体部外面は強い指頭圧痕がある。胎土は極めて精良である。

62は加工円盤で、陶器体部片の周縁を打ち欠いて円形に整形したものである。直径約５cmを測る。

第V章　遺物の考察

第１節　縄文時代晩期凸帯文土器について

第IV章第１節で、今回出土した縄文時代晩期後半の土器には、滋賀里IV式に属すものと、それ以外のものとに大別できると既述した。以下、後者の土器について若干補記し、時期等に触れておきたい(注49)。

出土した土器片の中で、口縁部片は図化したものを含め計35個体あるが、これを口縁部凸帯の位置と形状のタイプ別に集計すると表３となる。

口縁部凸帯

これを見ると、口縁端部から下がって凸帯を貼り付けるＡ類が主体となっており、Ｂ・Ｃ類は少数派に属すことが確認できる。ただ、Ａ類としたものの中には、神戸市宇治川南遺跡(注50)や、姫路市丁・柳ヶ瀬(注51)、今宿丁田両遺跡(注52)で注意されている極めて低い凸帯を貼り付け、小さな刻目を施すもの（第31図－16・18）が計３個体含まれている。しかしこれを他と時期の異なるものとして除外しても、Ａ類が総個体数に占める比率は84.4％となり、大勢に影響はない。

分　類		個体数・(比率・%)		個体数・(比率・%)
A	I	15	(50)	30(85.7)
	II	9	(30)	
	III	2	(6.7)	
	IV	4	(13.3)	
B	I	0	(0)	3(8.6)
	II	0	(0)	
	III	0	(0)	
	IV	3	(100)	
C	I	1	(50)	2(5.7)
	II	1	(50)	
	III	0	(0)	
	IV	0	(0)	

表３　縄文土器口縁部集計表

凸帯の形状では、Ｉ類が45.7％、II類が28.6％、III類が5.7％、IV類が20.0％となり三角形・蒲鉾形タイプが主体で、下さがり三角形も約⅓を占めている。

肩部凸帯

次に肩部凸帯を形状によって集計すると表４となる。個体数が少なく、数値にどれ程の意味があるか疑問も残るが、ある程度の傾向を示すものとすれば、断面が三角形のものと、蒲鉾形のもので91.7％を占めており、下さがり三角形は皆無であることを指摘できる。

分　類	個体数・(比率・%)
I	6　(50)
II	0　(0)
III	1　(8.3)
IV	5　(41.7)

表４　縄文土器肩部集計表

胎土

胎土に角閃石、雲母を含み、暗茶褐色系の色調を有する河内系の土器片も、若干搬入されている。口縁部片ではＡＩ類に２個体、ＣII類に１個体あり、肩部片では、Ｉ・III・IV類に各１個体ある。口縁部片と肩部片の総和は47個体で、これに占める河内系土器片の比率は12.8％となる。

時期　当遺跡と地理的にも近く、出土土器の統計処理がなされている伊丹市口酒井遺跡(注53)と比較を行い、今回出土した土器の所属時期の検討を行いたい。

報告者の浅岡俊夫氏は、口酒井遺跡の凸帯文土器を、第1段階＝滋賀里Ⅳ式、第2段階＝滋賀里Ⅳ式から船橋式への過渡期、第3段階＝船橋式に分類された。

口縁部凸帯　まず口縁部凸帯の位置では、口縁端部に接して付くもの（当遺跡分類のB・C類）は、第1段階で皆無であったのが、第2段階で増加し初め、第3段階では5割を越えるとされている。当遺跡のB・Cは14.3%を占め、口酒井遺跡で第2段階とされる第6次調査第2トレンチ、凸帯文Ⅱ層の14.0%に最も近い。

凸帯の形状では、口酒井第1・2段階での下三角形、上三角形の比率は1割に満たず、第3段階で2割を越す。本遺跡では上三角形を確認できないが、下三角形で28.6%を占め、口酒井第3段階に近い。これは、浅岡氏が、家根祥多氏が提示した資料(注54)から割り出した大阪府船橋遺跡での下三角形・上三角形凸帯の占める比率22.2%に近く、大阪府長原遺跡での比率45.6%を大きく下まわる。

河内系土器　河内系の胎土を持つ土器の割合は、口酒井第1段階で1割程度、第2段階後半で2割、第3段階では3割に達するとされ、時期的に新しくなるに従い、比率の増加が見られるとされた。

口酒井遺跡の第11次調査の晩期土器を報告された南博史氏(注55)も、西群土器から東群土器へ時期的に移行する上で胎土B（所謂河内系の胎土）が増加し、さらに堺市鈴の宮(注56)、同船尾西(注57)、天理市前栽(注58)の各遺跡等、長原的な深鉢を出土する遺跡でも、35～60%前後の胎土B土器片を含むことを指摘し、時期が下るにつれ胎土Bも増加するとされた(注59)。

これらと本遺跡での状況を比較すると、口酒井遺跡第6次調査の第2段階後半、第2トレンチ凸帯文Ⅰ層の13.3%に近く、南氏が浅鉢で設定した第3段階(注60)（長原・鈴の宮・船尾西・前栽遺跡が相当する）とは大きな隔りがある。

船橋式期　以上から考えて当遺跡出土の晩期凸帯文土器は、船橋式期とすることが、現時点では最も妥当と思われる。ただ家根氏が長原遺跡の報告(注61)で指摘された、船橋式に比較的多い、屈曲する肩部にb型突帯（下三角形）を付するものは、確認することができなかった。これが本遺跡出土点数の少なさに起因するのか、あるいは地域差を反映するものかは断定できず、将来の課題としておきたい。

第2節　弥生時代後期の土器編年

畿内及びその周辺地域の後期の土器編年については、今までに研究成果の蓄積がなされているが、本遺跡が所在する六甲山南麓地域では、森岡秀人氏が研究の口火を切って以来(注62)、良好な一括資料の不足と未発表が桎梏となり、編

年作業が遅れているのが現状と言える。

今回検出した土器群も「良好な」という点で問題を残すが、当地域の後期中葉～後葉の様相を一瞥し得る資料と考えられるため、以下若干の説明を加え、将来の編年作業の備えとしたい。

検討資料　後期の土器を出土する遺構には、竪穴住居址、土坑、溝とS地区土器群等があるが遺構相互に切り合い関係が少なく、かつ切り合う遺構内の出土量が極めて少ない。従ってここではSB区礫上出土土器（第44図～第47図－71～108）、同シルト層出土土器（第48図～第52－109～155）とSA区SD04出土土器（第53図～第55図－156～181）を資料として取り上げる。

3者の関係　これらの土器群の相互の関係は、第III章第2節で既述したが、SB区の河道中の礫層直上に土器群の形成が始まり、続いて礫上にシルト層が堆積すると共に同層中にも土器群の投棄が行われた。SD04は、このシルト層上面に切り込まれたもので、以上から礫上出土土器→シルト層出土土器→SD04出土土器の変遷を知る事ができる。

ただ前2者に関しては、出土状態から見て、両者間に明確な時間の断絶はないものと思われるが、ここでは仮に両者を分離し、比較・検討の対象とする。

まず、3者間の型式・器種等の変化の有無を確認しておきたい。

礫上とシルト層　礫上出土の高坏にはBが計10個体あるが、全て坏体部と口縁部とが成す角度が130度～140度を測るB_1に分類される。一方、シルト層の高坏Bは1個体のみだが、この角度が150度を示すB_2で、明らかに後出的型式に属している。さらに前者の脚裾部がほぼ直線的に斜め下方に開くのに対し、後者では脚柱部から屈曲して大きく拡がる。これは、別型式の高坏Dでも見られる変化である。

鉢では礫上のE_1が口縁端部に面を持つのに対し、シルト層では、丸くおさめるのみになっている。手焙形土器は、1個体だがシルト層から出土した。

甕については3者一括して後述する。

シルト層とSD04　SD04出土の高坏Bも1個体のみであるが、坏体部と口縁部とが成す角度は、シルト層例よりもさらに大きく、160度以上となってB_3に分類できる。

シルト層の細頸壺（114）は上端部を欠くが、ほぼ直線的に上方に開くものと推定できる。一方、SD04では内彎気味の細頸壺が出土している。

甕の変化　甕は、庄内期以降にも所謂「伝統的V様式」甕が根強く残存する当地域では、極めて型式変化を捕え難い器種の1つと言える。ここでも礫上出土の甕と、シルト層のそれとの差異を指摘するのは困難である。が、この両者とSD04出土甕とを比較すると、幾つかの相違点が明らかとなる。

口縁部　口縁部のタイプ別集計表（表5）を見ると、礫上・シルト層に多いAと、SD04で主流となるB～Dとが全体に占める比率は、礫上では51.9%対43.5%、

シルト層では48.1%対56.5%で概ね半々となるのに対し、SD04では、23.1%対76.9%となり、前2者とSD04との間に明確な一線を設けることができる。

口径

また、口径の最大・最小間の数値を求めると、礫上では7.8cm、シルト層では7.0cmを測るのに対し、SD04では5cmとなっており、甕の口径差の縮少化傾向が前2者と比べ顕著となっている。これを容量で調べると（表6）、礫上・シルト層では、2ℓ以下の小型、5ℓ以上の大型共に存在するのに対し、SD04では大型が消え、90%が2～5ℓを測る中型に含まれることが知られ、SD04段階での口径差の縮小化＝甕の中型化を確認することができる(注63)。

	礫　上	シルト層	SD04
分　類	個体数・(比率・%)	個体数・(比率・%)	個体数・(比率・%)
A	14　(51.9)	27　(43.5)	3　(23.1)
B_1	9	25	6
B_2	0	1	3
C	3 } 13(48.1)	4 } 35(53.2)	0 } 10(76.9)
D_1	1	3	1
D_2	0	2	0

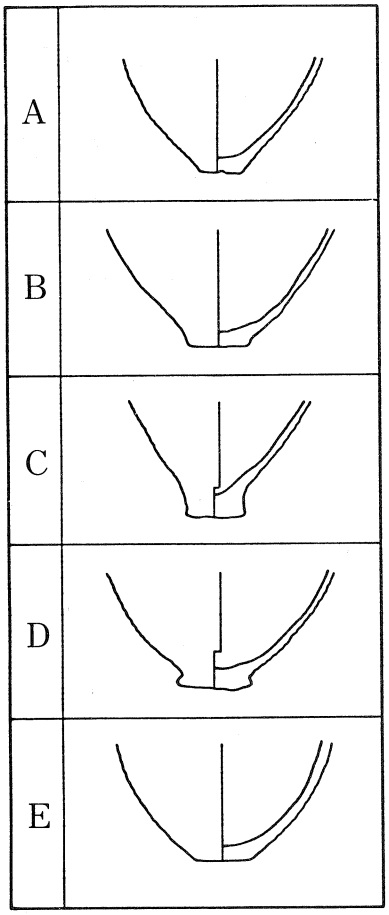
表5　甕の型式別集計表

	礫　上	シルト層	SD04
分　類	個体数・(比率・%)	個体数・(比率・%)	個体数・(比率・%)
小　型	2　(22.2)	5　(25)	1　(9.1)
中　型	6　(66.7)	12　(60)	10　(90.9)
大　型	1　(11.1)	3　(15)	0　(0)

表6　甕の容量別集計表

底部

次に底部を型式分類すると（第65図）、A…突出しない平底で、底部から直線的に体部につながるもの、B…突出気味で、体部下半にわずかなふくらみ



第65図　甕形土器底部型式分類図

	礫　上	シルト層	SD04
分　類	個体数・(比率・%)	個体数・(比率・%)	個体数・(比率・%)
A	8 } 16(76.2)	3 } 25(78.1)	0 } 8 (33.3)
B	8	22	8
C	5　(23.8)	4　(12.5)	12　(50.0)
D	0　(0)	2　(6.3)	1　(4.2)
E	0　(0)	1　(3.1)	3　(12.5)
計	21	32	24

表7　甕の底部型式別集計表

を持つもの、C…突出した分厚い底部、D…分厚い円板状のもの、E…突出はしないが、体部下半に強い張りを持つものの5タイプになる。

この内、礫上・シルト層に一般的なA・B類と、SD04で顕著なC類とが、全体に占める比率は、礫上が76.2%対23.8%、シルト層が78.1%対12.5%そして、SD04が33.3%対50.0%となり、SD04段階でのC類増加は明らかである（表7）。

さらに全底部数に占める木の葉底の比率を算出すると、礫上9.5%、シルト層6.3%に対し、SD04は25%となる。これも当遺跡での変化の1つとしてあげておこう(注64)。

編年　以上、礫上、シルト層、SD04出土土器相互間に、型式、器種の差異を認めることができた（表8）。次に各土器群が第V様式のどの段階に相当するかを、他地域の土器と比較し検討を加えたい。

礫上出土土器　礫上出土高坏とほぼ同様の坏口縁部外傾角度を持つものは、東大阪市東山町1265番

		SB区土器群（礫上） 個体数・(比率・%)		SB区土器群（シルト層） 個体数・(比率・%)		SD04 個体数・(比率・%)	
型式							
壺	広口B_1	0 (0)	1 (2.0)	1 (11.1)	11 (10.8)	2 (40)	5 (21.7)
	B_2	0 (0)		2 (22.2)		0 (0)	
	C_1	0 (0)		0 (0)		0 (0)	
	D	0 (0)		2 (22.2)		0 (0)	
	F	0 (0)		1 (11.1)		0 (0)	
	二重口縁A_1	0 (0)		0 (0)		0 (0)	
	長頸C	0 (0)		0 (0)		1 (20)	
	細頸	0 (0)		1 (11.1)		1 (20)	
	短頸	1 (100)		1 (11.1)		0 (0)	
	短頸直口	0 (0)		1 (11.1)		1 (20)	
甕	A	14 (51.9)	27 (55.1)	27 (43.5)	62 (74.7)	3 (23.1)	13 (56.5)
	B_1	9 (33.3)		25 (40.3)		6 (46.2)	
	B_2	0 (0)		1 (1.6)		3 (23.1)	
	C	3 (11.1)		4 (6.5)		0 (0)	
	D_1	1 (3.7)		3 (4.8)		1 (7.7)	
	D_2	0 (0)		2 (3.2)		0 (0)	
高杯	B_1	10 (76.9)	13 (26.5)	0 (0)	5 (6.0)	0 (0)	2 (8.7)
	B_2	0 (0)		1 (20)		0 (0)	
	B_3	0 (0)		0 (0)		1 (50)	
	C	0 (0)		0 (0)		1 (50)	
	D_1	3 (23.1)		3 (60)		0 (0)	
	D_2	0 (0)		1 (20)		0 (0)	
鉢	A_1	2 (33.3)	6 (12.2)	1 (14.3)	7 (8.4)	0 (0)	2 (8.7)
	D	0 (0)		2 (28.6)		0 (0)	
	E_1	3 (50)		2 (28.6)		0 (0)	
	E_2	0 (0)		1 (14.3)		1 (50)	
	E_3	1 (16.7)		1 (14.3)		0 (0)	
	F	0 (0)		0 (0)		1 (50)	
有孔鉢	A	0 (0)	1 (2.0)	1 (100)	1 (1.2)	0 (0)	0 (0)
	B	1 (100)		0 (0)		0 (0)	
その他	手焙形土器	0 (0)	1 (2.0)	1 (50)	2 (2.4)	0 (0)	1 (4.3)
	小型鉢A	0 (0)		1 (50)		0 (0)	
	ミニチュア	1 (100)		0 (0)		1 (100)	
	総個体数	49		83		23	

表8　SB区土器群・SD04出土土器構成表

地[注65]、同西ノ辻遺跡Ⅰ・D両地点[注66]、同鬼塚遺跡D地点[注67]、八尾市亀井遺跡SD14、同SX03[注68]、大阪市城山遺跡（その２）SB1001[注69]、同長原遺跡SB01[注70]、奈良県唐古・鍵遺跡（第20次）SK104[注71]、同四分遺跡SD666中層等[注72]があげられる。これらは全て後期初頭～前半に編年されるもので、礫上出土土器も同様に、後期前半と考えて大過ないものと考えられる。ただ礫上出土高坏の口縁部が外反し、かつ口縁端部に面を作らないこと、脚柱部の上半が中実に極めて近い形態であることは、これが前半でも新しい段階に属すことを証するものと考えられる。

また第45図－89の甕が、紀伊Ⅴ－２様式とされる和歌山県船岡山遺跡SB10上層[注73]に類例が求められることは、この土器群の想定時期と矛盾しない。

シルト層出土土器

シルト層出土土器中には、壺に尼崎市田能遺跡、６Ｙ地区溝２[注74]などに類例が求められる広口壺B_2(111）があり、高槻市安満遺跡周溝墓Ａ５－２土器群[注75]、東大阪市鬼塚Ｅ地点[注76]、奈良県唐古・鍵遺跡45号竪穴下層[注77]など、後半期以降に類例が増加する広口壺Ｄ（113）が含まれる一方で、前半期に盛行期がある長頸壺が欠ける点から見て、後期でも後半にこれを属させるのが妥当と言える。

また口縁端部をつまみ上げる鉢E_2や、拡張するE_3は、尼崎市田能遺跡Ⅳ期、東大阪市上六万寺遺跡や[注78]、高槻市安満遺跡周溝墓Ａ５－２土器群にあり、さらに手焙形土器が既に出現していることも上の考えを支持する資料となろう。

SD04出土土器

当土器群には装飾壺（156)、小型壺（162）や、大阪市加美遺跡（KM85－６）SE01[注79]や、八尾市美園遺跡CSK301、CSK303[注80]などに類例がある、くの字状口縁部に張りの強い体部を有する大型鉢（180)、豊中市服部遺跡SK01[注81]に出土例がある中ぶくらみの頸部を持つ細頸壺（161）を含み、庄内期に下がるものとも考えられる。しかし（156）や（162）は溝上層で出土したものであり、また庄内期に一般的な波状文、円形浮文で加飾する二重口縁壺、Ｎ地区包含層、SB区旧河道内で確認できる生駒西麓産の庄内甕、そしてこの影響下に出現したと思われる甕Ｅが、小片の状態でも見られないことや、高坏（176）に口縁部の発達が顕著でないことなどは、SD04出土土器を庄内期のものとすることに否定的材料となっている。

さらに、大型鉢Ｆ（180）も奈良県東安堵遺跡落ち込み遺構内[注82]で、庄内甕を含まない土器群と共伴する事実がある。

これよりSD04出土土器は庄内期に近い後期後半に位置づけることが、現状では最も妥当であろう。

以上、当地の第Ⅴ様式を前・後の２期に大別し、さらに各々を２分割して、古い段階からⅠ～Ⅳ期と仮称すると、SB区礫上出土土器はⅡ期、シルト層出

土土器はIII期、SD04出土土器はIV期とすることができる。ただし、II期とした礫上土器群中のPo-13は遺構の章でも述べた様に、出土状態はIII期のものと俊別し難い。従ってPo－13に含まれる綾杉文タタキの甕も、III期に下る可能性は十分にある。

各遺構の時期　今回検出した弥生時代後期の遺構には、竪穴住居址、掘立柱建物址、壺棺墓、溝、土坑等があるが、その大半は上記分類のIV期を中心とする時期と考えている。この内、銅鏃出土のSD02は庄内期に下るものであり、柱穴内から波状文で飾る二重口縁壺片を出土したSB01、庄内期にも類例（姫路市播磨長越遺跡土坑1(注83)、八尾市久宝寺南遺跡Ｉトレンチ第4遺構面Ｃ－SD46(注84)、亀岡市北金岐遺跡SB03等(注85)は、口縁部形状が異なるが、これに属するものと思われる）が求められる高坏を出土したSB07も庄内期に属す可能性を持っている。ただ後2者に関しては、当地の土器編年の充実をまって結論を下したい。

第3節　弥生時代後期の甕の煮沸形態

嘗て森本六爾氏は、弥生土器の地域的様式研究を進める中で、畿内から関東に所在する遺跡で出土する土器類に、それぞれ煮沸と貯蔵の2形態が認められることに注意された(注86)。その後、弥生土器の地域的、時間的様式研究は着実に進められて来たが、煮沸・貯蔵の2形態から当時の生活の発達段階を具体的に追究することは少なかった。ただ縄文土器の煮沸形態に関しては、縄文農耕論との関係で、深鉢形土器の煤付着状態と内面の炭化物の観察から、煮沸された内容物を推定することも試みられた。

西川卓志氏の研究　一方、弥生土器に関しては、1981年に発表された西川卓志氏の考察が(注87)、煮沸形態の具体的研究として最初のものと思われる。西川氏は河内地域の資料に拠りながら甕の煤化、赤色化、無変化部位を詳細に観察され、前期～後期を通じ、甕下半の一部を土中（炉中）に埋置する方式が存在したことを明らかにされた。

また後期に入ると、地面に土器を置いて煮沸するものと、地面から離して使用する例が前半以降増加し、特に後者は北鳥池遺跡下層式前後以降に煮沸形態の大勢を占める様になったとされた。

氏は、庄内甕の観察成果から甕底部の一部を土中又は灰中に埋置するものを弥生時代型、地面から離す方法を古墳時代型と呼んだ。

川西宏幸氏の研究　川西宏幸氏は、煮沸用土器を器形・技法・使用法に焦点をあて、調理面から人間生活の歩みを明らかにしようとされた(注88)。そして、前期・中期の煮沸用甕形土器には、下腹部に赤・黄色の加熱痕が見られるのに対し、大阪府船橋遺

跡、奈良県布留遺跡出土の後期のものには、底面全体に赤・黄変した例が多いことに注意され、これを煮沸時に底面が強熱される状況を示すものと考えられた。

その具体的方法については、V様式期に確実に溯る土製支脚が認められないことから、これ以外の何らかの方法によるものとされている。

藤田至希子氏の研究　藤田至希子氏は、奈良県矢部遺跡の布留式最古段階の資料を検討され(注89)、煤付着部位が外表面全体や、頚部を除く外面全体にあるもの、また下半の煤が上半に及ぶものを炉型煤類型、体部下半を中心に、口縁部にも付着するものを含めて、カマド型煤類型と呼称された。

柳瀬昭彦氏の研究　柳瀬昭彦氏は、岡山県百間川原尾島遺跡井戸16と同上東遺跡才の町地区P－トの資料を検討され(注90)、煤の付着状態から、表面全体に比較的濃く付着するAタイプ（底部近くの煤が消えるものをA′とする）と、上半部は薄いか無く、下半に濃く付着するBタイプ（底部近くの煤が消えるものをB′とする）に分類され、前者を炉型、後者をカマド型とされた。

そして、百間川遺跡では、後期中頃までカマド型は見られず、古墳時代前期（下田所期、亀川上層期）でもわずかに散見されるのみであるとされた。

出土甕の検討　以上の成果を踏まえ、本遺跡の甕形土器を観察すると、外面の煤と内面の炭化物が付着する部位でいくつかのタイプに分類することができる。

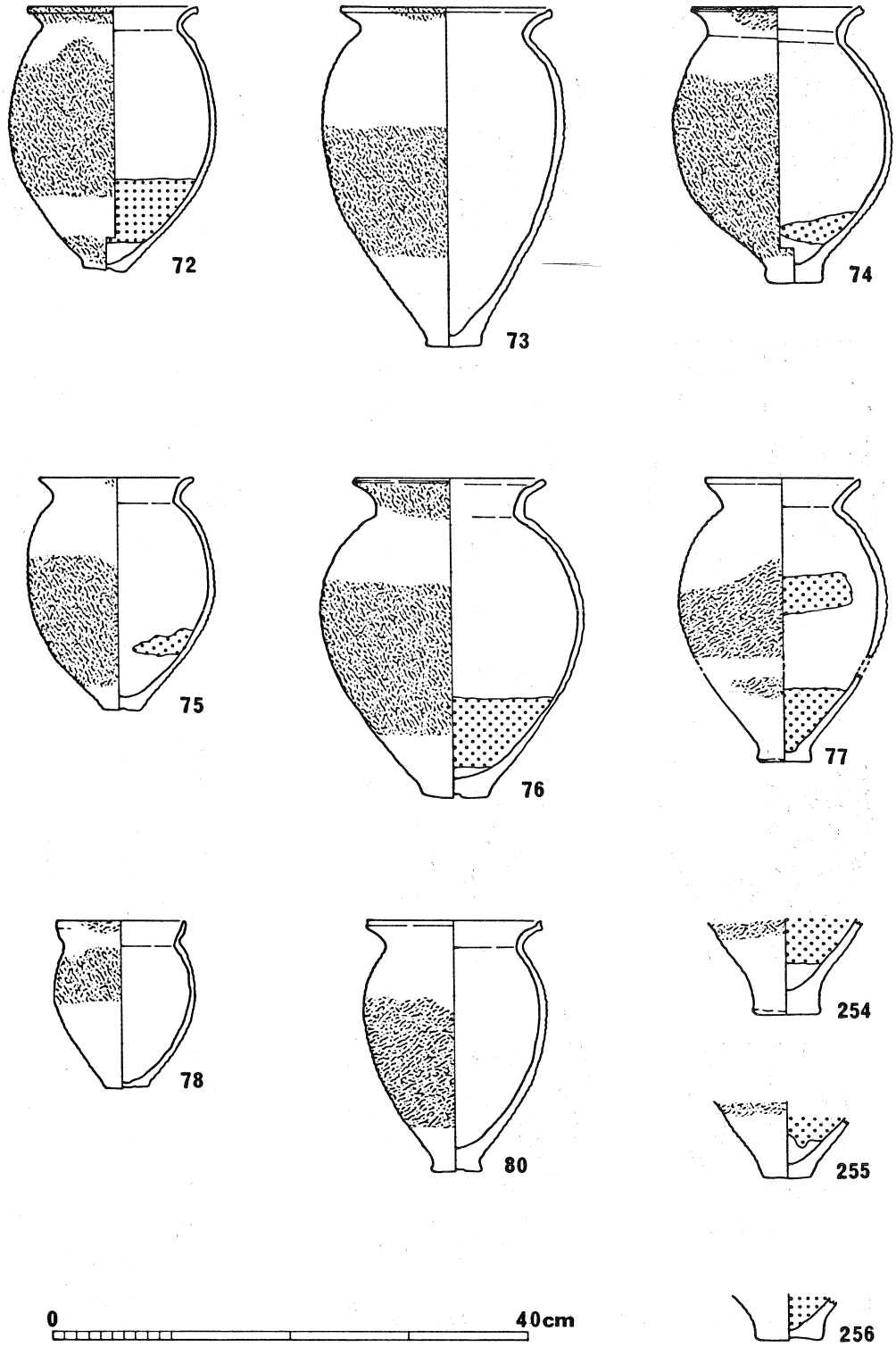
ここで観察の対象としたものは、完形品が多く、時期的変遷をとらえることのできたSB区土器群とSD04出土土器である。

分類　A…内面の炭化物が底部内面に付着せず、底部からやや上に帯状に残る。外面の煤は、中位または中位～下半にかけて付着するものが多く、下半～底部外面と底部裏面には煤が付着しない。底部外面に煤が及ぶものもあるが、それは部分的でかつ薄い。（第66図－72・74～76・254・255、第67図－119～121・124・131、第68図－133・137・139、第69図－164・168・172）

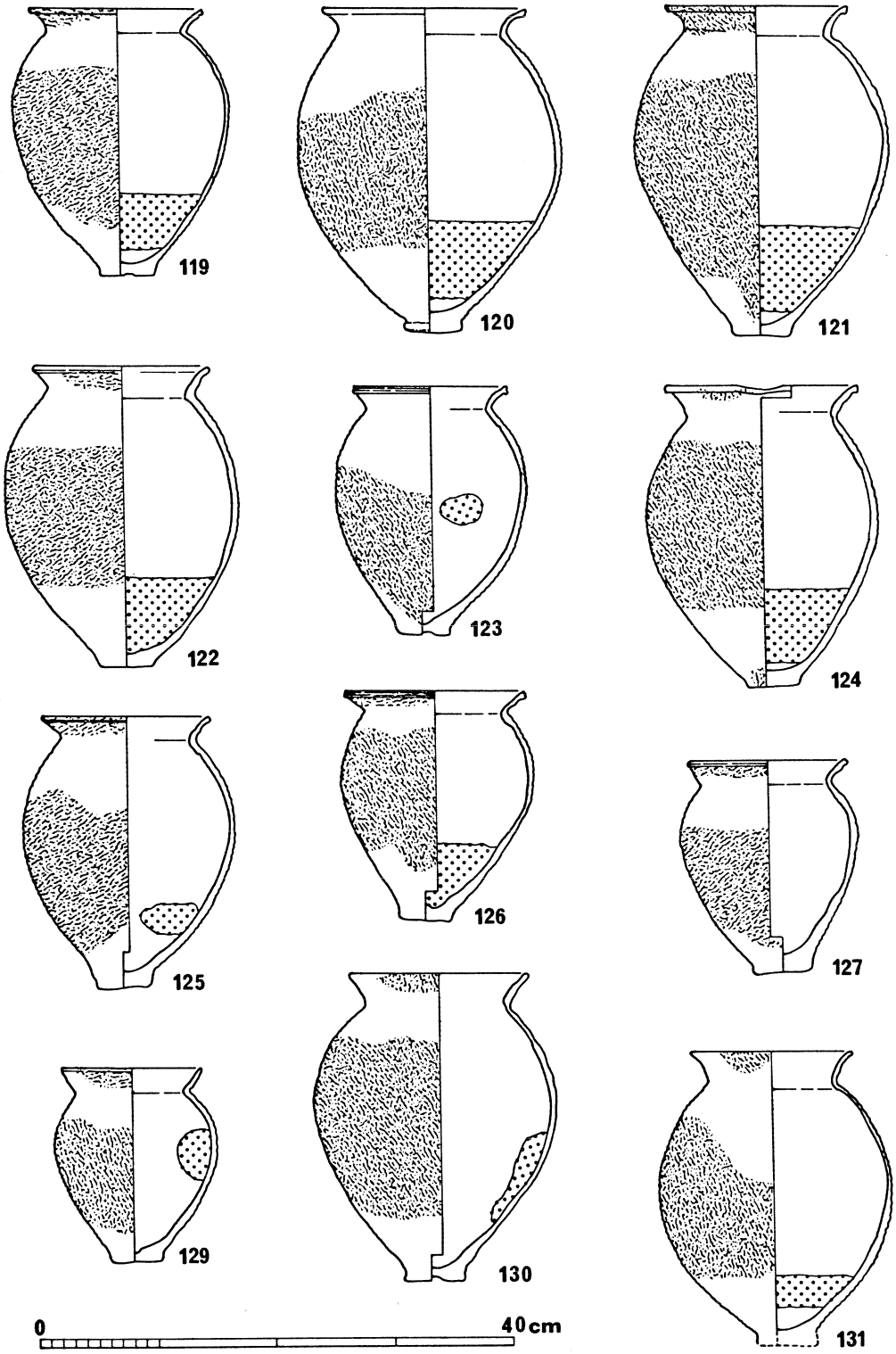
B…内面の炭化物が底部内面にも付着するもの。外面の煤付着状況はAと変わらない。（第66図－77・256、第67図－122・126、第68図－134・142・257、第69－167・169）

C…外面の煤が底部裏面にまで付着するもの。破片でしか確認できなかった。従って、上半の状況は不明である。内面の炭化物は、底部内面からやや上方に、部分的に残る。（第68図－259・260）

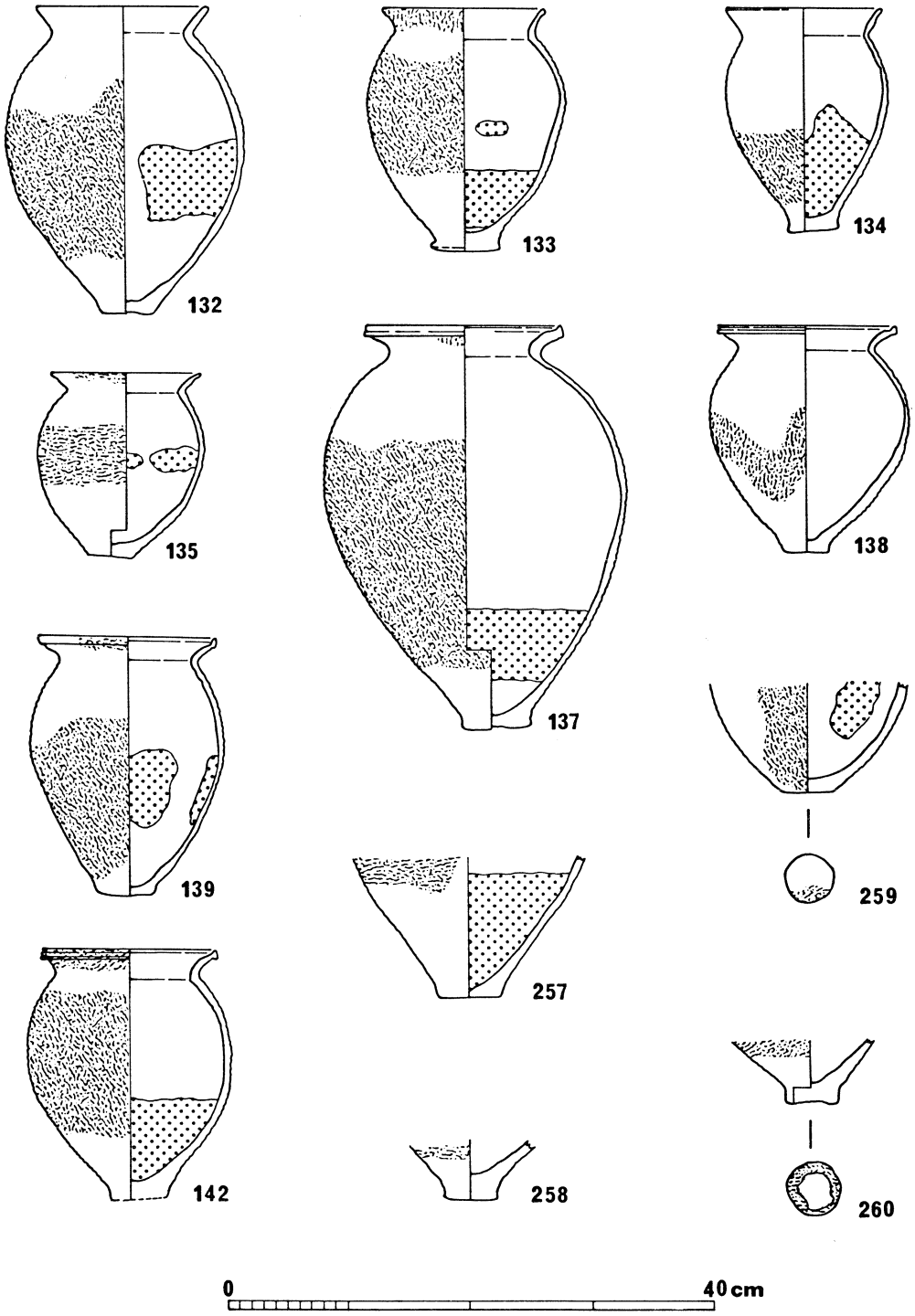
C′…底部裏面に煤は付着しないが、底部外面～裏面にかけて、器表が赤変し、荒れが見られるもの。（第67図－125・130、第68図－132・135・258、第69図－173・174）



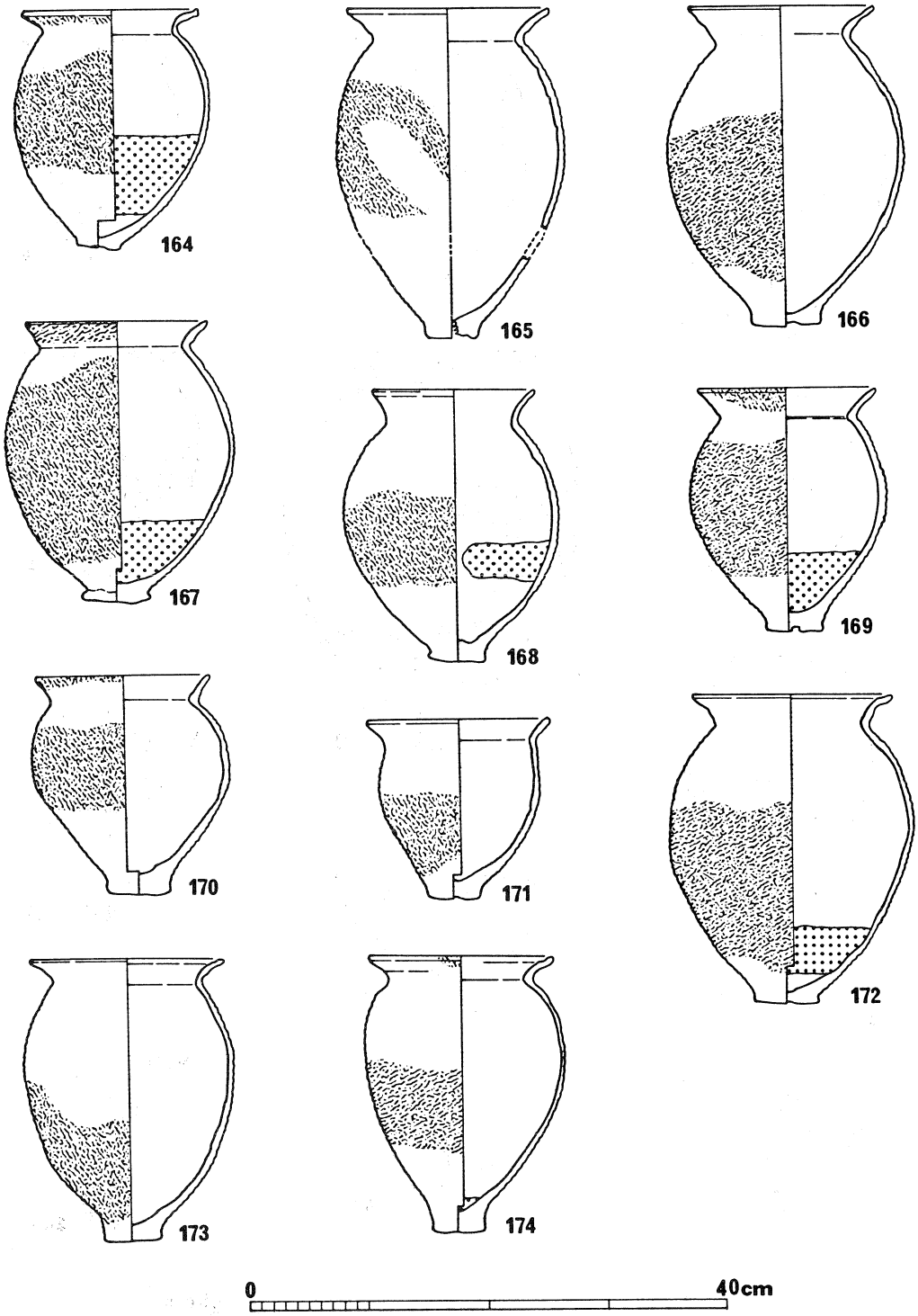
第66図　煤・炭化物付着状態図（1）



第67図　煤・炭化物付着状態図（2）



第68図　煤・炭化物付着状態図（3）



第69図　煤・炭化物付着状態図（4）

煮沸形態

以上のA～C′までの類型から煮沸形態を推定してみよう。

Aは西川氏が中期的煮沸方法としたもので、炉中に底部の一部を埋めて安定を計り、使用する形態である。氏は主に煤と外面の無赤変部位で、これを想定したが、内面の炭化物付着状態からもこの考えが妥当性が高いものと思われる。大型甕（137）の内面炭化物が小型甕に比較し、より上方に残るのは、大型品であるが故により深く炉中に埋める必要があった事を示すものであろう。

Bは、底部を炉中に埋めない方式である。西川氏は底部裏面を除く、外面下半部に赤変化や器面の荒れが認められるとしたが、本遺跡出土例では、底部裏面から外面下半部にかけて暗黄色に変色するものが大半で、赤変しても一部に留まり、器面も荒れは殆んど見られない。この差異が何によるものか、今断定できないが、炎の強弱、持続時間等が影響するものであろう。

CはC′と共に炎が土器底部裏面に当っていることを示すものと考えられる。柳瀬氏は藤田氏の分類基準の考えを受け、煤が外面下半に厚く付着し、上半にはないか、薄くしか着かないものをカマドを使用した結果とされた。が、当遺跡では底部裏面に赤色化があるもので外面の煤が下半に限定されるもの（173）もあるが、外面の中位～上半にかけ煤が残るものがあり、カマドの使用に関しては、疑問が残る。ただ当地でも川西氏が指摘されるように、カマドに代わるようなV様式期の土製支脚の例はなく、土器を地面から離して使用した具体的な方法は不明である。しかし1例のみであるが、第68図－260の底部裏面には、支脚使用によるとも思われる荒れた面を持つ凹部が認められる。

煮沸形態の時期的変化

前節で設定した後期のII期に属す、SB区礫上出土土器では底部片を含め、計8個体に対する分類が可能で、Aが6個体、Bが2個体ある。III期のSB区シルト層では、9個体がA、5個体がBに分類でき、C・C′も計7個体見られる。IV期のSD04出土土器も資料は乏しいが、Aが3個体、Bが2個体、Cが2個体ある。

A～Cの比率を出す程の資料数には恵まれないが、注意されるのは、III期段階でのC型の出現であろう。土器底面を地面から離し、炎を主として底部裏面で受けるC型の煮沸形態が、古墳時代的であることは疑いなく、この点でIII期はより評価されるものと思われる。

今後の課題としては、西川、藤田、柳瀬の各氏が正しく指摘されたように、1集落の、1時期に於ける各煮沸形態の混在の原因と、地域間での各煮沸形態の採用の遅速の有無等があげられよう。

注

注１　官幣中社長田神社社務所・長田神社御造営奉賛会『官幣中社長田神社復旧御造営史』　1929年

注２　神戸市立考古館『おおむかしの神戸』　1976年

注３　片岡肇「近畿地方における押型文土器文化について」『平安博物館紀要』第五輯　財団法人古代学協会　1974年

注４　神戸市教育委員会「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』　1986年
丹治康明「六甲山南麓における縄紋時代の動向」『神戸の歴史』第13号　神戸市市長総局　1985年

注５　直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」『近畿古代文化叢考』葦牙書房　1943年

注６　神戸市教育委員会「楠・荒田町遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』　1989年

注７　丸山潔・丹治康明『楠・荒田町遺跡発掘調査報告』　神戸市教育委員会　1980年

注８　神戸市教育委員会『大開遺跡現地説明会資料』　1988年

注９　山本雅和『戎町遺跡』　神戸市教育委員会　1989年

注10　千種浩『松野遺跡発掘調査概報』　神戸市教育委員会　1983年

注11　注８に同じ

注12　神戸市教育委員会「三川口町遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』　1988年

注13　注７に同じ
神戸市教育委員会「楠・荒田町遺跡」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』　1988年

注14　注４に同じ

注15　小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』第４巻第４号　東京考古学会　1933年

注16　浜田耕作「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌』第36巻第８号　東京人類学会　1921年

注17　注15に同じ

注18　注６に同じ

注19　兵庫県教育委員会『神戸市鷹取町遺跡現地説明会資料』　1987年

注20　梅原末治「神戸市板宿得能山古墳の調査」『歴史と地理』第14巻第４号　史学地理学同好会　1924年

森本六爾「得能山古墳」『考古学雑誌』第14巻第3号　考古学会　1924年
梅原末治「神戸市板宿得能山」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯　兵庫県　1925年

注21　辰馬悦蔵他「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第五輯　兵庫県　1928年
北野耕平「摂津会下山二本松古墳における内部構造の考察」『兵庫史学』第65号　兵庫史学会　1974年
神戸市教育委員会「会下山二本松古墳」『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』　1988年

注22　梅原末治「神戸市丸山古墳と発見の遺物」『考古学雑誌』第14巻第5号　考古学会　1923年
同「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第二輯　兵庫県　1925年

注23　太田陸郎「有鰭埴輪円筒」『考古学』第2巻第4号　東京考古学会　1931年
喜谷美宣「市街地に消えた大前方後円墳」『雪』第30巻第9号　神戸市防火協会連絡協議会　1978年

注24　妙見山麓遺跡調査会の山仲進氏から資料提供を受けた。記して感謝いたします。

注25　森田稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『博物館だより』No.23　神戸市立博物館　1988年

注26　本村豪章「古墳時代の基礎研究稿」『東京国立博物館紀要』第16号　東京国立博物館　1981年

注27　神戸古代史研究会「兵庫県下の石棺」『神戸古代史』第2巻第1号　1975年

注28　梅原末治「神戸中宮古墳と其の遺物」『古墳址記』　1926年
小林行雄「技術からみた古墳の様式」『考古学』第5巻第6号　東京考古学会　1934年

注29　注10に同じ

注30　神戸市教育委員会「神楽遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』　1987年

注31　注19に同じ

注32　注6に同じ

注33　神戸市教育委員会「湊川遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』　1989年

注34　稲沢正弘・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』第3巻第1号　神戸古代史研究会　1986年

注35　島田清「房王寺出土の古瓦に就て」『神戸史談会会報』昭和12年7月　神戸史談会　1937年

高井悌三郎「六甲山南麓の奈良時代遺跡」『伊丹市史』第1巻　1971年

注36　神戸市教育委員会「神楽遺跡－第4次－」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』　1989年

注37　注21に同じ

注38　菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1981年

注39　神戸大学により調査された。

注40　宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第5号　史学研究会　1982年

注41　容量の測定は、都出比呂志氏の方法による。土器実測図を利用し、土器を直径の異なる厚さ1㎝の円板の集積と見做して測定した。

都出比呂志「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』　小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会　1982年

注42　24は布留式併行期に下る可能性もある。

注43　京都府亀岡市北金岐遺跡B地点SD01出土土器に類例がある。

石井清司他『北金岐遺跡』　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985年

注44　兵庫県三原郡西淡町の志知川沖田南遺跡に類例がある。

松下勝・別府洋二『淡路・志知川沖田南遺跡』　兵庫県教育委員会　1987年

注45　小林行雄・佐原眞『紫雲出』　託間町文化財保護委員会　1964年

注46　菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡』II　徳島県教育委員会　1987年

注47　中期の高杯杯部と考えられる。

福井英治『田能遺跡発掘調査報告書』　尼崎市教育委員会　1982年

注48　丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会　1985年

森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号　神戸市立博物館　1986年

平良泰久・伊野近富「平安京左京跡（内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1980－3）』　京都府教育委員会　1980年

注49　この節は当教育委員会の丹治康明氏の御教示によるところが大きい。

注50　注４と同じ

注51　岡崎正雄「縄文時代の土器」『丁・柳ケ瀬遺跡発掘調査報告書』　兵庫県教育委員会　1985年

注52　今宿丁田遺跡発掘調査団「姫路市今宿丁田遺跡出土遺物について」『第９回埋蔵文化財研究会資料』　1981年

注53　浅岡俊夫「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」『歴史学と考古学』　高井悌三郎先生喜寿記念事業会　1988年

注54　家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』　帝塚山考古学研究所　1984年

注55　南博史「縄文晩期刻目凸帯文土器について」『伊丹市口酒井遺跡－第11次発掘調査報告書』　伊丹市教育委員会・財団法人古代学協会　1988年

注56　北野俊明・野田芳正「鈴の宮」III『堺市埋蔵文化財調査報告』第11集　堺市教育委員会　1983年

北野俊明「大阪湾沿岸の縄文晩期刻目凸帯文土器に関する一考察」『考古学と移住・移動』　同志社大学考古学資料室　1985年

注57　北野俊明「浜寺船尾西遺跡発掘調査報告」『堺市埋蔵文化財調査報告』第21集　堺市教育委員会　1985年

注58　泉武『前栽遺跡－縄文時代晩期遺跡の調査』　天理市教育委員会　1984年

注59　この傾向は口丹波地方の亀岡市北金岐遺跡でも認められるが、同じ時期に属す宇治市寺界道ＳＫ02の胎土Ｂは０で地域的差異も激しい。

田代弘「縄文土器」『北金岐遺跡』　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985年

南博史「縄文時代晩期の遺物」『寺界道遺跡発掘調査概要』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第10集　宇治市教育委員会　1987年

注60　注55に同じ

注61　家根祥多「縄文土器」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』II　財団法人大阪市文化財協会　1982年

注62　森岡秀人「西摂地域における畿内第Ｖ様式編年試案」『新修芦屋市史』資料篇　1976年

注63　注41都出氏の論文

注64　神戸市東灘区の郡家遺跡（城の前地区第24次）の弥生時代後期集石墓出土土器はＳＤ04とほぼ同期と考えられるが、木の葉底の占める比率は低いという。調査担当の丸山潔氏から御教示を得た。

注65　この地点は西ノ辻遺跡に含まれる。
芋本隆裕「鬼塚遺跡」II『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報』19　東大阪市遺跡保護調査会　1979年

注66　小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器」・「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡E・F・D・H地点の土器」『弥生式土器集成』資料篇Ⅰ　日本考古学協会弥生式土器文化総合研究特別委員会　1958年

注67　芋本隆裕「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報』Ⅰ　東大阪市遺跡保護調査会　1975年

注68　中西靖人・国乗和雄・宮崎泰史・西村尋文・岸本道昭『亀井遺跡』II　財団法人大阪文化財センター　1984年

注69　赤木克視他『城山』（その2）　財団法人大阪文化財センター　1986年

注70　永島暉臣慎・中尾芳治『長原遺跡発掘調査報告』（改訂版）　財団法人大阪市文化財協会　1982年

注71　藤田三郎「昭和59年度唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要』3　田原本町教育委員会　1986年

注72　木下正史「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」III『奈良国立文化財研究所学報』37　奈良国立文化財研究所　1980年

注73　土井孝之『船岡山遺跡発掘調査報告書』　和歌山県教育委員会　1986年
同氏「紀伊地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　寺沢薫・森岡秀人編著　木耳社　1989年

注74　注47に同じ

注75　原口正三・森田克行『安満遺跡発掘調査報告書－9地区の調査－』高槻市教育委員会　1977年

注76　注65に同じ

注77　末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告16　1943年

注78　勝田邦夫「上六万寺遺跡の調査」『馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑66号墳調査報告』　東大阪市教育委員会　1981年

注79　森毅・南秀雄「和田マンション（仮称）建築工事に伴う加美遺跡発掘（KM85－6）略報」『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　大阪府教育委員会・財団法人大阪市文化財協会　1987年

注80　渡辺昌宏・井藤暁子他『美園』 財団法人大阪文化財センター　1985年

注81　木下亘・須藤聖子『服部遺跡発掘調査報告書』 豊中市教育委員会・服部遺跡発掘調査団　1986年

注82　泉武『東安堵遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所　1983年

注83　松下勝他『播磨・長越遺跡』 兵庫県教育委員会　1978年

注84　赤木克視・一瀬和夫他『久宝寺南』（その２） 財団法人大阪文化財センター　1987年

注85　注42に同じ

注86　森本六爾「弥生式土器に於ける二者－様式要素単位決定の問題」『考古学』第５巻第１号　東京考古学会　1934年

注87　西川卓志「弥生時代甕形土器の外表面観察－東大阪市域出土資料を中心に－」『調査会ニュース』18　東大阪市遺跡保護調査会　1981年

同氏「弥生時代の煮沸形態とその変遷」『考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室　1983年

注88　川西宏幸「形容詞を持たぬ土器」『考古学論考』 小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会　1982年

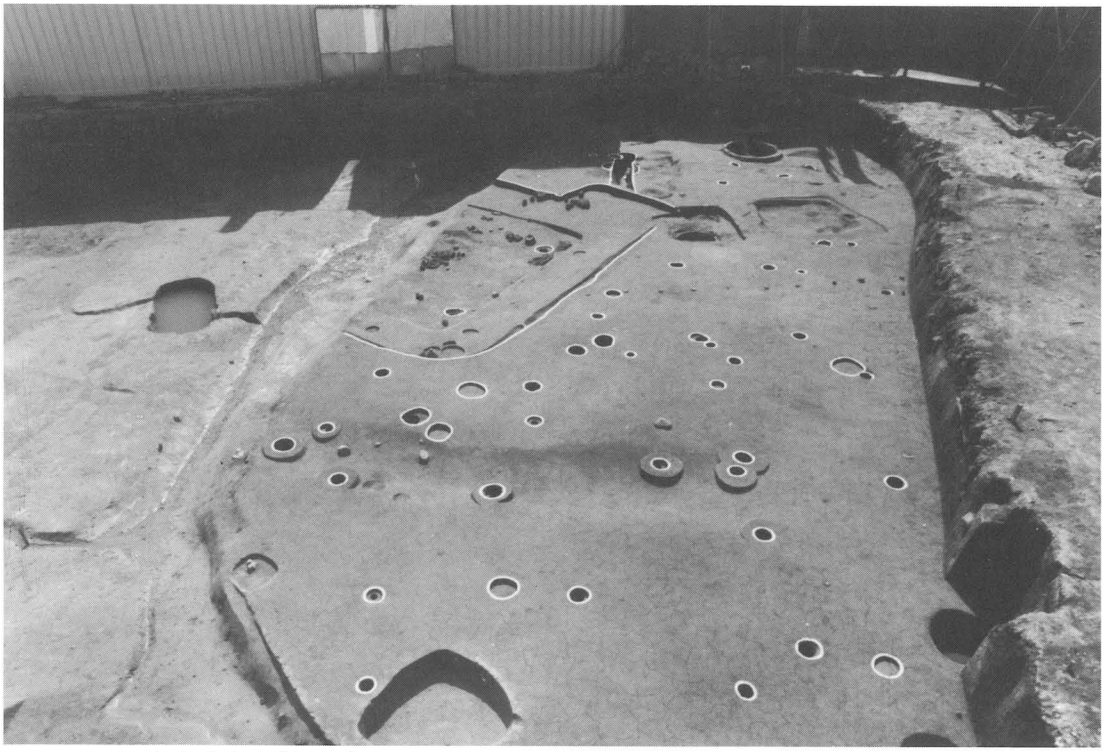
注89　藤田至希子「古墳時代前期の煮沸形態について」『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所　1986年

注90　柳瀬昭彦「米の調理法と食べ方」『弥生文化の研究』２生業　雄山閣　1988年

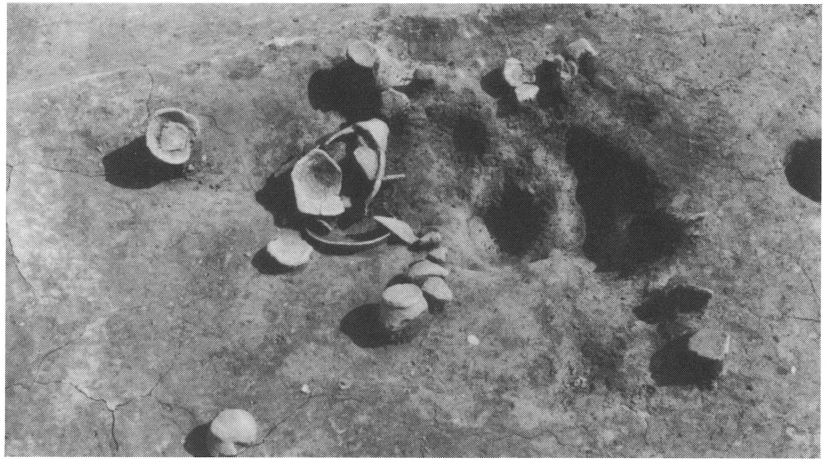
1　ＳＫ01（北から）

2　ＳＫ01土器出土状況（北から）

1　N地区全景（北から）



2　SB01及び周辺柱穴群（東から）



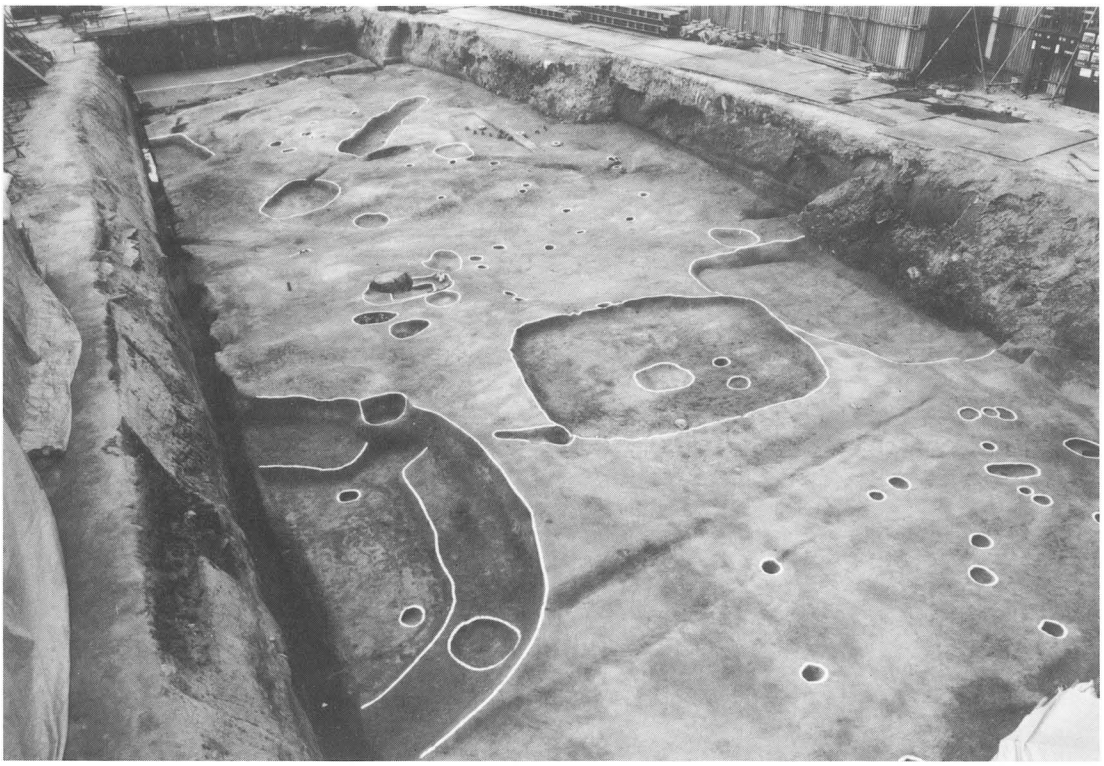
1　ＳＢ01中央炉内土器出土状況（北から）

2　ＳＢ01北東隅部土器出土状況（南から）

3　ＳＢ02（東から）

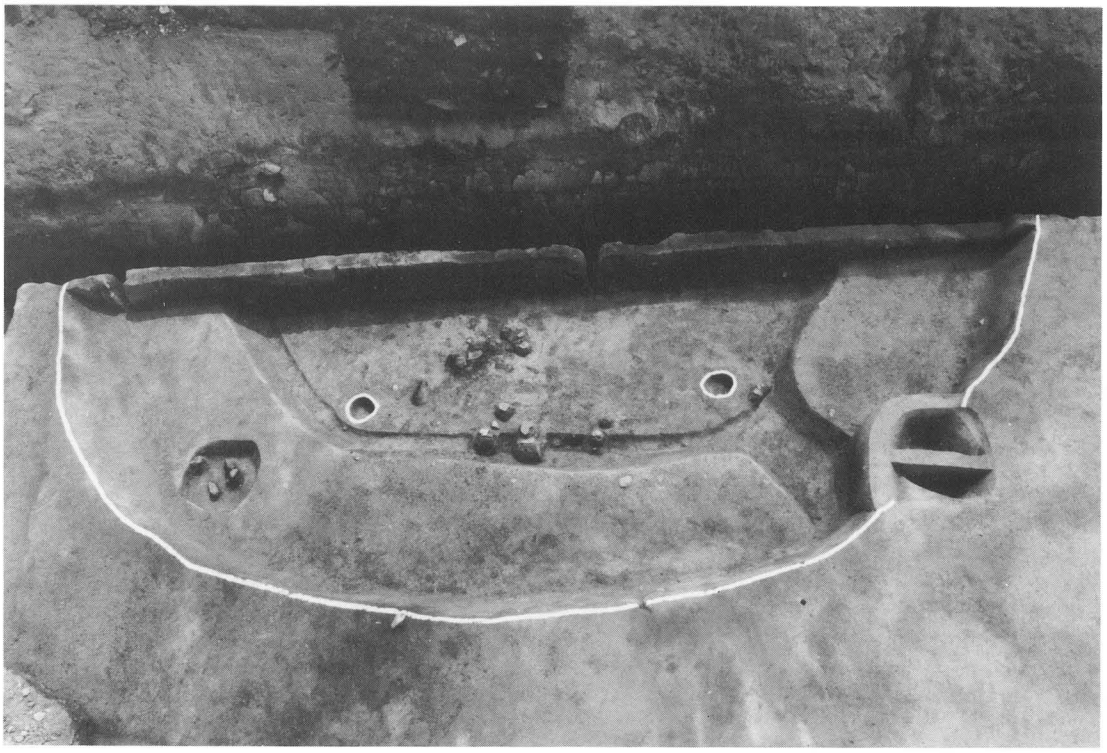
4　ＳＢ02床面炭化材検出状況（西から）

図版３

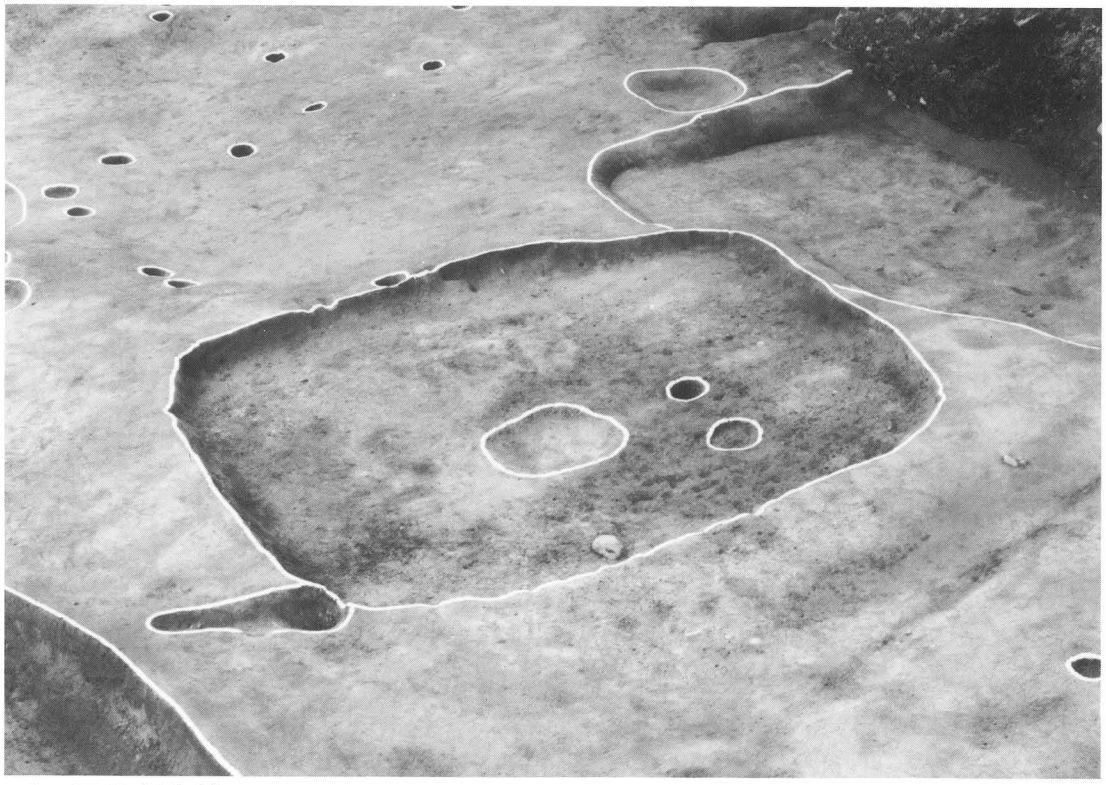


1　ＳＡ区全景（南から）

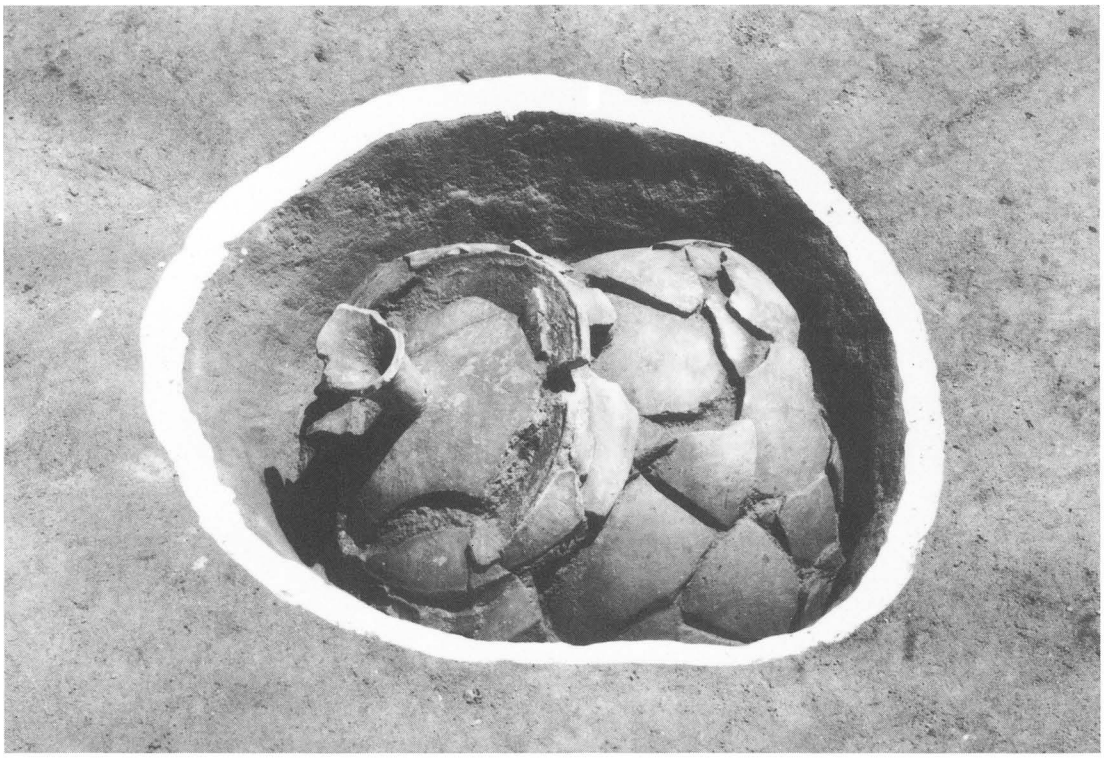
2　同上（北から）



1　ＳＢ06（東から）

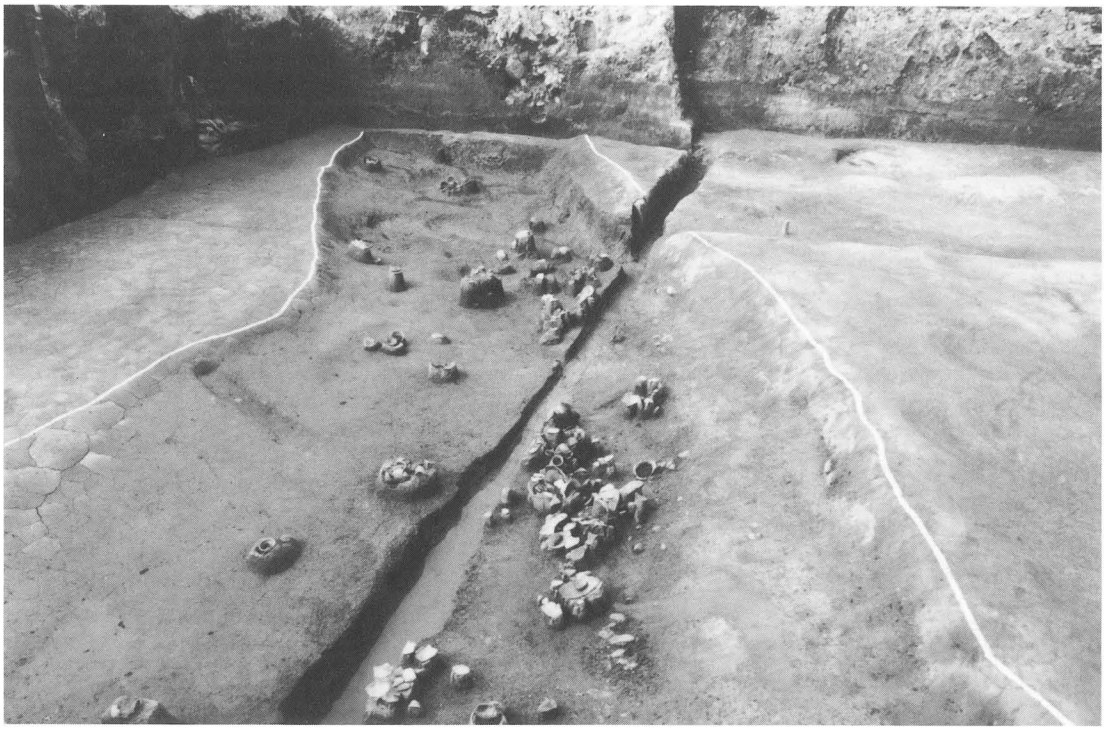


2　ＳＢ07（南から）

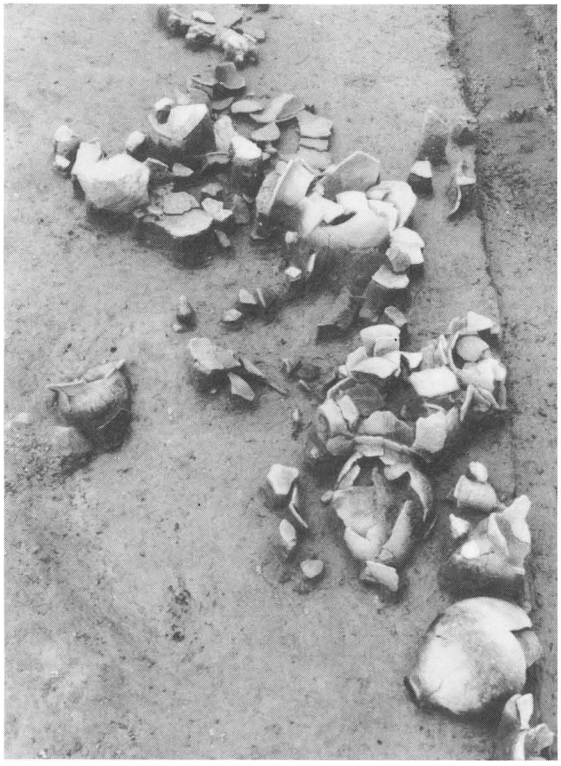


1　ＳＴ01（北西から）

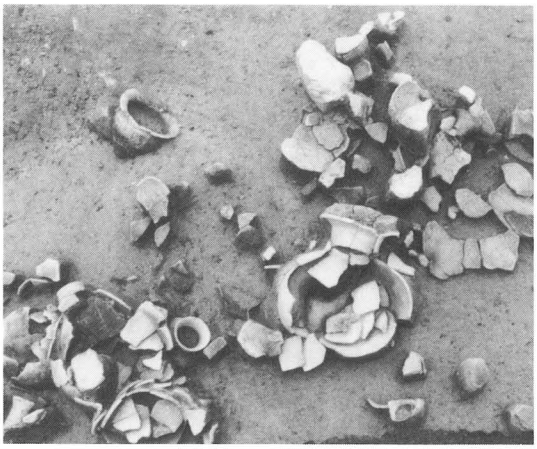
2　同上蓋除去後状況（北から）



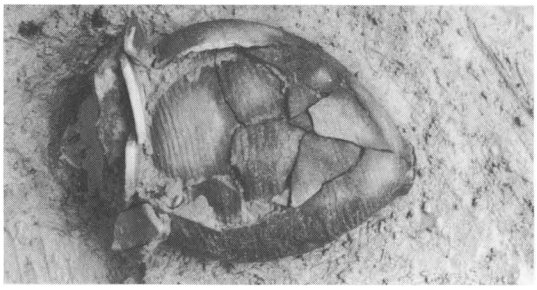
1　ＳＤ04（西から）



2　同上土器出土状況（東から）



3　同上（北西から）



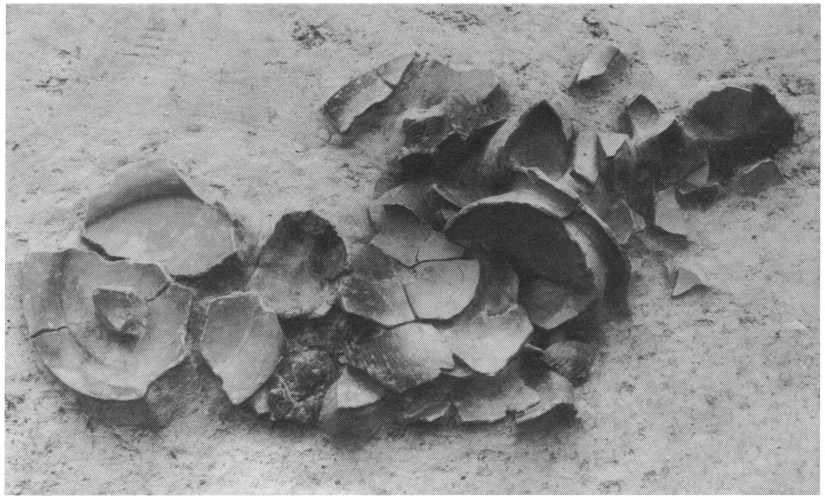
4　同上土器（164）出土状況（北から）

1　ＳＢ区土器群検出状況（東から）

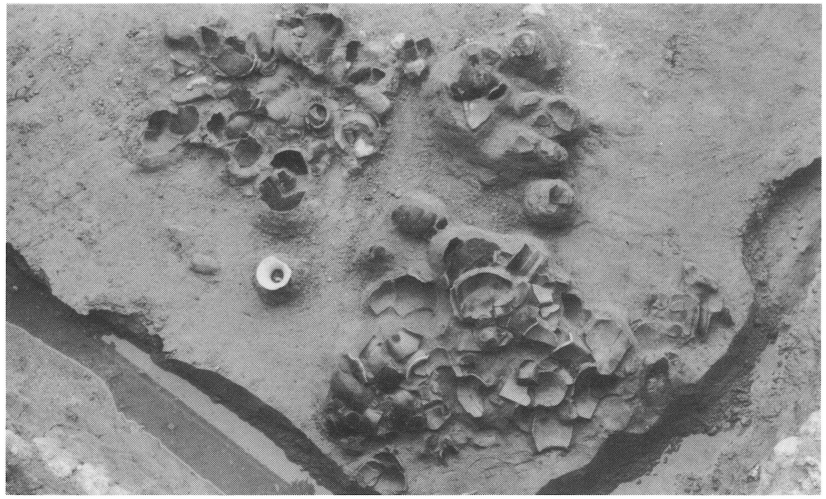
2　同上（西から）

1　ＳＢ土器群Po－９検出状況（南から）

2　同上Po－10・14検出状況（西から）



1　ＳＢ区土器群Po－１検出状況（南から）

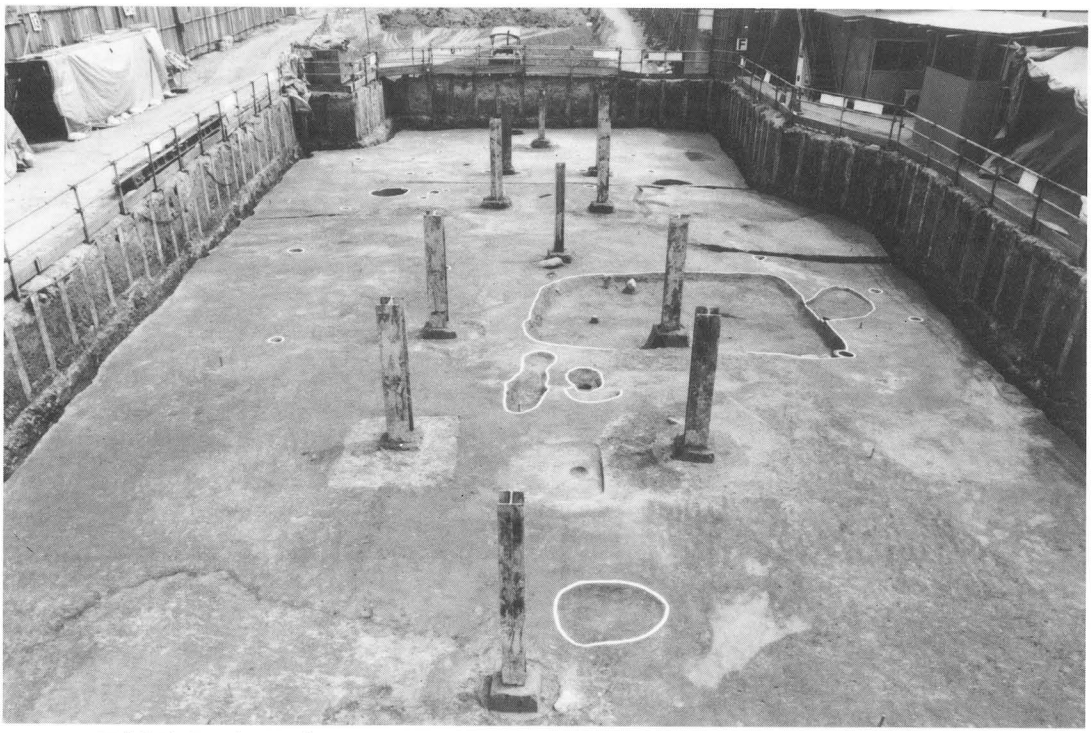


2　同上Po－６・７検出状況（南から）

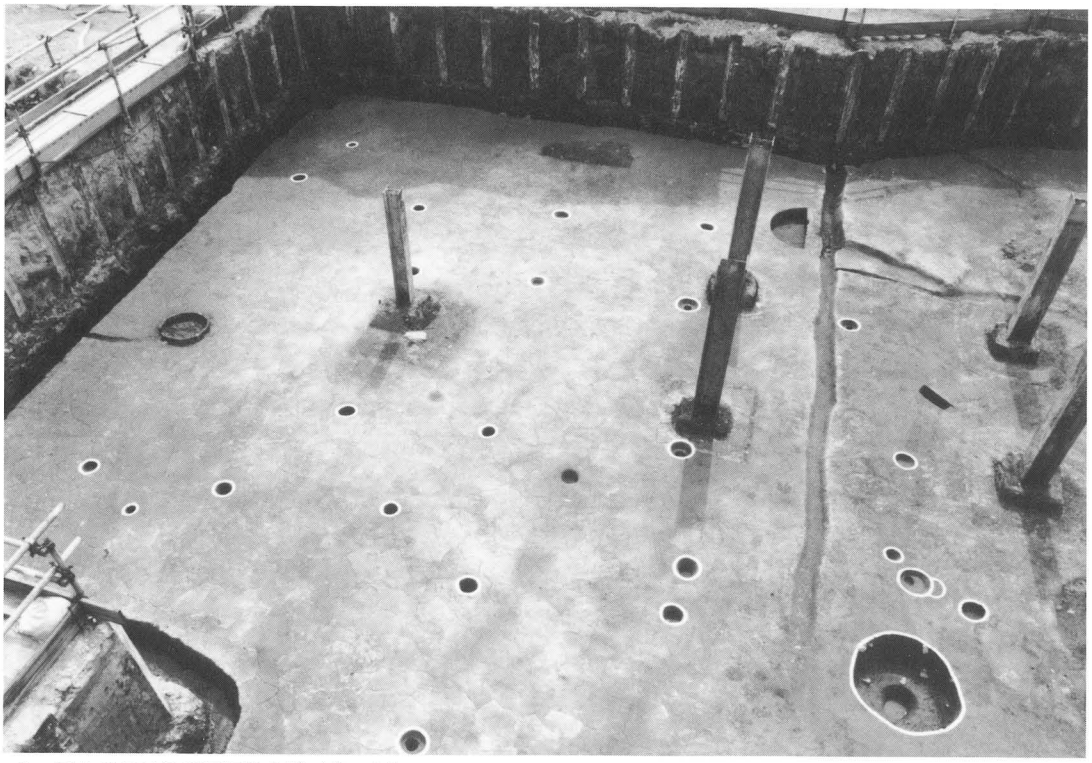
3　同上Po－12・13検出状況（東から）

4　同上Po－14検出状況（東から）

図版10



1　ＳＢ区中世遺構面（北から）



2　同上ＳＥ01及び周辺柱穴群（東から）

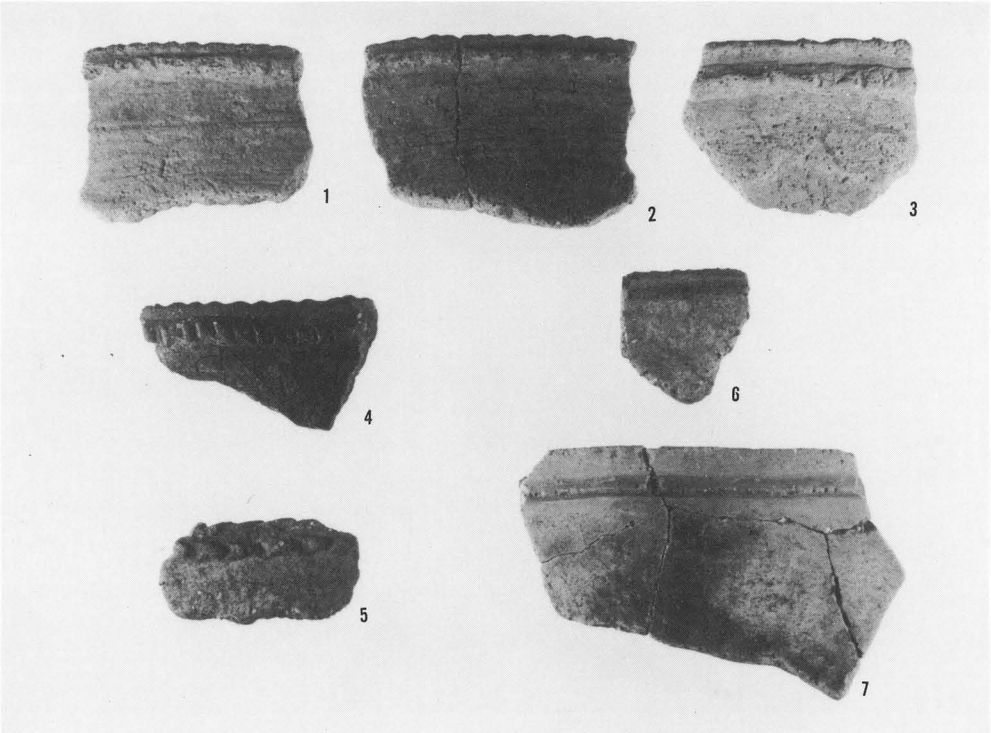
1　ＳＴ02（南から）

2　同上供献遺物検出状況（東から）

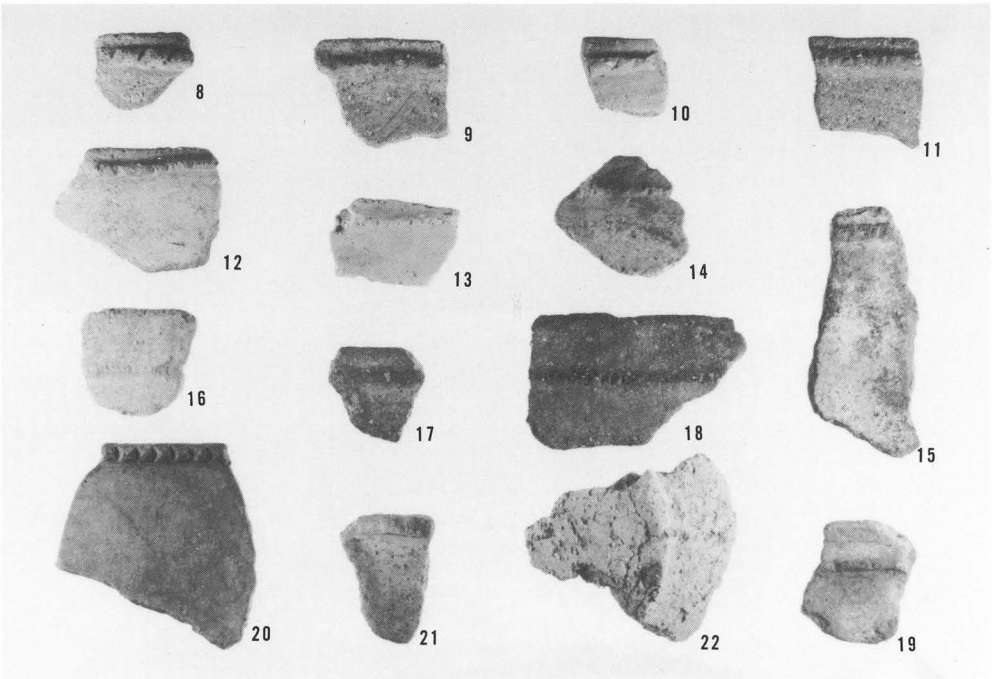
3　ＳＥ02（北から）

4　ＳＥ03（西から）

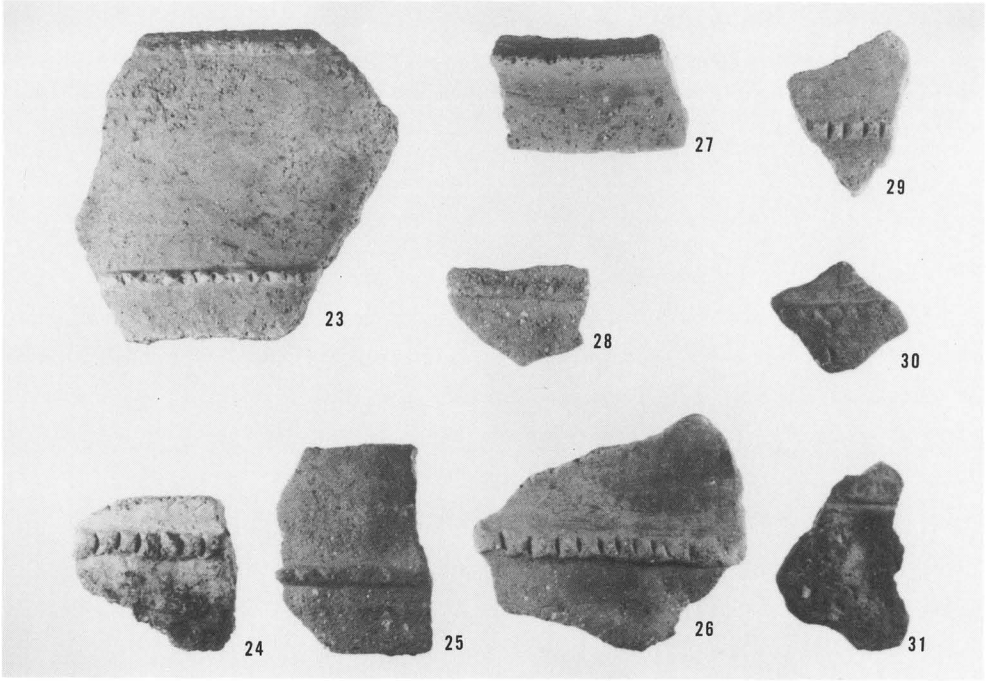
図版12



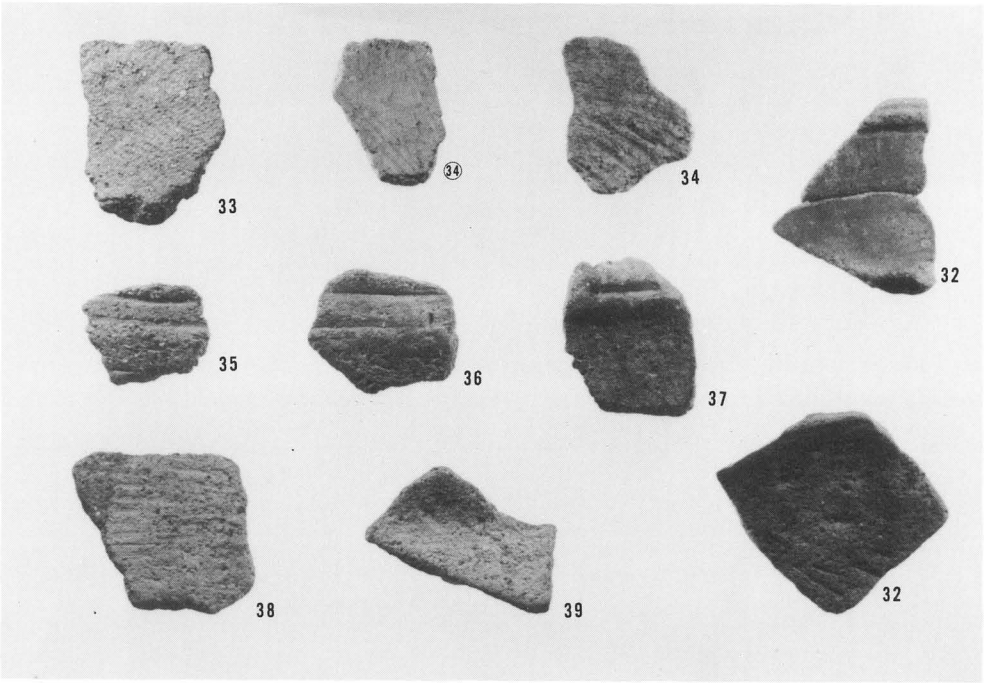
1　縄文時代晩期土器



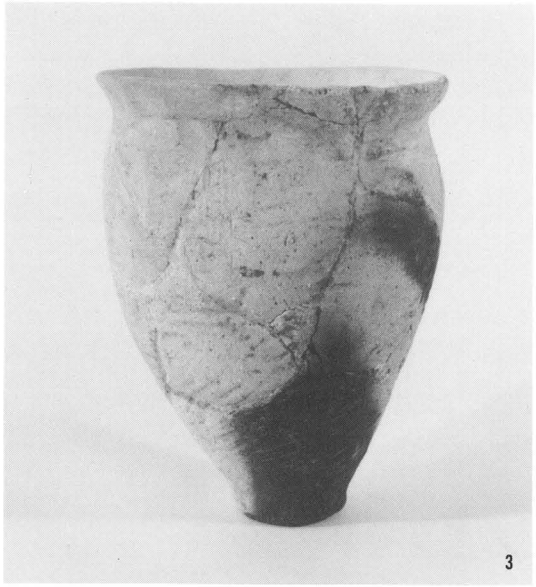
2　同上

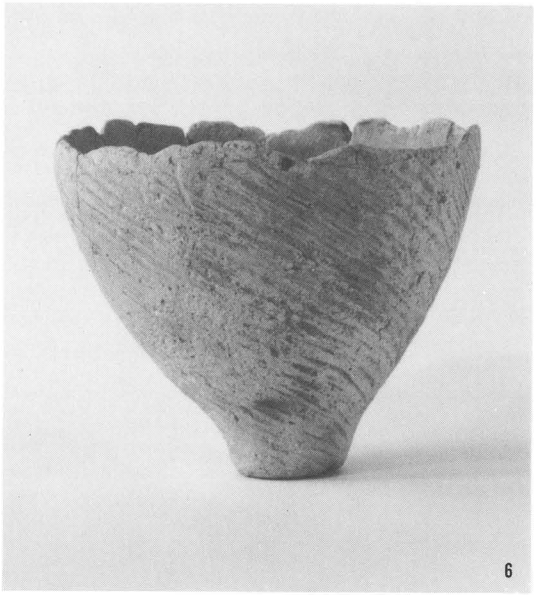


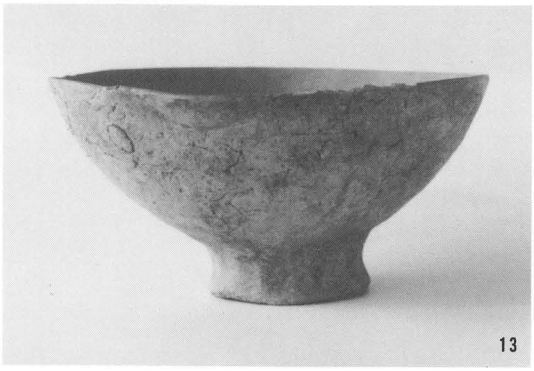
1　縄文時代晩期土器

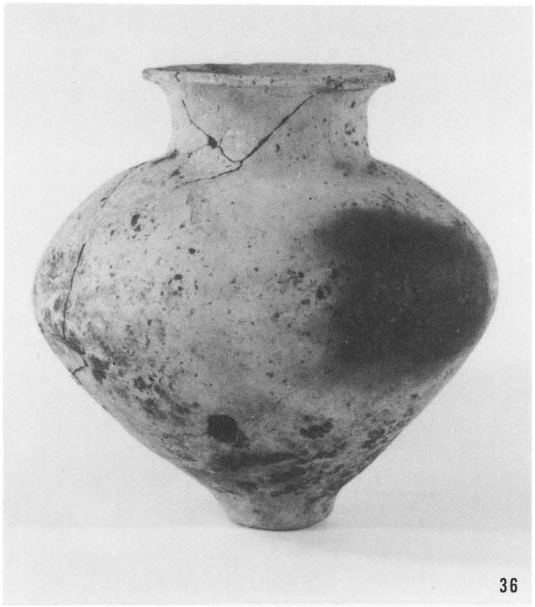


2　縄文時代中期～晩期土器　㉞は34と同一個体

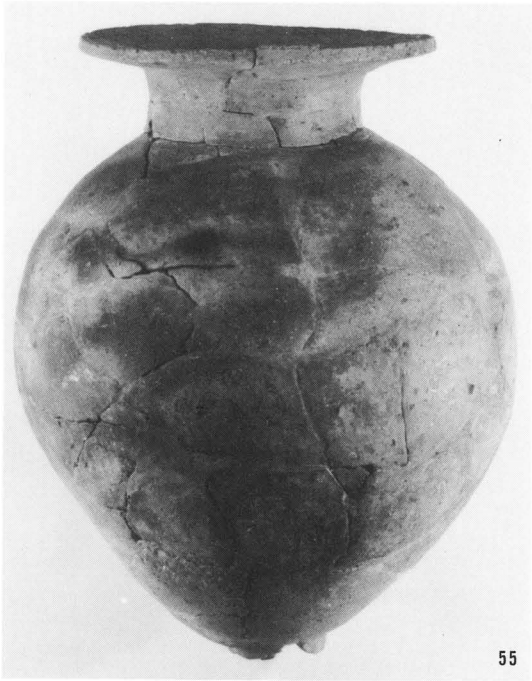




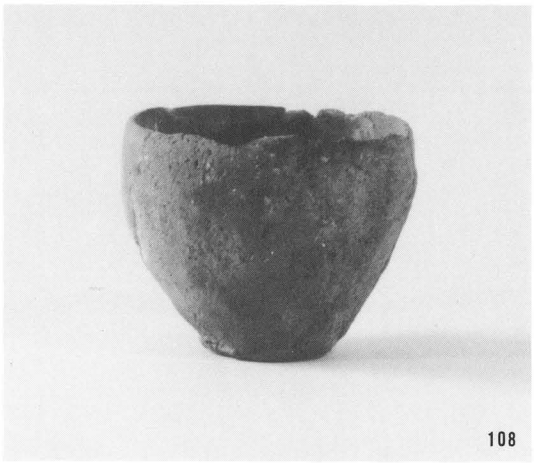




弥生時代後期土器（1）



弥生時代後期土器（２）



弥生時代後期土器（３）

117

137

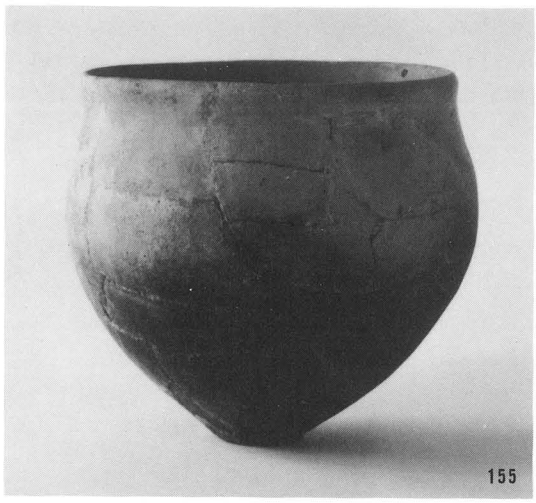
142

143

144

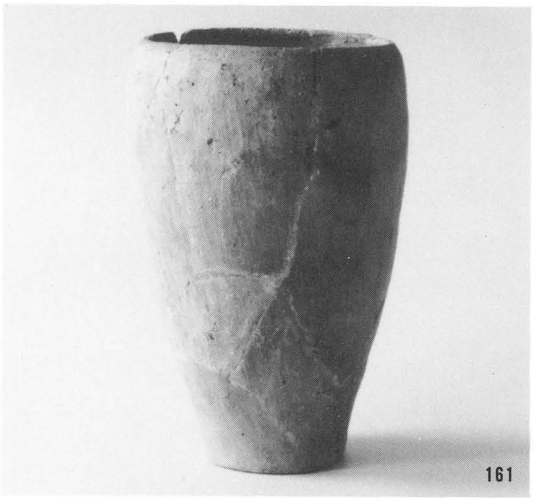
154

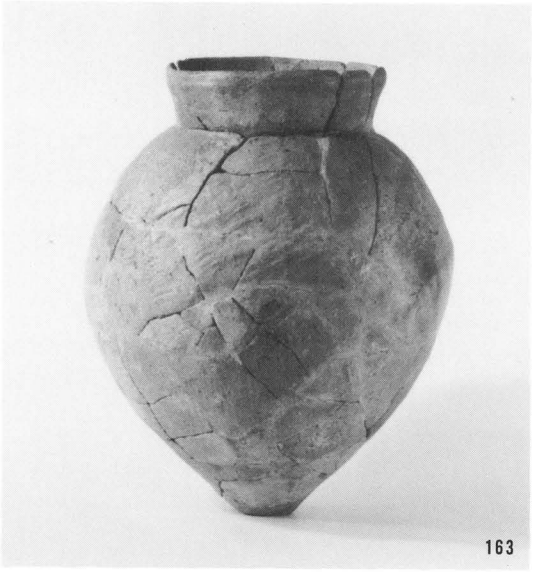
弥生時代後期土器（４）


155

157

160


161


163

164

弥生時代後期土器（５）

169

173

174

177

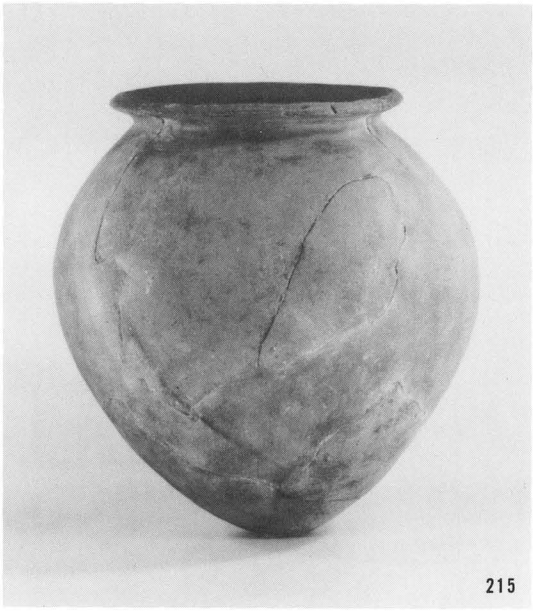
178

188

弥生時代後期土器（6）

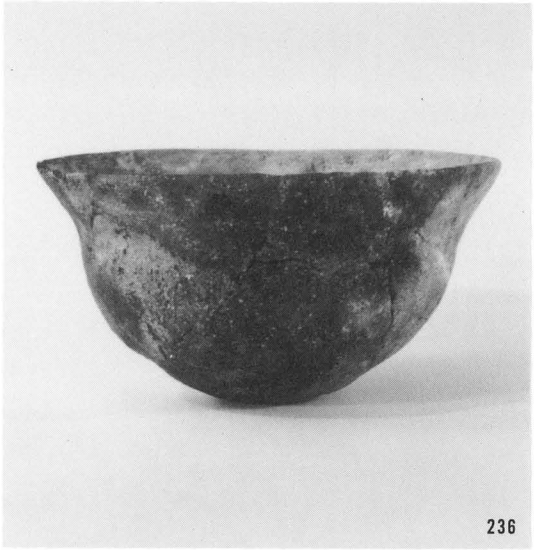
194

198

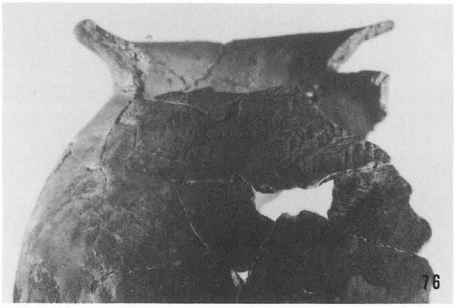

215

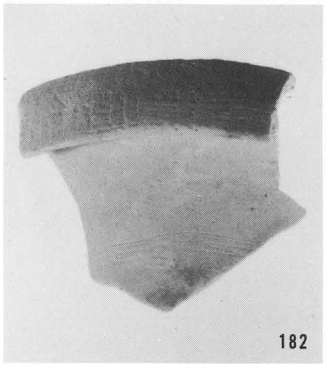
230

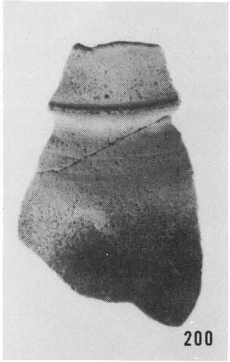
231

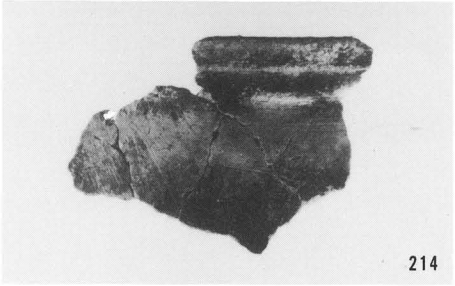

236

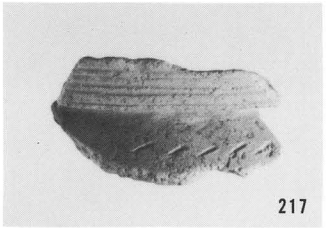
弥生時代後期土器（７）

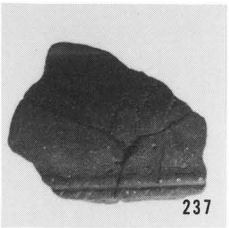




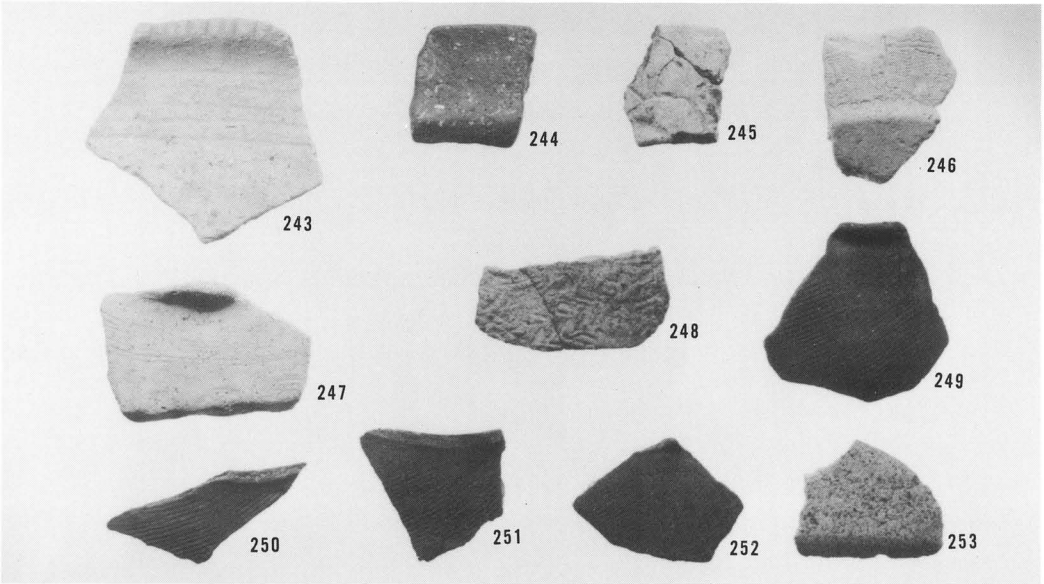




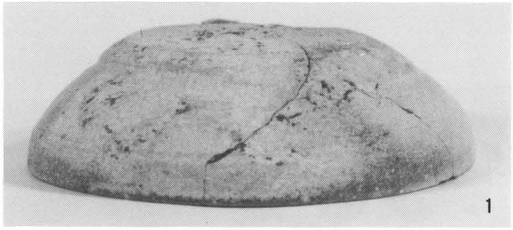




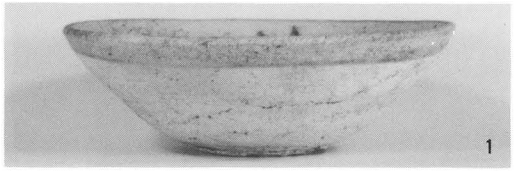
1　搬入及び特殊な土器

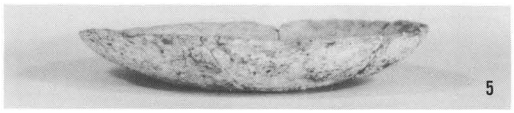


2　弥生時代前期～庄内期土器及び石庖丁

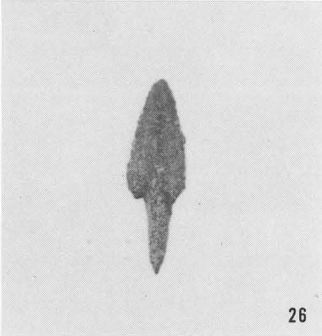


3　Ｎ地区出土須恵器

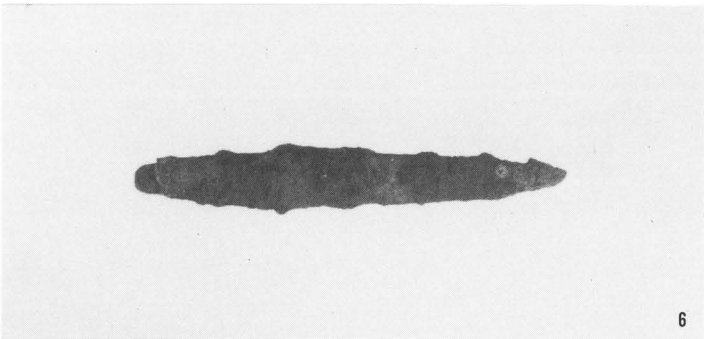




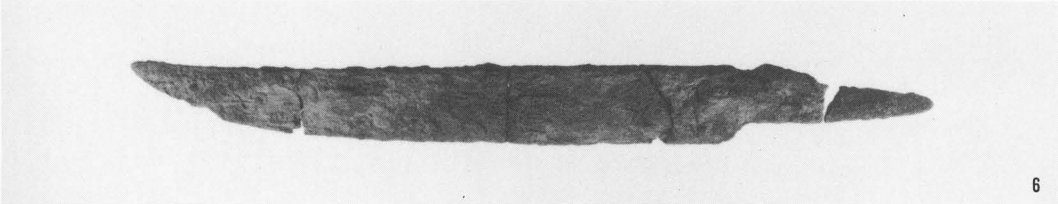
4　ＳＴ02出土須恵器・土師器



1　ＳＤ02出土銅鏃



2　ＳＫ09出土鉄刀子

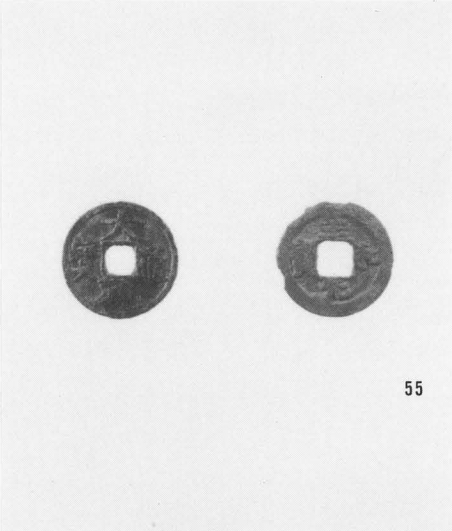


3　ＳＴ02出土鉄刀

4　同上鉄鎌

5　同上鉄斧頭

6　同上鉄錐



7　ＳＫ13出土大観通宝、ＳＸ03出土至和通宝

長田神社境内遺跡発掘調査概報

1990. 3. 31

発行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

印刷 梶原出版印刷合資会社

神戸市灘区城ノ内通1丁目4番13号

広報印刷物登録・平成元年度第233号（A－6類）